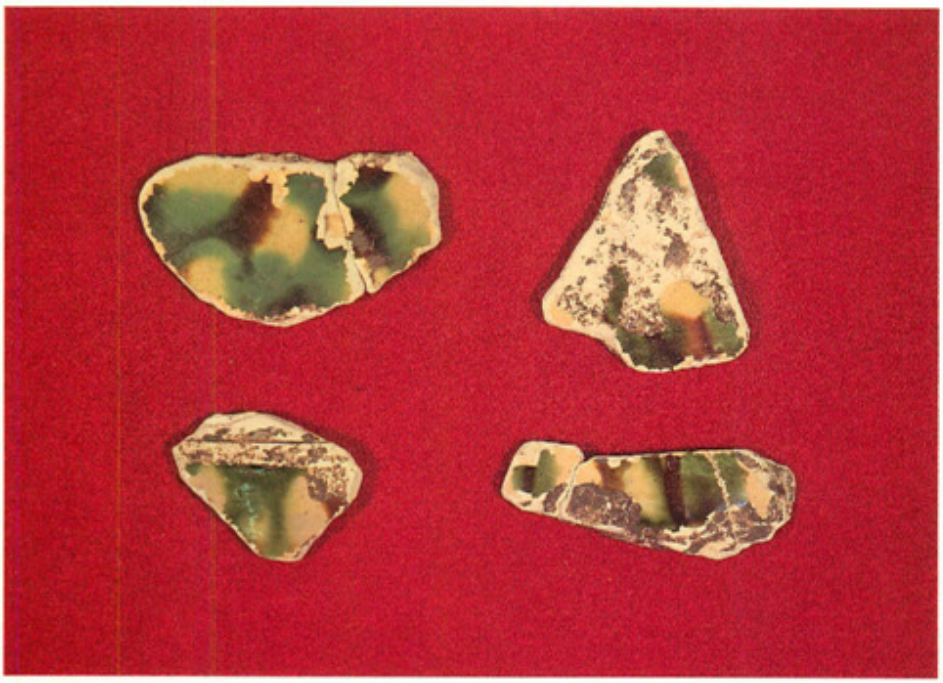
三重県斎宮跡調査事務所年報1980

史跡　斎宮跡

発掘調査概報

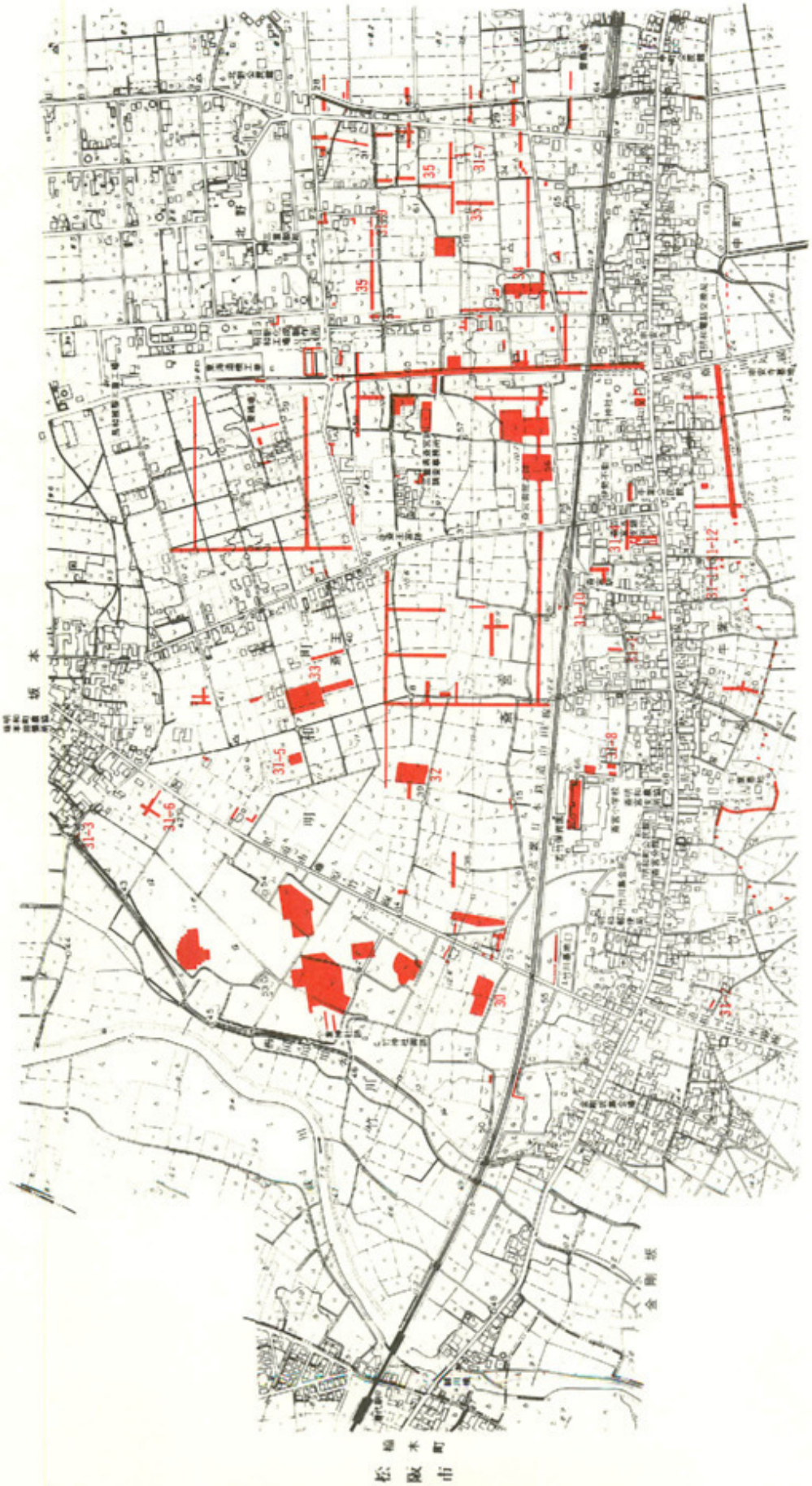
昭和56年3月

三重県教育委員会
三重県斎宮跡調査事務所



三彩陶器　第30次調査出土

昭和55年度発掘調査地区



はじめに

いつかまた斎(いつき)の宮の斎(いつき)かれて
注連(しめ)の御内に塵を払はむ

この歌は、西行法師が「伊勢に斎王おはしまさで年経にけり、斎宮、木立ばかりさかと見えて、ついがきもなきやうになりけるを見て」詠じたものと、山家集下巻に記されております。

昭和54年３月斎宮跡が国の史跡に指定され、同年４月当調査事務所が現地に設置されて以来、はや２か年が経過しようとしています。

140ヘクタールという広大な注連の御内において、その学術的な塵払いは、今日までに約60,000平方メートルに達しますが、全体的には、わずか４パーセントに過ぎず、文献上斎宮の中核とされている内院・中院は、その位置さえも未だ解明されていないのが現況であります。

しかしながら、この２か年の調査の成果は、注連の御内が時代により移行していること、とりわけ奈良時代は史跡の西側に、平安時代は東側に、それぞれ位置していたことが明確となってまいりました。

ここにご報告申し上げます昭和55年度の発掘調査は、昭和55年３月策定された「史跡斎宮跡保存管理計画書」に基づき、昭和57年度において公有化するかしないかを決定する地区（準公有化地区66ヘクタール）の性格を把握するための調査に主眼をおいて実施したものであります。

調査にあたり、種々の有益なご指導を賜った斎宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文化庁、明和町の関係機関、さらに快く調査地を提供いただいた地元関係各位に心から感謝の意を表する次第であります。

最後に、一日もはやく学術的な塵払いを進め、注連の御内に斎の宮が再現できますよう関係各位の一層のご指導とご協力を念願して、発刊のご挨拶とさせていただきます。

昭和56年３月

三重県斎宮跡調査事務所長
佐々木　宣　明

目　　次

Ⅰ　調査の経過……1
Ⅱ　第30次調査……3
Ⅲ　第32次調査……11
Ⅳ　第33次調査……19
Ⅴ　第34次調査……30
Ⅵ　第35次調査……39
Ⅶ　第31次調査（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）……51
Ⅷ　調査事務所要覧……58

例　　言

1．本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和55年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。

2．第Ⅶ章は、明和町教育委員会が国庫補助金を受け調査主体となっておこなった現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は斎宮跡調査事務所が担当した。

3．遺構実測図作製にあたっては、国土調査法による第６座標系を基準としている。方位の標示は真北（Ｎ５°40′Ｅ）を用いた。

4．遺構標示記号は次の通りである。

ＳＢ；建物　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＥ；井戸　ＳＡ；柵

5．斎宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏、椙山女学園大学教授久徳高文氏、京都府立大学教授門脇禎二氏、名古屋大学教授楢崎彰一氏、皇学館大学助教授渡辺寛氏の指導を得た。

6．本概報の執筆、編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、佐々木宣明、山沢義貴、大西素行、吉水康夫、倉田直純があたり、野呂美絵子がこれに協力した。

I 調査の経過

史跡斎宮跡の昭和55年度の発掘調査は、計画調査として第30次、第32次、第33次、第34次の面的調査と中町北部のトレンチ調査を実施したほか、明和町教育委員会が調査主体となり三重県斎宮跡調査事務所が発掘調査を担当する個人住宅新築等に伴う現状変更緊急調査をおこなった。調査の期間は、昭和55年5月6日から昭和56年2月17日まで、調査した面積は約9,000㎡である。

計画調査は、昭和54年度に策定された保存管理計画による準公有化地区（C地区）の昭和57年度見直しに対応するため、今年度も、未調査地区の多いC地区を中心に調査地点を選び面調査を実施した。第30次調査は、古里地区南部の竹川字中垣内地内で5月から7月まで実施し、奈良時代と鎌倉時代の各種遺構を検出し三彩陶器片を発見した。第32次調査は、公有化地区（A・B地区）と古里地区の中間部の遺構状況を明らかにするため、公有化地区の最も西側の字塚山地区で、7月から9月まで実施した結果、平安時代前半を除く各期の掘立柱建物と奈良時代の方形周溝等の遺構を検出した。9月から12月にかけては、斎王集落の西側の字篠林地区で第33次調査をおこない、奈良時代から平安時代の掘立柱建物、竪穴住居、井戸等を検出した。第34次調査は12月から2月にかけて実施した。調査地点は中町北部の昨年度のトレンチ調査で大型建物が確認された西加座地区で、平安時代各期の掘立柱建物を多数検出するとともに、200点におよぶ緑釉陶器を発見した。

トレンチによる調査は、中町集落北方の西部と南部については昨年度調査したが、今年度は、未調査地区である中央部と北部について延長約400mを実施した。調査時期は作物の少い冬期をえらび、第34次調査と平行しておこなった。調査の結果、奈良時代から鎌倉時代にいたる掘立柱建物をはじめ各種遺構が検出されたが、区画を示す溝が多数みつかり、しだいに宮域東部の様相が明らかになってきた。

個人住宅新築等に伴う現状変更緊急調査は12件の申請箇所について調査した。調査地点は宮域全体におよぶが、準公有化地区（C地区）で5箇所、準住宅地区（D地区）で6箇所、住宅地区（E地区）で2箇所あり、平均調査面積は約110㎡である。なお、第31－4次調査と第31－10次調査は、調査費原因者負担の調査である。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考
30	6ABJ—M·X·W	1,470㎡	55.5.6～55.7.28	明和町竹川字中垣内382—1他	副田修也	計画的面調査C地区
31—1	6ADO—M	64	55.5.10～55.5.20	明和町斎宮字内山3038—13	岩見哲人	個人住宅に伴う緊急調査D地区
31—2	6ACP—I	24	55.5.21～55.5.23	明和町竹川字南裏 227—2	鈴木正博	個人住宅に伴う緊急調査D地区
31—3	6ABD—A	54	55.5.24～55.6.4	明和町竹川字古里 588—4	北藪和弘	個人住宅に伴う緊急調査C地区
31—4	6ADQ—T	444	55.6.9～55.7.16 56.1.28～56.2.6	明和町斎宮字牛葉3018—2	百五銀行	銀行店舗建設に伴う緊急調査D地区
31—5	6ACC—G	192	55.7.28～55.8.11	明和町斎宮字塚山3338—3	水谷明生	個人住宅に伴う緊急調査C地区
31—6	6ABO—X	204	55.9.17～55.10.17	明和町竹川字古里 576—1	池田幸生	個人住宅に伴う緊急調査C地区
31—7	6AGI—L	51	55.10.28～55.11.17	明和町斎宮字東加座2427—1	竹内重雄	個人住宅に伴う緊急調査E地区
31—8	6ACN—G	150	55.12.11～55.12.22	明和町斎宮字広頭3388—1・5・8・9	森　惇	個人住宅に伴う緊急調査D地区
31—9	6AGD—L	64	56.1.7～56.1.16	明和町斎宮字北野2487—1	中川　司	個人住宅に伴う緊急調査C地区
31—10	6ADM—O	22	56.1.16 56.1.20	明和町斎宮字内山3043—3	近畿日本鉄道	プラットホーム拡張に伴う緊急調査E地区
31—11	6ADT—I	6	56.2.9	明和町斎宮字木葉山304—2	澄野広作	個人住宅に伴う緊急調査D地区
31—12	6ADT—J	6	56.2.9	明和町斎宮字木葉山304—7	宇田定男	個人住宅に伴う緊急調査D地区
32	6ACE—D·E·F	1,150	55.7.29～55.9.18	明和町斎宮字塚山3347他	明和町	計画的面調査A・B地区
33	6ADE—C·D他	2,450	55.9.16～55.12.7	明和町斎宮字篠林3161他	中西久郎他	計画的面調査C地区
34	6AFK—F·G·H	1,080	55.12.10～56.2.17	明和町斎宮字西加座2725他	山路和生他	計画的面調査C地区
35	6APE他	1,550	55.12.10～56.2.17	明和町斎宮字西前沖2633他	岡田　隆他	計画的トレンチ調査C地区

第1表　昭和55年度発掘調査地区一覧表

II　第30次調査

6ABJ—M·W·X（中垣内地区）

本調査区は「史跡斎宮跡」の所在を追求する範囲確認調査を実施する端緒ともなった古里B地区の南約 200mに位置し、地番は明和町竹川字中垣内 382—1他である。

これまで付近で行なった発掘調査には古里地区の調査のほか、県道南藤原・竹川線を挟んで東 100mで昨年実施した第27次調査（東裏地区）などの面調査や、町道新設・個人住宅新築等に伴なって実施した小規模なトレンチ調査数ヶ所などがある。

今回斎宮跡西部の遺構の広がりと、古里地区との関連等を知るために調査を実施した。その結果竪穴住居15棟、掘立柱建物5棟、土坑15ヶ所のほか井戸、柵（？）や多条の溝等多くの遺構を検出し、その大半が奈良時代と鎌倉時代のものであった。

（I）弥生時代の遺構

一部で奈良時代の竪穴住居が重なるが、直径約 5.8mの円形を呈する竪穴住居（SB1653）1棟を調査区北東隅で検出した。埋没土中より出土した土器片から弥生時代中期の竪穴住居であると考えられる。同様の時期の竪穴住居は古里C地区でも検出されているほか弥生時代中期の土器片は古里の各地区で出土している。

古里地区を中心とした台地西辺に立地する弥生時代集落が当地区付近まで広がっていたものであるといえよう。

（II）飛鳥時代の遺構

調査区北西隅で検出した方形の竪穴住居（SB1615）1棟がある。一部調査区外にのびるため全容は不明であるが、長辺約8m、短辺5mの方形を呈する。部分的に途切れる周溝をもち、東壁にカマドを有する。カマド中央には平底筒型の土器を倒立させた支柱を検出した。

付近は地山に礫が露頭し遺構の切り合い関係はやや不明瞭であるが、飛鳥時代の須恵器等が散見されることからこの時期と判断した。この時期の竪穴住居も古里地区ではC地区、D地区を中心に多数検出されている。

（III）奈良時代の遺構

今回の調査で検出した遺構のうちこの時期と考えられるものが最も多く、竪穴住居13棟、掘立柱建物5棟、土坑9ヶ所、柵、溝等がある。

竪穴住居13棟はいずれも1辺4m～5m前後の方形を呈しているが、柱掘方の明瞭なものは見られなかった。竪穴住居の重なり合う部分での切り合い関係は、SB1645→SB1644→SB

1643、ＳＢ1654→ＳＢ1655といった順序で建てられたものであることを把握した。

一方構造の上では、ＳＢ1654で部分的に周溝を検出したほかＳＢ1665とＳＢ1670の２棟ではカマドを検出した。ＳＢ1665のカマドは北壁に位置し、中央に長い河原石１個を立てた支柱をもつ。またこの部分で完形品を含み、現位置でつぶれたものと考えられる土器数点が出土している。ＳＢ1670では北壁中央に炭化物の混じる焼土面を検出した。支柱石等は遺存しなかったもののカマドと考えられる。ＳＢ1666の北東隅ではほぼ完形の甕など数点の土器が集中して出土した。焼土などカマドを想起させるものは認められなかったもののＳＢ1665のカマドを除いて他の竪穴住居には見られなかったものである。

掘立柱建物は調査区西端で４棟、中央部で１棟の計５棟を検出した。

斎宮跡中央部に多い方位にのる建物に類似するものはＥ３°Ｎの棟方向を示すＳＢ1617の１棟のみで、他はいずれも古里地区を中心とした斎宮跡西部の建物群に類似して大きな角度をもつ棟方向を示す建物である。このうちＳＢ1616はＥ37°Ｓの棟方向を示し、ＳＢ1620はこれと直交するＮ37°Ｅの棟方向を示す。またＳＢ1616の妻通りとＳＢ1620の東側柱列とがほぼ直線に並び、４間×２間であるＳＢ1616の柱間もＳＢ1620との柱通りを意識してかこれにあわせて東の２間のみが広くなっている。２棟の建物の間隔もまた、4.8ｍと両者の梁行と同じ数値を示しており２棟の建物が同時に関連を持って建てられたことをうかがわせるものといえよう。

また調査区中央で確認したＳＢ1647もＮ41°Ｅと他の建物に比べＳＢ1616・ＳＢ1620に近い棟方向を示している。ＳＢ1621はＮ18°Ｅの棟方向を示すが調査区外にのび桁行の規模は不明である。柱掘方の重なりはＳＢ1616とＳＢ1617、ＳＢ1620とＳＢ1621がそれぞれ一部の柱掘方で切り合い、ＳＢ1616がＳＢ1617より古く、ＳＢ1620がＳＢ1621より古いことを確認した。

奈良時代の土坑９ヶ所のうち７ヶ所はいずれも直径２ｍ前後の不整な円形又は楕円形を呈するものである。ＳＫ1629・ＳＫ1630・ＳＫ1631及びＳＫ1628はＳＢ1620・ＳＢ1621の近くに、ＳＫ1656・ＳＫ1657・ＳＫ1658はＳＢ1647の近くに集中することから建物との関連の可能性も考えられよう。またＳＫ1646は３棟の竪穴住居ＳＢ1643・ＳＢ1644・ＳＢ1645と重なって検出したものである。西半部が調査区外にのびるものの一辺約４ｍあることから竪穴住居である可能性も考えられたが、隣の調査区に延長部分が見られないことから土坑とした。

柵ＳＡ1674は柱間にやや一定しないところもあるが、2.8ｍ前後でＮ31°Ｅの方位をもって一直線にのびるものである。柱穴の切り合い関係からＳＫ1629・ＳＫ1631より先行するものと考えられる。掘立柱建物にこの柵列と同じ方位を示すものはなく、浅く小規模な溝ＳＤ1638がほぼ同様の方位を示すのみである。

溝は小規模なものを含め13条ある。ＳＤ1618・ＳＤ1622・ＳＤ1624・ＳＤ1627・ＳＤ1632・ＳＤ1633・ＳＤ1635・ＳＤ1648・ＳＤ1649・ＳＤ1662・ＳＤ1663・ＳＤ1664・ＳＤ1668であり、

第１図　第30次遺構実測図　（１：200）

このうちＳＤ1635は幅約70cm、深さ約60cmと小規模ながらしっかりした溝である。ＳＢ1616・ＳＢ1620の棟方向と類似したＮ38°Ｅの方位を示しておりこれらの建物との関連も考えられるが、８ｍの間隔をへだてて並行する溝ＳＤ1622がＳＢ1616と重なることがこの掘立柱建物と溝との関連を考えるうえで疑問といえよう。またＳＤ1633はＮ15°ＥとＳＢ1621に近い方位を示しており、これと関連するものとも考えられよう。

（Ⅳ）平安時代の遺構

本調査区で検出した遺構・遺物の大半は奈良時代及び鎌倉時代のものであり、平安時代の遺物は非常に少なく、遺構も土坑１ヶ所と溝２条を検出したのみである。

土坑ＳＫ1673は平安時代中葉と考えられ 3.5ｍ×３ｍほどの略楕円形を呈するもので、遺構検出面から約 1.9ｍの深さで底に達する。掘り下げの当初は井戸かとも考えられたが、古里地区をはじめとする周辺の井戸調査例、水位の深さ、地山の砂礫の多い地層等を考慮すれば井戸としてとうてい機能しない深さであり土坑とした。このように２ｍに近い深さの土坑は斎宮跡では他に例を見ないものであり、遺物の出土も少なく、これと同時期と考えられる遺構も無いことからその性格は不明である。

溝はＳＤ1641と小規模なＳＤ1671がある。いずれも平安時代末葉と考えられ、ＳＤ1641は鎌倉時代の溝ＳＤ1642と重複し、方位はＮ22°Ｅを示す。平安時代の他の時期と同様これらの溝に伴なうと考えられる建物等の遺構は何ら検出できなかった。

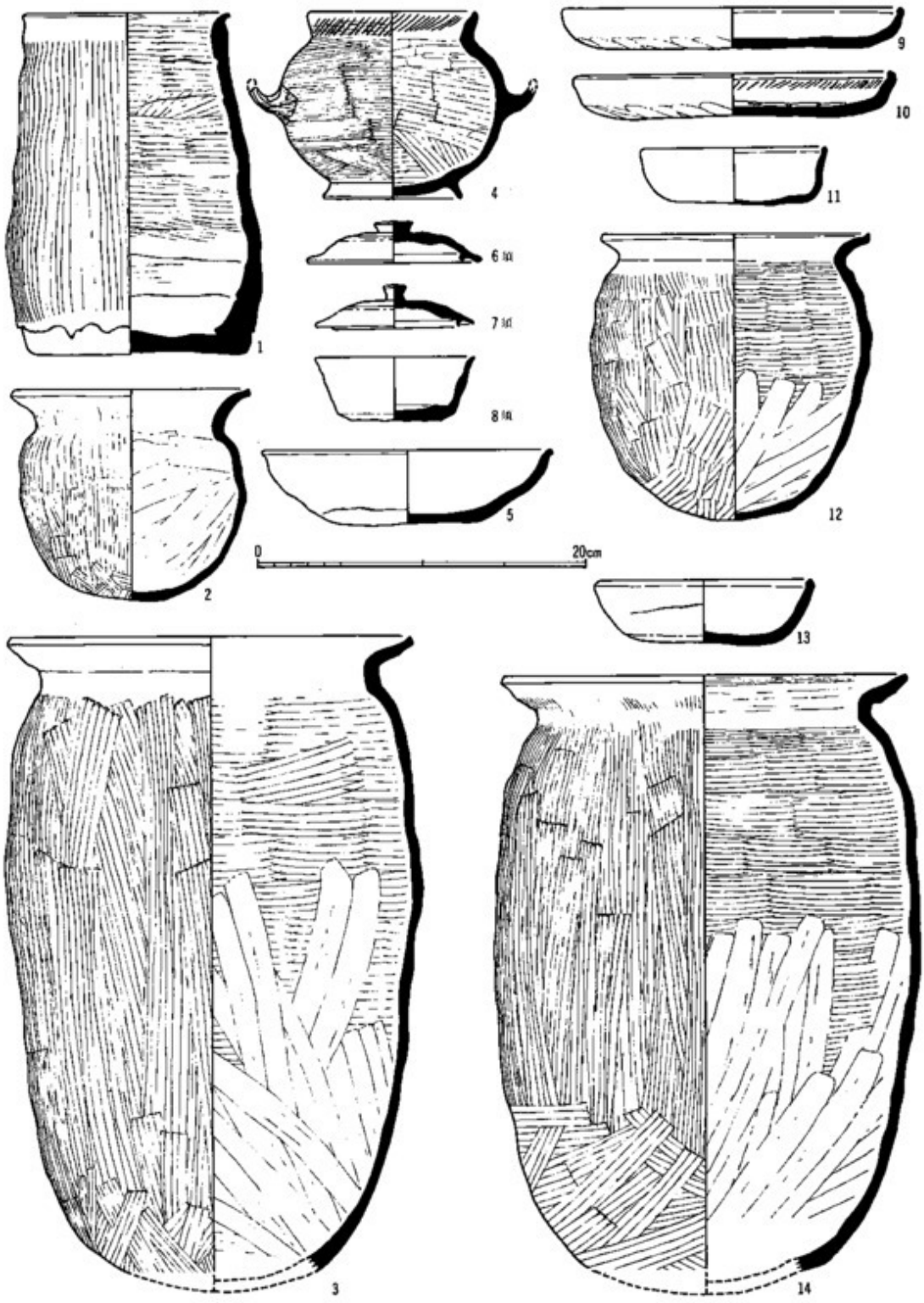
（Ⅴ）鎌倉時代の遺構

掘立柱建物等は検出されなかったが、土坑４ヶ所、井戸１基、溝３条を検出した。

土坑は４ヶ所のうちＳＫ1636、ＳＫ1637、ＳＫ1659は径 1.5ｍ前後、深さ10cmほどの小規模なものであり、遺物の出土も少ない。ＳＫ1660は隣地境界の畔下にのびるため全容は不明であるが、約 3.2ｍ× 1.7ｍほどの長楕円形を呈するものでやはり遺物の出土は少ない。

井戸ＳＥ1651は奈良時代の竪穴住居ＳＢ1650と重複して検出したものである。このため井戸上面では不明な点もあるが、径３ｍ、遺構面からの深さ約20cmほど掘り下げたのちその中央に径約 1.5ｍの井戸掘り方が見られた。ＳＢ1650を切り込んで掘られているためか井戸の埋没土中からは鎌倉時代の遺物とともに奈良時代の土器片も多数出土した。

一方溝ではＳＤ1639、ＳＤ1642、ＳＤ1661の３条であるが、いずれもＮ20°Ｅの方位を示す。このうちＳＤ1661は長さ約10ｍ、幅80cm、深さ20cmたらずの小規模な溝であるが、ＳＤ1639は幅約 1.5ｍ、深さ50cm前後の比較的しっかりとした掘り方をもつ溝で、調査区を横断するものである。またＳＤ1639から５ｍの間隔をへだてて東側に並行する溝ＳＤ1642も幅等は隣地境界の畔で不明であるものの深さ等の形状は類似するものであり、両者は並存するものと考えられることから２条の溝に挟まれた幅５ｍの部分は鎌倉時代における道路跡と考えられ、２条の溝



第２図　第30次出土遺物　ＳＢ1615、1～8　ＳＢ1650、9～12　ＳＢ1665、13・14

はこれに伴なう側溝であると思われる。

（Ⅵ）遺　物

本調査区で出土した遺物の大半は奈良時代のものが占め、平安時代の遺物は遺構と同様わずかに散見されるのみである。このためか緑釉陶器の出土はわずかに１点のみであり、近鉄斎宮駅周辺以東の平安時代の遺構、遺物の多い地区とは緑釉陶器の出土から見ても様相を異にするものといえよう。一方今回の調査による特殊な出土遺物に三彩陶器片と瓦等があげられよう。古里地区の試掘調査以後10年に及ぶ斎宮跡の発掘調査でこれまで緑釉陶器片の出土は約1400点にも及び、二彩陶器片も出土している。しかし三彩陶器片４点の出土は小片ながら斎宮跡において初めての出土であり、奈良時代の斎宮における当中垣内地区の重要性を示すものといえよう。いずれも小片で不明な点が多いが壺の肩部及び胴部と蓋の破片と考えられ、調査区の北東の区画である6ABJ－W地区の包含層、柱掘方等から出土したものである。

また瓦は忍冬唐草文の軒平瓦片１点のほか若干の平瓦片が出土している。これまで古里Ｂ地区で軒平瓦片２点のほか非常に少数ではあるが、付近に出土していることが知られている。

（Ⅶ）まとめ

古里地区を中心とした台地西辺における遺構の状況等を知ることを主たる目的の一つとした今回の調査では弥生時代中期の竪穴住居１棟を検出した。同様の時期の竪穴住居やその他の遺構、古墳時代後期の古墳跡を検出した古里地区、本調査区の南西約 700ｍに位置し方形周溝墓の検出された金剛坂遺跡など祓川にのぞむ台地西辺には弥生時代においても点々と集落が営まれており斎宮成立以前の当地域を知るうえでも重要な資料といえよう。

奈良時代の建物遺構として竪穴住居と掘立柱建物とがあり、遺構の切り合い関係からは竪穴住居が先行するものであるということは古里地区や昭和54年度に発掘調査を行なった東裏地区でも確認されており、今回の調査でも掘立柱建物と重複する竪穴住居はＳＢ1619の１棟のみであるが、同様に竪穴住居が先行するものであることを確認した。

また調査区西部に集中する掘立柱建物４棟は柱掘方の重複関係等からＳＢ1616とＳＢ1620が並存し、かつ先行することを確認している。ＳＢ1617とＳＢ1621とは柱掘方の重複が無いため確認できないが、棟方向の角度が時期に比例して小さくなるものと考え得るならば、ＳＢ1617が新しいものと考えられ、ＳＢ1619→ＳＢ1616・ＳＢ1620→ＳＢ1621→ＳＢ1617の時期的配列が考えられる。本調査区の数少ない掘立柱建物であるＳＢ1616・ＳＢ1620がわずか２棟とはいえ規格的な建物配置を示すことを考慮すれば、ＳＢ1619からＳＢ1616及びＳＢ1620への時期が奈良時代における斎宮の変遷についてひとつの画期を示すものと考えられよう。

またＳＢ1616・ＳＢ1620の棟方向とほぼ類似した方位を示す溝ＳＤ1635は小規模ながら一定区域を画する溝であることも考えられるがこれと並行するＳＤ1622がＳＢ1616と重複する点が

疑問として残る。

一方奈良時代の出土遺物としては古里地区で締脚硯の破片や大型土馬が出土しているのと同様、わずか4点の小片とはいえ三彩陶器片が出土していることは奈良時代の斎宮において当地区が重要な一画を占めていることを示しているものと考えられよう。

鎌倉時代の並行する2条の溝ＳＤ1639・ＳＤ1642に挟まれた幅5ｍの道路は直線と仮定して北に延長すれば、古里Ａ地区の西を経て古里Ｂ及びＥ地区の間に至るものと考えられる。古里Ｂ・Ｅ両地区では竹神社跡地北側から宮域中央部に至る通称古里古道と呼ばれる道路跡が検出されている。今回検出した溝もほぼ同時期と考えられることから古里古道との関連も考えられよう。

以上のような調査結果から斎宮跡西半部は奈良時代の斎宮が所在した地域である可能性が一層高まり、中垣内地区はその重要な一画を占める地区であることが明らかになったものといえよう。

Ⅲ　第 32 次 調 査

6ACE—D・E・F（塚山地区）

塚山地区では、今までに昭和49年に第8－9次調査（Nトレンチ）、同51年に第12－1次調査（2Aトレンチ）が行なわれている。2Aトレンチ調査では平安時代の掘立柱建物2棟、瓦器の風字硯を出した土坑等が、Nトレンチでも2棟の掘立柱建物が発見された。平安時代の官衙地区が宮域中央部から当地区まで及んでいることが推定されたが、その実態はほとんど不明であった。

また、当地区一帯は、宮域中央部と古里地区との中間点に当ることから、奈良時代と平安時代の遺構が交錯していることも予想され、それぞれの時期の遺構状況を把握することも急務であった。

南に隣接する広頭地区を画する農道沿いには、古里B・E地区より東方へ続く古道の側溝があるものと予想されており、調査は、2Aトレンチの東端部を字界まで拡張し、南北に細長い調査区（24m×47m、1150m²）を設定して実施した。

調査の結果、奈良時代から鎌倉・室町時代に至る各時期の遺構を検出したが、その大半は奈良時代と平安時代のものであった。特に平安時代の遺構には、廂をもつ建物2棟を伴う13棟の掘立柱建物が含まれており、官衙地区の広がりを把握する上で重要な手がかりを得た。

（Ⅰ）奈良時代の遺構

竪穴住居（SB1725）、掘立柱建物（SB1700）、方形周溝2基（SX1685、SX1699）と土坑（SK1681～SK1683、SK1727、SK1819）を検出した。

SB1725は、4.2m×3.7m、深さ28cmの長方形を呈し、北壁にカマド、東壁北端部に貯蔵穴を伴う。長軸の方位はN20°Eであった。出土遺物には、須恵器大甕1、土師器の杯2、甕4、長甕6個体があり、貯蔵穴内には長甕1個体が横転した形で出土した。

SB1700は一辺が5.6mの総柱建物で柱掘方は径80cm、深さ50cm内外であった。重複するSX1699より新しく、奈良時代後半のものと推定される。

方形周溝SX1699は一辺が10mの隅丸方形を呈し、溝は幅1m、深さ20cm～42cmで、底部に凹凸があり、隅の部分がやや浅い。SX1685は、SX1699より大型のものと推定されるが、溝の様子はSX1699に類似する。軸方向は共にN40°Eで2基が東西に並列する。遺物はSX1699より土師器甕、椀、高杯、かまど、須恵器高杯が出土。椀2個体はほぼ完形であった。

これらの遺構は、出土遺物や切り合い関係より方形周溝→竪穴住居→総柱建物の順に新しい

ものと推定される。

土坑は5ヶ所に検出した。北西端のＳＫ1681～ＳＫ1683は切り合い関係が不明であり、同時期のものであろう。ＳＫ1727、ＳＫ1819は、長径 2.8ｍで深さはそれぞれ30cmと43cmを測る同規模の土坑であるが、ＳＫ1819の東壁は風倒穴で破壊されている。遺物は、ＳＫ1729より土師器椀、杯、こしき、甕の細片が整理箱に１箱、ＳＫ1819は少量であったが長甕や椀の完形に近いものが出土した。

（Ⅱ）平安時代前半の遺構

単独する土坑 ＳＫ1718を検出しただけであった。狭い調査区ではあったものの、この時期の遺構だけが希薄であるという特徴的な傾向がみられた。ＳＫ1718は径 1.2ｍ、深さ45cmで土師器杯、椀が各２個体と長甕や甕、須恵器杯蓋片等が出土した。

（Ⅲ）平安時代中葉の遺構

この時期に比定されるものが最も多く、掘立柱建物８棟（ＳＢ 408、ＳＢ1680、ＳＢ1690、ＳＢ1695、ＳＢ1713、ＳＢ1715、ＳＢ1720、ＳＢ1721）、柵列２（ＳＡ1693、ＳＡ1694）、土坑12（ＳＫ 407、ＳＫ 410、ＳＫ1687、ＳＫ1697、ＳＫ1698、ＳＫ1704、ＳＫ1708、ＳＫ1709～ＳＫ1712、ＳＫ1714）を検出した。

建物は、規模及び配置状況等で柳原・御館地区で検出されたものと類似している。

規模については、３間×２間を基本単位とするもので、４間×２間（ＳＢ1695）や５間×２間（ＳＢ1720）と推定されるものが各１棟づつ混じる。柱間は棟方向が異なるＳＢ 408が梁行 2.2ｍ、桁行 2.5ｍを測るが、他は全て２ｍ～ 2.1ｍに統一されている。ＳＢ1680は５間×４間の建物であるが、四面廂をもっており斎宮跡での初例として重要な意味をもつものであろう。

棟方向ではＳＢ 408が方位に乗るものであるが、他はいずれも北で東へ大きく偏る。しかし、ＳＢ1720のＮ 8°ＥからＳＢ1695のＥ 4°Ｓまでの範囲におさまるものであり、宮域中央部と同様の統一性がみられる。中でもＳＢ1680、ＳＢ1690、ＳＢ1715の３棟はＥ 5°Ｓに復元されるものであり一時期の関連する建物配置を示している可能性もある。

これらの建物群は、一定の場所に密集しており数回に及ぶ建て替えがあったことが推定されるものの、前後関係はほとんど不明であったが、出土土器よりＳＢ 408が最も古いものと推定される。

ＳＡ1693、ＳＡ1694は共に柱間がやや不揃いであり、かつ全容も不明であったが一応柵列とした。方向はＳＡ1694がＥ 5°Ｓ、ＳＡ1693がやや東へ偏るが共にＳＢ1690の棟方向と一致する。

土坑は小型のものが多い。深さも浅いものが多く、ＳＫ1698、ＳＫ1709のように10cmまでの浅いくぼ地状のものから、ＳＫ1687、ＳＫ1712の40cmまでであった。また出土遺物の多い土坑にＳＫ1710、ＳＫ1711があるが他の土坑は微量であった。ＳＫ 410、ＳＫ1709～ＳＫ1712は土

第３図　第32次遺構実測図　（１：200）

師器の杯、椀、鉢、甕に灰釉陶器、製塩土器が混じり、ＳＫ1710、ＳＫ1711には緑釉陶器や黒色土器の細片や炭が混入していた。また、ＳＫ 407からは、土師器の各種土器と共に緑釉陶器椀、瓦器風字硯が出土している。ピット状土坑ＳＫ1714からは底部外面に「北」と墨書された灰釉陶器椀１点が単独で出土した。

これらの土坑の分布状況や出土遺物はＳＢ1680をはじめとする同期の建物群の性格に相応するものであろう。

（Ⅳ）平安時代後半の遺構

この時期に比定されるものに掘立柱建物（ＳＢ 409）と土坑（ＳＫ1696、ＳＫ1701、ＳＫ1707、ＳＫ1729）がある。

ＳＢ 409は６間×３間で南面と東面に廂をもつ。廂幅は南面 2.5ｍ、東面 2.7ｍで身舎部分よりやや広い。身舎柱掘方は径80cmを測り大型である。棟方向は、E12°Sで平安時代中葉の建物に比べて東への偏り方が大きく、平安時代末葉の建物に近い。

土坑は４ヶ所で検出したが、いずれも出土遺物が少ない。ＳＫ1707は 4.8ｍ× 1.8ｍ、深さ25cmの隅丸長方形で、ＳＢ 409との前後関係は不明であった。出土土器は、土師器の各種土器や灰釉陶器の細片に混じり、ＳＫ1707より瓦器の椀、ＳＫ1729より製塩土器片が出土した。

（Ⅴ）平安時代末葉の遺構

掘立柱建物３棟（ＳＢ1705、ＳＢ1723、ＳＢ1724）、溝10条（ＳＤ1688、ＳＤ1691、ＳＤ1692、ＳＤ1702、ＳＤ1703、ＳＤ1706、ＳＤ1717、ＳＤ1726、ＳＤ1728、ＳＤ1734）、土坑５ヶ所（ＳＫ1730～ＳＫ1733、ＳＫ1735）を検出した。

掘立柱建物３棟はいずれも南北棟であるものと推定される。ＳＢ1724が４間×２間、他の２棟は３間×２間であろう。

平安時代中葉と比べて柱掘方が小さく、棟方向はＳＢ1705のN12°EからＳＢ1723のN15°Eまでに統一されているが、東への偏りが大きくなる傾向がある。調査区南西端にまとまっており、同時期の溝であるＳＤ1692やこれに直交するＳＤ1728、ＳＤ1702等の溝の方向にほぼ一致する。

溝は多いがその大半は調査区をN10°Eの方向で南北に横断するＳＤ1692に関連するものと考えられる。

ＳＤ1692は40ｍを確認。南端は鎌倉時代から室町時代のＳＤ1736～ＳＤ1738で、北端は現代溝で切断される。幅は北半で１ｍ、南半は狭い。深さは北半で20cm、南半が10cm内外であった。ＳＤ1702、ＳＤ1703、ＳＤ1728はＳＤ1692に直交する。ＳＤ1702は２条が並走するが、北側の１条は底部がＳＤ1703に連なっている。ＳＤ1728はＳＫ1732を切断して東方へ延びているが、西端部はＳＤ1702と同様に、ＳＤ1692より西へ10ｍ延長して途切れている。いずれもＳＤ1692に伴いながら同期の建物群を区画するものであったことも想定される。

なお、これらの溝と同方向のものにＳＤ1726、ＳＤ1734がある。またＳＤ1717は方向をやや違えるものの規模がＳＤ1692と同程度であり、中央部でＳＤ1692より分岐していた可能性がある。

土坑は全て調査区南東隅にかたまっており同期の溝より古いものであった。

ＳＫ1732は幅３ｍ内外の溝状土坑で、深さは 0.7ｍ～１ｍを測り底部は凹凸が多い。壁面は崩れて内湾する。大型であるわりに遺物は少なく、土師器皿類の完形品や灰釉陶器椀や山茶椀の細片も出土した。周囲にあるＳＫ1730、ＳＫ1731、ＳＫ1733は浅くて土器の出土量も微量のものであったが、ＳＫ1730からは使い捨てを語る多量の土器が出土した。ＳＫ1730は 1.7ｍ×1.4ｍ、深さ45cmの小型の土坑であるが、土器の総数は約 393個体を数えた。その内訳は土師器小皿 360（高台のつくもの24）、皿８（高台皿３）、椀９、杯４、高杯１、鉢１、鍋２の他に黒色土器小椀２、灰釉陶器小椀２個体であった。高台をもたない完形品の皿 282個体の約半数には、内底から口縁部内外面にかけて油煙が付着しており、燈明皿として使われ大量に捨てられたものであろう。

（Ⅵ）鎌倉時代から室町時代の遺構

調査区南端部の農道沿いで検出した３条の溝は、ＳＤ1737が鎌倉時代に、ＳＤ1736、ＳＤ1738が室町時代に廃棄されたものと推定される。

これらの溝は古里Ｂ・Ｃ地区やＰ・Ｉ・Ｌトレンチ調査で確認された古道の北側の側溝に当るものである。２条が並走するものであるが、北側のＳＤ1736は深く、底部に土坑状の凹凸が多い。出土遺物は土師器の皿、鍋、山茶椀、練り鉢、常滑甕、天目茶椀、青磁椀等の細片があり、ＳＤ1738の底部より布目瓦や須恵器の甕の細片が出土している。ＳＤ1737は深さ約50cmの溝でやはり前述の２条に並走する。

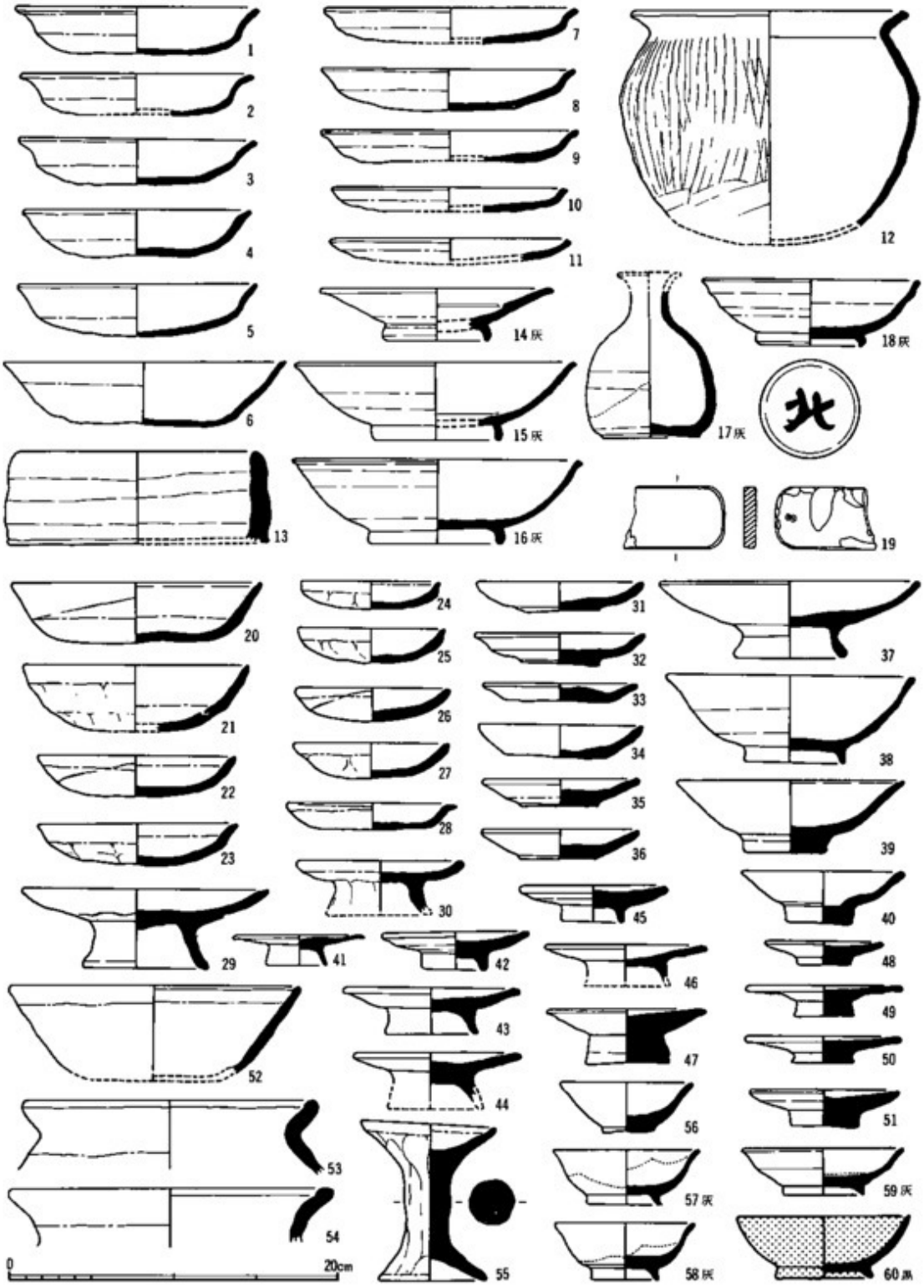
平安時代末葉の建物や溝の方向は、これらの溝とほぼ同方向であり、平安時代末葉頃より一貫して道を意識した側溝があったことが推定される。

なお、ＳＤ1736、ＳＤ1738の上面には桟瓦を含む礫層が20cm～30cm堆積しており、近年まで溝状の凹部があったことも考えられる。

（Ⅶ）まとめ

本調査区で検出した奈良時代の方形周溝、竪穴住居、掘立柱建物は、今年度の第33次調査区でも検出されている。同様の遺構は古里Ｃ地区で多数が確認されており、これら遺構の分布状況を把握する上で新たな資料になるものであった。

竪穴住居、掘立柱建物は共に１棟ずつであったが、奈良時代の建物跡を中心とする遺構群が古里地区から概むね宮城中央部西辺にまで及んでいることを示している。この時期の掘立柱建物は平安時代のものに比べて重複して密集することが少ないこともあり、ＳＢ1700に関連する



第４図　第32次出土遺物　ＳＫ1711、１～17　ＳＫ1714、18　包含層、19　ＳＫ1730、20～60

建物は調査区外の近辺にあるものと予想される。

方形周溝は第33次調査区でも３基が確認され、過去の調査で検出した８基を含めて、６地区に12基を数える。古里Ｃ地区の５基が古墳時代であり、他の６基はいずれも奈良時代に比定され埋没した時期が一定しない。しかし、その規模は全容が不明なものが多いものの直径20ｍ内外の大型のものと、10ｍ内外の小型のものに大別される。また、分布状況では、第22－１次調査区（斎宮小学校）の１基は近辺に３基の円形周溝を伴い他地区では２基以上が群集する傾向が認められる。

平安時代の遺構は時期的に平安時代前半が途切れており、第33次調査区と良く似た状況であった。しかし、その後は平安時代末葉にかけて多数の掘立柱建物が重複して建て替えられ、かつ棟方向も各時期ごとによく統一されている。これらの状況は宮域中央部以東の建物群に通ずる計画性をうかがわせている。

ところで、建物を棟方向でみると字宮ノ前以東の建物は、平安時代末葉の建物に北で東へ３度～６度程度偏るものが混じるものの、それ以前のものは真北から西へ３度内外までのものが多い。しかし、Ｎトレンチの２棟やＩトレンチの４棟はいずれも今次調査区で検出したものと同様、北で東へ偏る度合が大きいものであった。これは宮ノ前と塚山・篠林地区との字界付近以西より造営計画の地割りが多少変更していることを示すものではなかろうか。

なお、今次調査区では２棟の廂付き建物が検出されたが、１棟は斎宮跡で初例の四面廂であった。瓦器風字硯、石帯、96点を数える緑釉陶器片、ＳＫ1730の皿を中心とする一括土器等の出土遺物は、これらの建物と相対するものと思われ、当地区が官衙地区の一部であったことを特徴づけている。

今次調査により当地区一帯は斎宮寮の成立から終末期にかけての各種遺構が埋蔵されており、斎宮跡の全容を解明する上できわめて重要な一帯であることが明らかにされた。

Ⅳ　第33次調査

6ADE—D・L　6ADF—L（篠林地区）

篠林地区は、東で楽殿、西で塚山、南で宮の前と字界をなし、国史跡指定範囲においては、宮域中央部よりやや北寄りに位置する。

かって篠林地区では、宮ノ前との字界に沿って設けられた昭和49年度の第８－１次調査（Ｆトレンチ）において 103片もの緑釉陶器が出土しており、又建物を区画すると考えられる溝が幾条か検出されている。これらの溝と宮域北部を走るとされる推定大溝との中間にあたる今回の調査地は、これまで一度も面的な調査が及ばなかった所であり、資料的に空白地帯に近かったので、広く調査をして、本地区の宮域全体における占める位置、性格付け等を明らかにすることが早急な課題とされていた。

調査は、面調査とトレンチ調査を併用し、合わせて2450㎡にわたり実施した。以下地区ごとにその概要を述べることにする。

（Ⅰ）６ＡＤＥ－Ｄ地区

畑の畦方向に沿って東西34ｍ、南北53ｍの調査区を設定し、1802㎡を調査。その結果、竪穴住居19棟、掘立柱建物14棟、土坑32、井戸２、溝５、方形周溝１、円形周溝１を検出した。

〔奈良時代の遺構〕竪穴住居18棟、掘立柱建物４棟、土坑15、井戸１、溝４、方形周溝１がある。

竪穴住居は平安時代後半としたＳＢ1809を除き、すべてこの時代のもので、特に調査区北部で著しい重複状況がみとめられた。竪穴住居の平面プランは長方形を呈するものが多く、その規模は最小で７㎡、最大で40.8㎡で平均18㎡前後である。主柱穴の確認された建物はＳＢ1760、ＳＢ1762、ＳＢ1785だけで他では認められなかった。カマドは18棟中、12棟に焼土面の高まりとして認められた。又カマドの施設としてＳＢ1759では径14㎝、高さ26㎝の中空の土製支脚を、ＳＢ1785、ＳＢ1796では支柱石を設けていた。

竪穴住居の前後関係については、埋土の切り合い及びカマドの残り具合等から判断して、ＳＢ1757→ＳＢ1759→ＳＢ1758、ＳＢ1757→ＳＢ1760→ＳＢ1761、ＳＢ1781→ＳＢ1782→ＳＢ1785の順であることを確認した。

ＳＢ1758はＳＢ1759と東壁を共有しており、ＳＢ1759の拡張と考えられる。同様なことは北に拡張が認められるＳＢ1785についても言える。

ＳＢ1762は一部版築状の床面が残存しており、貼り床を構築していたものと考えられる。

掘立柱建物はすべて調査区の北部で検出。4間×2間のＳＢ1752、3間×2間のＳＢ1751、ＳＢ1780、調査区外へのびて規模の不明なＳＢ1771がある。これらはＳＢ1752を除いて、いずれも時期的に竪穴住居より後出であることが埋土の切り合い関係より確認された。

ＳＢ1752は、東側柱列の北から3番目の柱掘方が竪穴住居ＳＢ1754に切られており、これに唯一先行するものである。同掘方埋土内より鉄斧が出土している。

建物の規模は、このＳＢ1752が一辺80cm～90cmの方形ないし楕円形の柱掘方をもち、比較的大型の建物である。他は径50cm前後の円形柱掘方をもつ規模の小さい建物である。

一方棟方向では、建物間にばらつきがあり、同時期に存在した建物の抽出は難しい面があるが、ＳＢ1752とＳＢ1771は共に北に対し東へ9°ほど偏っており、同時存在の可能性がある。

妻柱の柱掘方は、側柱に対して浅いのがふつうであるが、ＳＢ1751の北側妻柱やＳＢ1752の南側妻柱などは、極端に浅いということも特徴としてあげておきたい。後述する平安時代後半の掘立柱建物の中でＳＢ1794の東側妻柱などは、柱掘方が浅かったためか検出できなかったものもある。

土坑には平面プランが円形を呈するＳＫ1756、ＳＫ1764、ＳＫ1767、ＳＫ1770、ＳＫ1778、ＳＫ1783、ＳＫ1789、ＳＫ1791、ＳＫ1799と方形を呈するＳＫ1786、ＳＫ1787、ＳＫ1803～ＳＫ1805、ＳＫ1820とがある。これらの内調査区南部で検出したＳＫ1820は最大で、4ｍ以上×3.5ｍ、深さ30cmを測る。出土遺物には土師器甕・杯・皿・高杯・かまど、須恵器杯・杯蓋・高杯・皿等各種のものがあり、量的に豊富で良好な一括資料である。ＳＫ1820は一応土坑としたが竪穴住居の可能性もある。その他の土坑からはあまり遺物が出土していない。量的に乏しいながらも全体を通じて、土師器杯・皿・甕類の出土が目立つ。

井戸ＳＥ1800は一辺 2.3ｍ前後の砂礫層を掘り込んだ方形素掘り井戸で、周囲に東西 3.7ｍ、南北 3.9ｍの範囲で15cmほど掘りくぼめた平担部をもっている。壁面の残りが従来検出された井戸に比べ良好で、地山面より 3.7ｍまで掘り下げ粗い目の砂礫層に達した。まだ還元層に達していないので底である確証はないが、壁面の残りが比較的良好なこととも考えあわすと、当時湧水層に達しなかったため、井戸掘りを断念し、井戸としての機能を果たさなかったものとも考えられる。遺物の大半は井戸の最上層から出土した。

溝には東西溝ＳＤ1773、ＳＤ1774、ＳＤ1813、南北溝ＳＤ1812がある。ＳＤ1773とＳＤ1774は幅 0.4ｍ～ 0.6ｍ、深さ6cm～15cmの浅い溝で、心々距離 2.0ｍを測る並行溝である。ＳＤ1813はＥ6°Ｓの方向を示し、幅 0.7ｍ、深さ5cm～15cmで22ｍまで確認できた。竪穴住居ＳＢ1816より新しい。ＳＤ1812はＮ0°の方向を示し、幅1ｍ前後、深さ10数cmで調査区の南に延びる。

方形周溝ＳＸ1810は幅1.0ｍ～ 1.8ｍ、深さ5cm～22cmの浅い溝で、部分的に途切れるが、

第５図　第33次遺構実測図　６ＡＤＥ－Ｄ　（１：200）

ほぼ方形に一周する。中央部に古墳の主体部らしきものが検出されたが、遺物は全く出土しなかった。周溝南部のコーナーで土師器胴長甕、須恵器甕が出土し、又他のどこからも古墳時代の遺物が出土していないところから奈良時代のものとした。

〔平安時代前半の遺構〕 検出し得たのは、掘立柱建物ＳＢ1753と土坑ＳＫ1797のみである。

ＳＢ1753は３間×２間の南北棟で、奈良時代としたＳＢ1752、ＳＢ1755と比べ、規模的に何ら遜色のない大型の建物である。

〔平安時代中葉の遺構〕 掘立柱建物ＳＢ1755のみ検出した。周囲に奈良時代の竪穴住居が多数存在することもあって、柱掘方埋土には、奈良時代の土器が多く含まれていたが、１点だけ平安時代中葉の土師器杯が入っていたのでこの時期の建物とした。

〔平安時代後半の遺構〕 竪穴住居１棟、掘立柱建物６棟、土坑３、柵列１がある。

竪穴住居ＳＢ1809は、出土遺物より平安時代後半の建物としたもので、宮域全体の中でも同時期の竪穴住居は極めて少ない。

掘立柱建物には、総柱で倉庫と考えられるもの（ＳＢ1784、ＳＢ1822）と身舎のみの住居と考えられるもの（ＳＢ1792～ＳＢ1794、ＳＢ1807、ＳＢ1815、ＳＢ1818）とがある。後者では調査区外へのびて規模の不明な建物もあるが、すべて桁行３間～２間、径40cmほどの柱掘方をもつ小規模な建物と考えられる。建物の棟方向は南北棟のＳＢ1807を除き、すべて東西棟で、大半が北に対し東へ偏る建物である。

柵列ＳＡ1802は、ピットが東へ５間分、南へ４間分並ぶので一応柵列としたものである。柵列の方向と一致する建物がないので建物との関係は不明。

土坑には円形を呈する土坑がある。径１ｍ前後で出土遺物の少ない小土坑（ＳＫ1769、ＳＫ1779）と径 1.7ｍで、土師器杯・皿・椀が多量に出土したＳＫ1795がある。いずれも深さは地山面より12cm前後と浅い。

〔平安時代末葉の遺構〕 掘立柱建物２棟、土坑11、溝１、円形周溝１がある。

掘立柱建物は調査区南部で検出された。いずれも調査区外へのびているが、ＳＢ1818は３間×(2)間の南北棟、ＳＢ1822は３間×３間の総柱建物と考えられる。

土坑には、小土坑（ＳＫ1766、ＳＫ1777、ＳＫ1788、ＳＫ1811）と長楕円形土坑（ＳＫ1772ＳＫ1775、ＳＫ1776、ＳＫ1806、ＳＫ1808、ＳＫ1814、ＳＫ1823）とがある。

長楕円形土坑は長軸 3.1ｍ～ 6.4ｍのものがあり、ほぼ南北軸線上に一定の間隔を置いて並ぶ。長軸方向が平安時代後半～末葉の掘立柱建物の棟方向におよそ平行しており、何らかの建物と関係する施設であろうか。

ＳＤ1824は幅 0.6ｍ、深さ20cmの浅い溝で、遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＸ1819は東側が浅く、西側が深く掘られている溝で、東側で深さ20cm、西側で30cmを測る。

遺構面及び南壁セクションよりみた切り合い関係より東側の溝の方が新しいが、時期的には、出土遺物からすれば大きな差はない。なお、ここでは復元径18.4mの円形周溝と考えたが、単なる溝のコーナー部分である可能性もある。

〔鎌倉時代の遺構〕 井戸1がある。

井戸SE1798は、径 3.2m～ 3.5mの円形素掘り井戸で地山面より約80cmのところから壁面が崩壊し、大きく外側にえぐられている。出土遺物は圧倒的に山茶椀が多く、75個体以上を確認した。

〔室町時代の遺構〕 調査区南壁セクションにより、ごく一部が確認された土坑SK1821がある。埋土内より土師器小皿5枚、鉄刀1が出土しており、中世墓と考えられる。

ところで遺構として検出できなかったが、調査区南東部の黒色土包含層中よりかなりの山茶椀が出土しており、鎌倉時代の住居址等が存在した可能性もある。

〔遺　物〕 遺物は平箱で 168箱出土した。この内竪穴住居に伴うものが約⅓を占めている。そのため日常食器としての土師器杯・皿、煮焚具としての甕類が圧倒的に多い。SE1800とSK1820、SK1795で、それぞれ奈良時代と平安時代後半の比較的良好な一括資料が得られた。なおその詳細な編年的位置付けについては後日に譲ることにしたい。

緑釉陶器は20片出土。ほとんど椀と思われるが、1点だけ唾壺の肩部が含まれている。大半が調査区南部の遺物包含層から出土したものである。

墨書土器はSB1750出土のものが1点だけある。土師器杯底部に書かれたものであるが判読不明。

その他、特殊なものとして、前述の鉄斧、鉄刀に加え、遺物包含層中からも鉄斧1、土馬頭部が出土している。

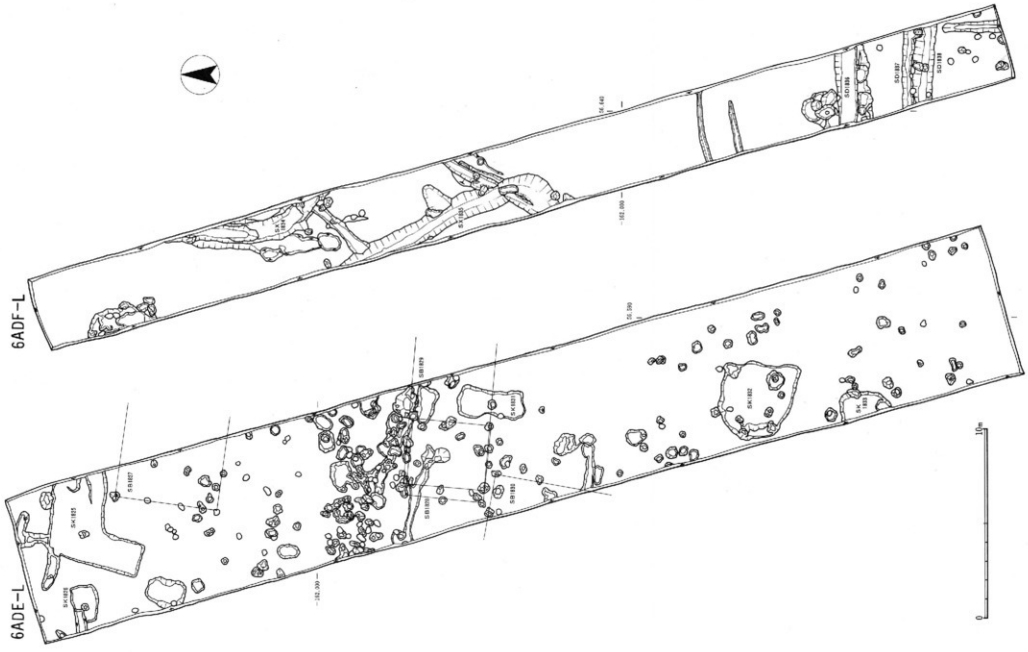
（II）6ADE－L地区

面調査を実施した6ADE－D地区の南に続く地区である。巾8m、長さ54mのトレンチを設定し、 432m²調査した。

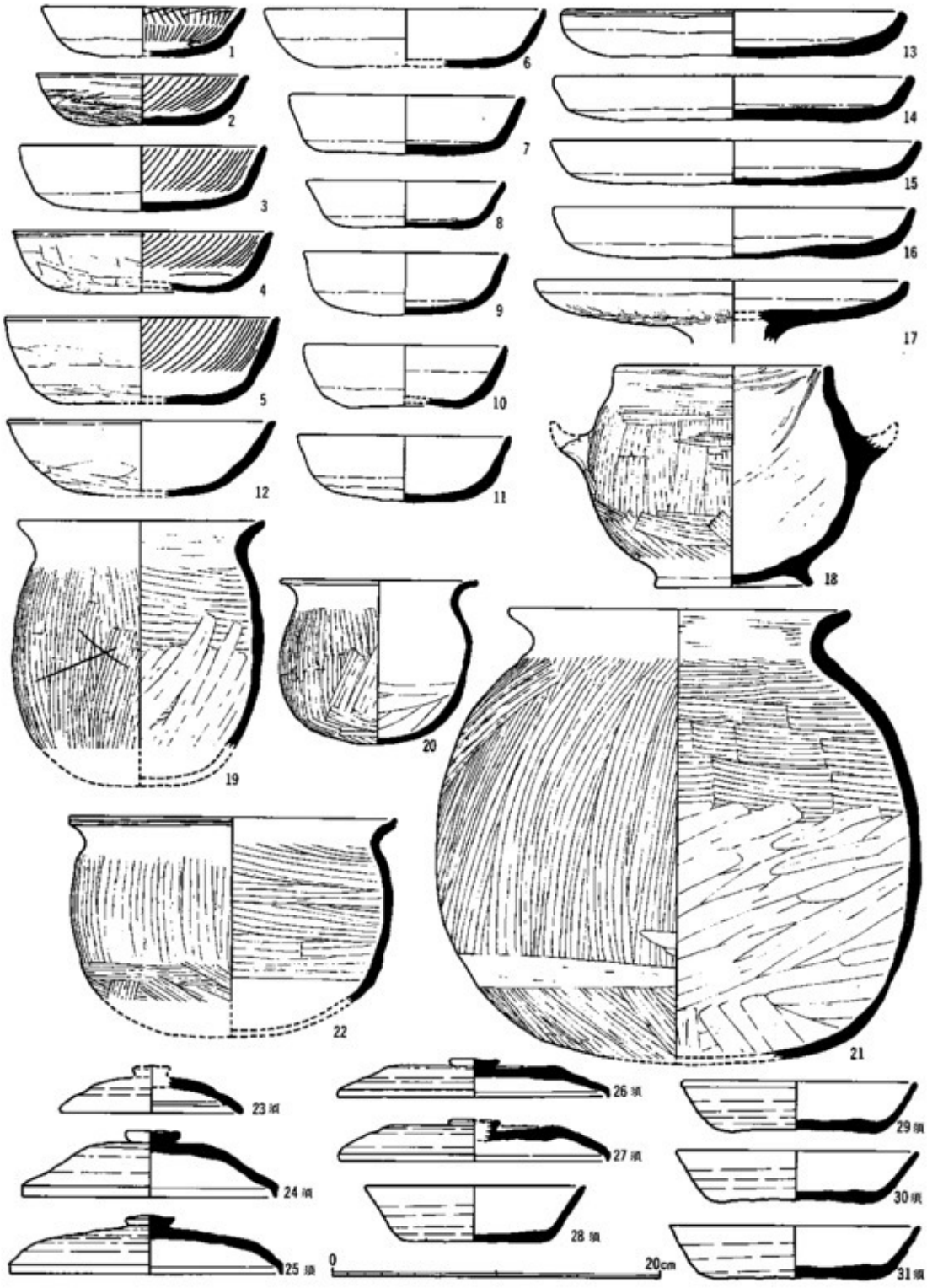
〔遺　構〕 調査の結果、奈良時代の土坑1（SK1825）、平安時代後半の土坑2（SK1832、SK1833）、平安時代末葉の掘立柱建物4棟（SB1827～SB1830）、土坑1（SK1831）、鎌倉時代の土坑1（SK1826）を検出した。

SK1825は巾 1.9m～ 2.9m、深さ15cmのL字形に曲がる土坑で、北東隅で若干の焼土が検出されており、竪穴住居の変形かとも考えられる。

掘立柱建物はSB1828を除き、すべてが調査区外へのびてその全容を知り得ないが、柱掘方の径が30cm～40cmの小規模なもので、棟方向は北に対し東へ5°～10°ほど偏っており、6ADE－D地区で検出された同時代と考えられる建物と同様な規模、棟方向を示している。



第6図　第33次遺構実測図　6ADE－L　6ADF－L　（1：200）



第７図　第33次出土遺物　ＳＥ1800

〔遺　物〕遺物の大半は各土坑より出土したもので、時期的には奈良時代と平安時代後半～鎌倉時代のものに限られている。特にSK1832からは、土師器杯・皿・甕をはじめ、灰釉陶器椀・皿、黒色土器、緑釉陶器など平安時代後半の各種の土器が出土した。ＳＫ1826からは、山茶椀、製塩土器に加え、通称ペラと呼ばれている非常に器壁の薄い土師器が多量に出土した。

緑釉陶器は総数19片出土。その内11片はＳＫ1832から出土したもので、稜椀、椀、皿、壺がある。

（Ⅲ）６ＡＤＦ－Ｌ

６ＡＤＥ－Ｌ地区より東へ55ｍ隔てた畑地に、幅４ｍ×長さ54ｍの南北トレンチを設定し、216㎡調査した。

〔遺　構〕奈良時代の方形周溝２（ＳＸ1834、ＳＸ1835）、平安時代末葉の溝３条（ＳＤ1836～ＳＤ1838）を検出した。

ＳＸ1834は幅1.3ｍ、深さは地山面より51㎝～63㎝を測る。ＳＸ1835は一辺12ｍ以上、幅1.2ｍ、深さ50㎝～80㎝を測る。溝底部近くで須恵器壺片が出土した。いずれもしっかり掘られた溝である。

ＳＤ1836、ＳＤ1837、ＳＤ1838は、ほぼ東西方向に走る溝で、切り合い関係よりＳＤ1837→ＳＤ1838の順である。ＳＤ1836とＳＤ1838は黒色土包含層上面より掘り込まれた溝で、それぞれ復元すると幅1.9ｍ、深さ90㎝、幅1.2ｍ、深さ60㎝となる。両溝の心々距離は約４ｍである。これらの溝は、６ＡＤＥ－Ｌ地区のトレンチ調査では見つかっておらず、西走しながら、ある地点で北か南に折れ曲るものと思われる。

掘立柱建物としての柱掘方は、これらの溝より北では見つかっておらず、当地区が建物群の存在しない空白地帯であることがわかる。

〔遺　物〕遺構が乏しく、遺物もこれに比例して少ない。平箱で２箱分出土。

（Ⅳ）まとめ

当地区で検出された遺構をみてみると、大きくは時期的に２つのピークがある。１回目は奈良時代の竪穴住居、そしてこれに続く掘立柱建物の時期、２回目は平安時代後半～末葉の掘立柱建物の時期である。そしてこれらの中間期にあたる平安時代前半～中葉の時期のものが皆無に等しく、つまり時期的に途切れるという点で、本地区の一つの特徴となっている。

奈良時代の竪穴住居は、宮城西部の古里、中垣内、東裏地区で見つかったものと規模、構造共に類似しており、宮域西部から北部にかけて一連に存在したものと考えられる。

ところで今までに検出された竪穴住居のカマド位置は、東壁に設けられるものが多かったが、今回は北壁に設けるものもいくつか見つかっており、竪穴住居の切り合い関係から当地区においては、北壁にカマドを設ける竪穴住居が先行するという知見を得た。

奈良時代に属する掘立柱建物は、古里地区、東裏地区に次いで多く見つかった。建物の棟方向は北に対し東へ偏るものが多く、しかも10°までにおさまっており、20°以上偏る建物が多い古里地区のものとは、若干棟方向において違いをみせている。同時代と思われる掘立柱建物は、このほかに斎宮小学校の東（広頭地区）で1棟、塚山地区で1棟、牛葉地区西部で1棟あるのみで、これより以東では、現在のところ見つかっていない。それ故、当地区を含む宮域西部は、奈良時代の斎宮を考える上で重要な地区である。

平安時代後半～末葉の掘立柱建物は、今回の調査で12棟検出された。その規模は3間×2間が基本型と考えられる。柱掘方は径40cm前後と小さく、建物の重複状況も疎であり、同一場所で執拗に建て替えの行われた宮域東部の御館、柳原地区、下園地区、中町地区とは、若干性格を異にしている。又この時代の建物の棟方向をみても、宮域東部では北に対し、西へ偏るものがほとんどであるのに対し、当地区や塚山地区では、北に対し東へ偏るものが多い。

こうしたことから当地区は、平安時代後半～末葉にあっては、建物の規模、棟方向、重複状況等の点で宮域中央部から東部にかけての地区と若干異なりを見せてはいるものの、同じ範疇の中でとらえるべき地区と考えられる。

V　第34次調査

6AFK—F・G（西加座地区）

昭和54年度の延長約500mにわたるトレンチ調査のうち大型の柱掘方をもつ掘立柱建物を多く検出した部分の建物群の広がり等を知るために設定した調査区である。これまで当調査区の隣接地3ヶ所で個人住宅建設に伴なう小規模なトレンチ調査を行ない平安時代各時期の掘立柱建物や大型の柱掘方を検出している。

また昭和54年度に約1000㎡の面調査を行なった北東 100mあまりの第24次調査区（6AGF－D）では、規格性をうかがわせる配置をもつ建物群を検出し、同じく昭和54年度に行なった第29次調査（トレンチ調査）のうち当調査区の南西約 100mにあたる6AFL地区では掘立柱建物の大型柱掘方のほか、土師器の杯・皿等を主体としておびただしい量の土器を出土した土坑を多数検出している。

このような周辺の状況から、当地区は御館・柳原地区を中心とする斎宮跡中央部と同様中町地区の他地域とともに、平安時代における斎宮跡にとって主要な一画を占めていることを証する遺構が検出されることは十分に予想されるところであった。

調査の結果大型柱掘方をもつものを含め掘立柱建物26棟をはじめ柵、土坑、溝など平安時代前半から末葉に至る各時期の遺構が多数検出された。

（Ⅰ）平安時代前半の遺構

掘立柱建物15棟のほか柵、溝、土坑等を検出した。掘立柱建物の中には一辺1mを超える大型の柱掘方をもつ建物と30cm前後の小規模な柱掘方のものとがある。棟方向で区別すればE 2°NからE 4°Nを示す建物群とE 2°Sを示す建物群とに大別できるが、E 2°Sを示す建物は調査区北東隅に検出したSB1843とSB1848の2棟のみであるが当調査区の北隣接地で行なった個人住宅建設に伴なうトレンチ調査で同様の方位を示す4間の柱列SB1100が検出されている。

東でやや北に偏る棟方向を示す建物群はわずか2°の範囲に含まれる棟方向であり、多くの重複をもつことからより広域な範囲での建物配置を考慮したうえで時期区分を再整理する必要があろうと思われるが、E 2°Nの棟方向を示す掘立柱建物ではSB1439、SB1854、SB1869の3棟がある。E 3°Nを示す建物にはSB1436、SB1437、SB1440、SB1442、SB1853、SB1861、SB1864、SB1865の8棟があるほか柵SA1855やSD1856、SD1857の溝などが同様の方位を示す遺構としてあげられる。E 4°Nの建物は調査区中央に見られ、SB1438、SB1860の2棟があげられる。このうちE 3°Nを示す建物群の整理・再考を必要とするが、E 2°N

またはE 4°Nのいずれかに組み入れて概観すればE 4°NからE 2°Nへの変遷が考えられるようである。しかしながら同一の方位を示す建物でも重複や近接するものが多いことから建物のセット関係はさらに細分する必要があろう。

また当調査区の掘立柱建物の特徴の一つである大型柱掘方をもつ建物は平安時代前半では調査区中央に集中しており、SB1436、SB1437、SB1438、SB1439、SB1440などがあげられる。

このうちSB1436、SB1437の2棟は西側に隣接する個人住宅建設に伴なうトレンチ調査で延長部分の柱掘方を検出しており桁行の規模はSB1436で3間以上、SB1437で4間であることを確認している。SB1438は3間×2間の身舎に東へ 3.5mの張出しがつくものである。身舎の桁行柱間は不ぞろいで西から 3.0m、 2.5m、 2.5mを測る。SB1440は建替えを想起させる状態でSB1441、SB1442の2棟と重複し、SB1442→SB1440→SB1441の順でSB1441が平安時代中葉であろうことが昭和54年度のトレンチ調査で確認されている。

SB1860は柱掘方はさして大型のものとはいえないが4間以上の桁行と2間の梁行である身舎の南面に 2.5mの廂をもつ東西棟の建物である。このような調査区中央部の建物に比べ調査区南部では比較的小規模な建物を検出した。SB1864は西側の妻通り2間を検出したのみで東の調査区外にのびる東西棟であるが、3ヶ所の柱掘方いずれにも根がための石が認められた。

SB1865はトレンチ調査時にすでに検出済の柱掘方であるが、今回の調査により周囲の状況から建物として確認したものである。またSB1869は今回の調査で確認した平安時代前半に属する建物の中では最も小規模なもので柱掘方も小さい3間×2間の建物である。

その他の遺構ではSA1855の柵がある。柱掘方は小規模であるが柱間 3.0mで溝SD1856に沿って東の調査区外にのびるが、西端はSD1856と同じ地点で途切れている。またSD1856の南側には3mの間隔をもち並行する溝SD1857が調査区を東西に横断している。

さらに調査区の南で実施した昭和54年度のトレンチ調査で検出した溝SD1455もSD1857と27mの間隔をへだてて並行することからこれら柵や3条の溝は一体となって一定の建物群を区画する溝とも考えられよう。

一方土壙ではSK1443、SK1445、SK1863の3ヶ所がある。SK1443とSK1445の一部はすでにトレンチ調査によって検出し、SK1445からは小型円面硯や「万」の字などの墨書土器をはじめ多量の土器が出土している。SK1445は今回の調査によって4m× 3.5m、深さ約60cmのほぼ全体を掘り下げた。その結果前回のトレンチ調査で出土した小型円面硯と同一個体である円面硯や「萬」の確認できるものなど多数の墨書土器をはじめ、土師器の杯・皿等を主体とした多量の土器が出土した。

SK1445は単独で検出したが、土師器の杯・皿等が大半を占めた多量の土器が出土した土壙

は当調査区の南６ＡＦＫ－Ｌ地区で２ヶ所検出したのをはじめ南西約 100ｍの６ＡＦＬ地区では多数群集して検出している。

一方今回新たに検出したＳＫ1863は３ｍ× 1.2ｍの不整形の土坑で比較的多くの遺物が出土したが、ＳＫ1445とは異なり杯・皿類ばかりでなく、甕等も多く含まれている。

そのほか小規模な溝にＳＤ1858、ＳＤ1868を検出した。ＳＤ1868は幅30cm、深さ10cmほどのコの字状に曲がる溝で掘立柱建物に伴なう雨落溝かとも考えられたが、これに該当する建物は検出されず、性格は不明である。

（II）平安時代中葉の遺構

大型の柱掘方をもつもの２棟を含め掘立柱建物９棟、溝１条のほか四脚門と考えられる配置を示す柱掘方を検出した。掘立柱建物の棟方向は平安時代前半の建物と類似し、Ｅ 2°Ｎを示すものにＳＢ1841、ＳＢ1846、ＳＢ1446、ＳＢ1871があり、Ｅ 3°ＮにＳＢ1435、ＳＢ1840、ＳＢ1441と四脚門と考えられるＳＢ1867がある。またＥ 5°Ｎを示す建物としてＳＢ1866とＳＢ1870を検出した。

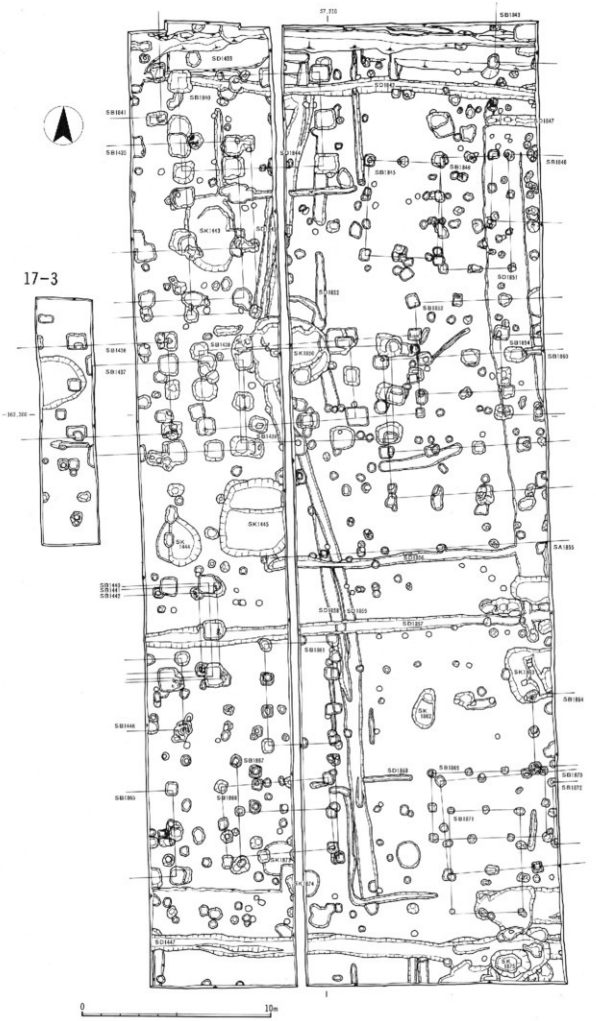
ＳＢ1435は西の調査区外へ延びるため全容は不明であるが、当調査区で最大の規模をもつ建物であると考えられる。梁行２間の東西棟で、東面に 2.9ｍ、南面に 2.6ｍの廂をもつことから西面を含め三面廂になることも考えられる。また廂からさらに東面で60cm、南面で90cmをへだてて柱列が見られることから廂の建替えが行なわれたものかとも考えられる。

ＳＢ1840は柱掘方の一部を前回のトレンチ調査ですでに検出していたものであるが、今回面的に広げた結果３間×２間の掘立柱建物であることを確認した。柱掘方は大型で整然とした方形を呈するが、埋没土に地山の黄褐色土が多く、検出の難しいものであった。

比較的大きな柱掘方をもつ建物としてはＳＢ1441とＳＢ1841がある。ＳＢ1441は各柱掘方に根がため石をもつものですでにトレンチ調査で検出している建物である。ＳＢ1841は調査区北西隅で検出した建物で北と西が調査区外に延びるため全体の規模は不明である。ＳＢ1435、ＳＢ1841の西側隣接地では個人住宅建設に伴なう事前調査を実施しているが、トレンチが小規模であったためか建物の延長部分に該当する柱掘方は検出されていない。その他の建物はいずれも小規模な建物ばかりで全体規模の明らかな建物は全て３間×２間である。

ＳＢ1867は柱間 2.7ｍで並ぶ３本の柱掘方が 5.2ｍへだてて並行する四脚門かと思われる遺構である。昭和52年８月に実施した斎宮小学校の校舎建設に伴なう事前調査でも平安時代後半の四脚門が検出されているが、これは東西に築地塀と２条の溝を伴なって検出されている。これに比べ今回検出したＳＢ1867は柱掘方が四脚門を思わせる配置を示すが、これに伴なう溝・柵列等の遺構は何ら検出されておらず疑問として残されよう。

その他の遺構では幅 1.0ｍ、深さ10cm前後の小規模な溝ＳＤ1849がある。調査区の中央を南



第８図　第34次調査遺構実測図（１：200）

北に蛇行しながらほぼ縦断する。掘立柱建物群が規格性をうかがわせるのに比べやや一定の区画に該当するものとは考え難い溝である。

（Ⅲ）平安時代後半の遺構

この時期の遺構は平安時代前半及び中葉と比べれば比較的少なく、掘立柱建物１棟、土坑５ヶ所、溝等を検出した。

掘立柱建物ＳＢ1845はＮ2°Ｅを示す南北棟である。北側に隣接する個人住宅建設に伴なう事前調査で直交するＥ2°Ｓの棟方向を示す４間×２間で平安時代後半の掘立柱建物ＳＢ1104を検出している。ＳＢ1845の西側柱列とＳＢ1104の東妻の柱列とが13.5ｍへだてて直線上に並ぶことから並存することも十分考えられるものといえよう。

そのほか土坑ではトレンチ調査で検出しているＳＫ1444のほか今回ＳＫ1850、ＳＫ1859、ＳＫ1862、ＳＫ1873、ＳＫ1874の４ヶ所を検出した。この時期の土坑としては最大のＳＫ1850は調査区中央に残した境界の畔の東西にまたがり約４ｍ×３ｍ、深さ50cmほどの不整形な土坑である。その他の土坑は長径２ｍに満たない浅いもので遺物の出土も少ない。

溝ＳＤ1851は幅2.3ｍ、深さ10cmほどの浅い溝で調査区東辺で南北方向に24ｍにわたって検出した。幅に比べ浅いものであるが、一定区画にかかわる溝とすれば調査区以東に関連する建物が遺存するものと思われる。

（Ⅳ）平安時代末葉の遺構

この時期のものと考えられる遺構は非常に少なく、調査区南端で溝ＳＤ1447と土坑ＳＫ1875を検出したのみである。

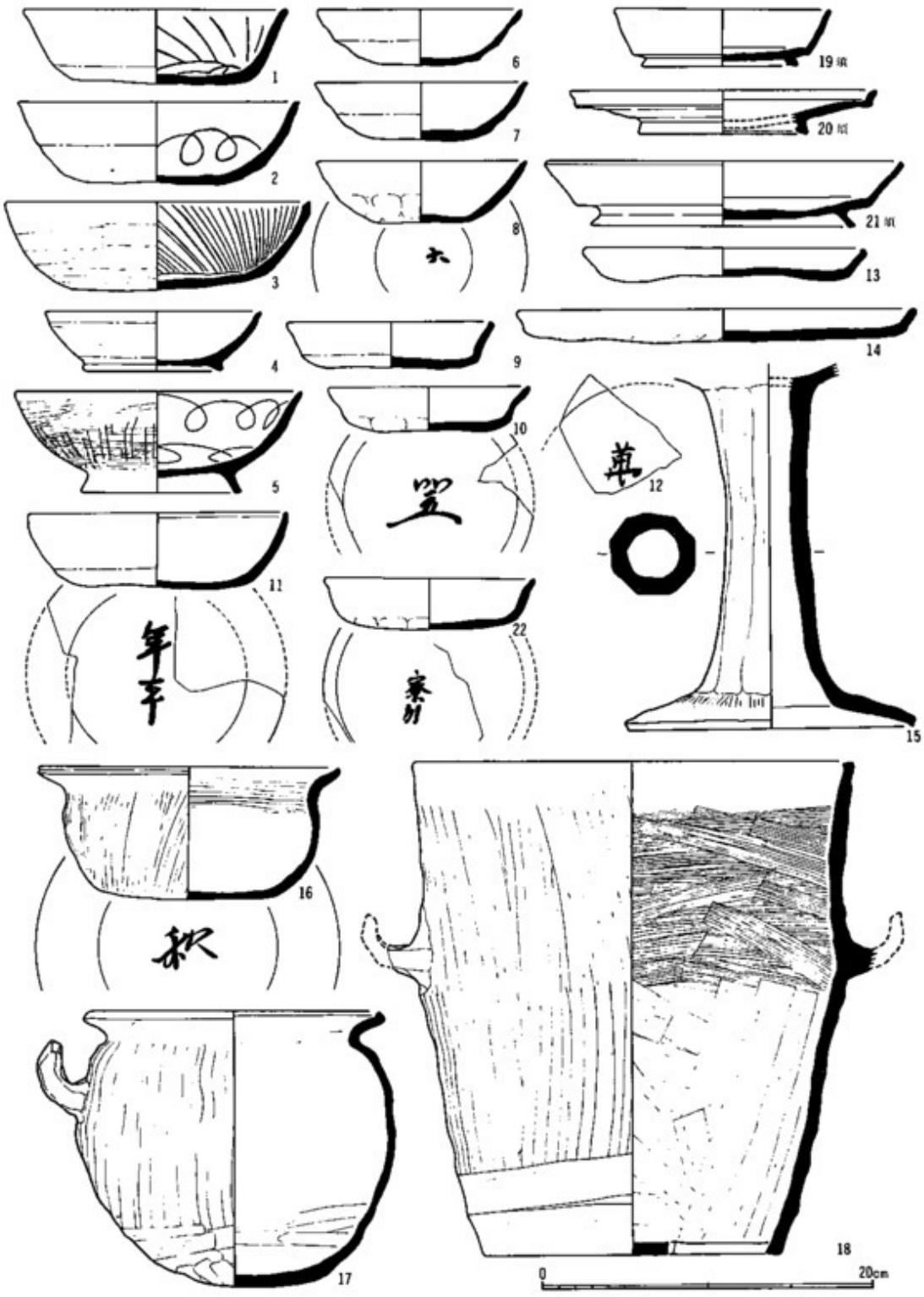
ＳＤ1447はすでにトレンチ調査で検出したものでおよそＥ2°Ｓの方位を示し、東西に調査区を横断している。当調査区の南端から南側に隣する６ＡＦＫ－Ｌ地区にかけてはトレンチ調査によって平安時代前半から鎌倉時代にわたる各時期の東西溝を検出し、長期にわたり斎宮跡における基本的な区画の境界地にあたっていたものと考えられる。

一方土坑ＳＫ1875は調査区南東隅に検出したものである。ＳＤ1447と重複しているが、涌水等のためその前後関係を明らかにすることはできなかった。調査途中には小規模ながら井戸かと思われる深いもので、2.1ｍ×1.5ｍの不整な楕円形を呈し、地山面から約1.2ｍで底に達した。この付近の地山は調査区中央以北と異なり暗黄灰色の粘質土であり、地形もやや底くなっているための涌水が激しかった。

（Ⅴ）時期不明の遺構

おもな遺構としては掘立柱建物ＳＢ1872のほか溝ＳＤ1842、ＳＤ1852等がある。ＳＢ1872は西側の妻にあたる柱掘方３ヶ所を検出したのみの東西棟で棟方向はＥ3°Ｎを示す。

一方ＳＤ1842は調査区北端をわずかに蛇行して横断する東西溝で、幅60cm前後、深さ30cm～



第９図　第34次出土遺物　ＳＫ1445、1～21　ＳＫ1863、22

40cmを測る。ＳＤ1852は非常に浅く、調査区北半の中央を南北方向で約15ｍにわたり断続的にのびる溝である。

（Ⅵ）遺　物

今回の調査区における出土遺物について最初に挙げられることは、昭和54年度のトレンチ調査で24点、今回の調査で 216点、計 240点に及ぶ緑釉陶器片の豊富な出土量であろう。

昭和54年度末現在10ヶ年にわたって行なってきた斎宮跡の約50,000㎡にわたる発掘調査によって出土した緑釉陶器片は 1,422点に及んでいる。そのうちこれまで最も集中して出土した御館地区の出土数は 106点である。今回の調査区における 200点を超える出土量はこれに比べても非常に多いものといえよう。

一方ＳＫ1445では小型円面硯の残片のほか、「大」、「萬」等を含め14点の墨書土器が出土した。昭和54年度のトレンチ調査時にもこの土坑からは「万」等多数の墨書土器が出土している。またＳＫ1863からは「寮口」の墨書土器１点が出土している。ＳＫ1445から出土した大量の土器のうち大半を占めるものは土師器の杯・皿類であり、これとともに土師器の甕・甑・須恵器杯・皿や製塩土器等が含まれていた。

そのほか特殊な遺物として獣脚の一部等が出土している。

（Ⅶ）まとめ

中町地区の重要性の一端を知り得た昭和54年度のトレンチ調査で大型柱掘方をもつ建物群が集中する地区の一つとして、その規模や広がり等の把握を主たる目的とした今回の調査では調査区の条件等から十分とはいえないながら多くのことが明らかとなった。

平安時代前半の遺構では柵ＳＡ1855を伴なうＳＤ1856とＳＤ1857の２条の溝が調査区中央やや南を東西に横断し、大型柱掘方をもつ建物や廂つきの建物は主にこの北側に集中している。これらの建物はその重複や棟方向から少なくとも四時期ほどにわたるものと考えられる。２条の溝はこれら建物群の所在する一定地区を区画するものと考えられよう。また土坑ＳＫ1445は土師器の杯・皿類が大半を占める大量の土器が出土し、墨書土器、製塩土器がこれに伴なっている。同様の傾向を示す土坑は南西約 100ｍの６ＡＦＬ地区でも群集して検出し、大型柱掘方をもつ建物の一部をも確認している。ＳＫ1445は単独で所在するものの、類似した性格を有する土坑であると考えられよう。

平安時代中葉の建物10棟の中で中心となる建物と考えられるのはＳＢ1435である。西半部が調査区外にのびるため確認できなかったが３面廂となることが十分考えられるものである。平安時代前半・中葉を通じて大型柱掘方をもつ建物は３間×２間または４間×２間と柱掘方に比べ小規模な建物である。このような中で廂をもつ大型の建物であるＳＢ1435は当調査区の平安時代中葉の建物群の中では中心的な建物と考えられ、ＳＢ1441、ＳＢ1841の建物配置を考えあ

わせれば、調査区の西を中心とした一時期の建物配置も考えられよう。

ＳＢ1867は四脚門と考えられる遺構である。調査区の西約 800ｍで昭和52年度に実施した斎宮小学校々舎建設の事前調査でも四脚門が検出されている。これは東西に２条の溝が取り付くものであったが、今回のＳＢ1867はこれに取り付く溝・柵等の施設は一切検出できなかった。このような点で疑問が残るが、ＳＢ1840から30数メートルの距離をへだてるものの中心線を揃えて真南に位置し、ＳＢ1867以南の隣接地では昭和54年度のトレンチ調査で溝以外にほとんど遺構のない一定区画の境界地にあたる等の周囲の状況を考慮すれば四脚門と判断し得るものといえよう。

一方緑釉陶器の出土は斎宮跡の中でも特に集中して出土した地区の一つであるが、調査区の中でもその集中する地点が認められる。

緑釉陶器の出土地点を４ｍ×４ｍのグリッド別に分けた場合、その出土地点は調査区のほぼ全域にわたるものの、出土量の多い地点は調査区のほぼ中央を蛇行して南北に縦断するＳＤ1844、ＳＤ1849、ＳＤ1858の溝付近に集中している。遺構検出面の浅い調査区北半では溝の埋没土中から出土するものが多く、遺構検出面の深い調査区南半では溝の属するグリッドの遺物包含層より出土したものが多い。直線を示さず、浅い溝であるがその重要性をうかがわせるものといえよう。

以上のような調査結果から中町地区が斎宮跡の中枢部に近い重要な地域である可能性が一層高まり、当調査区がこれまでの調査で斎宮跡の中心地域とされてきた宮ノ前・上園・下園・御館・柳原の諸地区と同様の重要性を示す地区であることが明らかになったものといえよう。

Ⅵ　第35次調査

（中町地区トレンチ調査）

中町地区一帯の畑地は、これまで遺構、遺物の実態が明確につかめていない地区であったが、昭和57年度には基本的な保全方針を決める管理基準の見直しをすることになっている地区に当る。昨年度に行った第24次、第29次調査により西加座・鍛治山地区を中心とする中町の西辺及び北辺部は、斎宮跡でも重要な地区であることが判明した。

今次調査の主目的は昨年度の調査にひき続き、東加座・西前沖を中心とする中町地区の中央部及び南部の遺構の実態を明らかにすることであった。

調査は幅4ｍ（一部2ｍ）のトレンチ調査で総延長 390ｍ（1550㎡）に及ぶものであった。調査の結果、東西及び南北に延びる区画溝と、これらの溝に画された掘立柱建物跡31棟をはじめ、井戸3基や多数の土坑を検出した。

これらの概要は、小地区ごとに該当するトレンチ別にまとめた。

（Ⅰ）6ＡＦＥ－Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ・Ｐ地区

調査は西前沖の南端部で西加座との字界を通る農道のすぐ北側に東西71ｍの調査区を設定して実施した。

〔遺　構〕当調査区で検出した遺構は、平安時代前半から後半のものは少なく、平安時代末葉から鎌倉・室町時代のものが多い特徴がみられた。

平安時代前半ではＳＫ1876、後半ではＳＫ1877を検出しただけであった。

平安時代末葉の遺構は掘立柱建物4棟、井戸2基、溝4条と土坑5ヶ所がある。

掘立柱建物にはＳＢ1882、ＳＢ1885、ＳＢ1886、ＳＢ1890がある。全て3間×2間の東西棟と推定されるが、ＳＢ1890は総柱建物である可能性もある。柱間も全て 2.1ｍに統一される。棟方向はＳＢ1882が Ｅ4°Ｓ、他の3棟はＥ2°～3°Ｎを示す。

井戸はＳＥ1880とＳＥ1904がある。2基とも円形の素掘り井戸で、ＳＥ1880が径約5ｍ、ＳＥ1904が径約4ｍと推定されるが、共に完掘できず全容は不明である。

土坑はＳＫ1879、ＳＫ1888、ＳＫ1893、ＳＫ1908、ＳＫ1909がある。ＳＫ1879は長径 5.2ｍ、深さ28㎝で中央部に径 2.5ｍ、深さ50㎝のくぼ地を伴う。ＳＥ1880同様の土師器小皿や灰釉陶器椀等が出土。山茶椀が数点含まれる。他の土坑は浅く、土器の出土量も少ない。

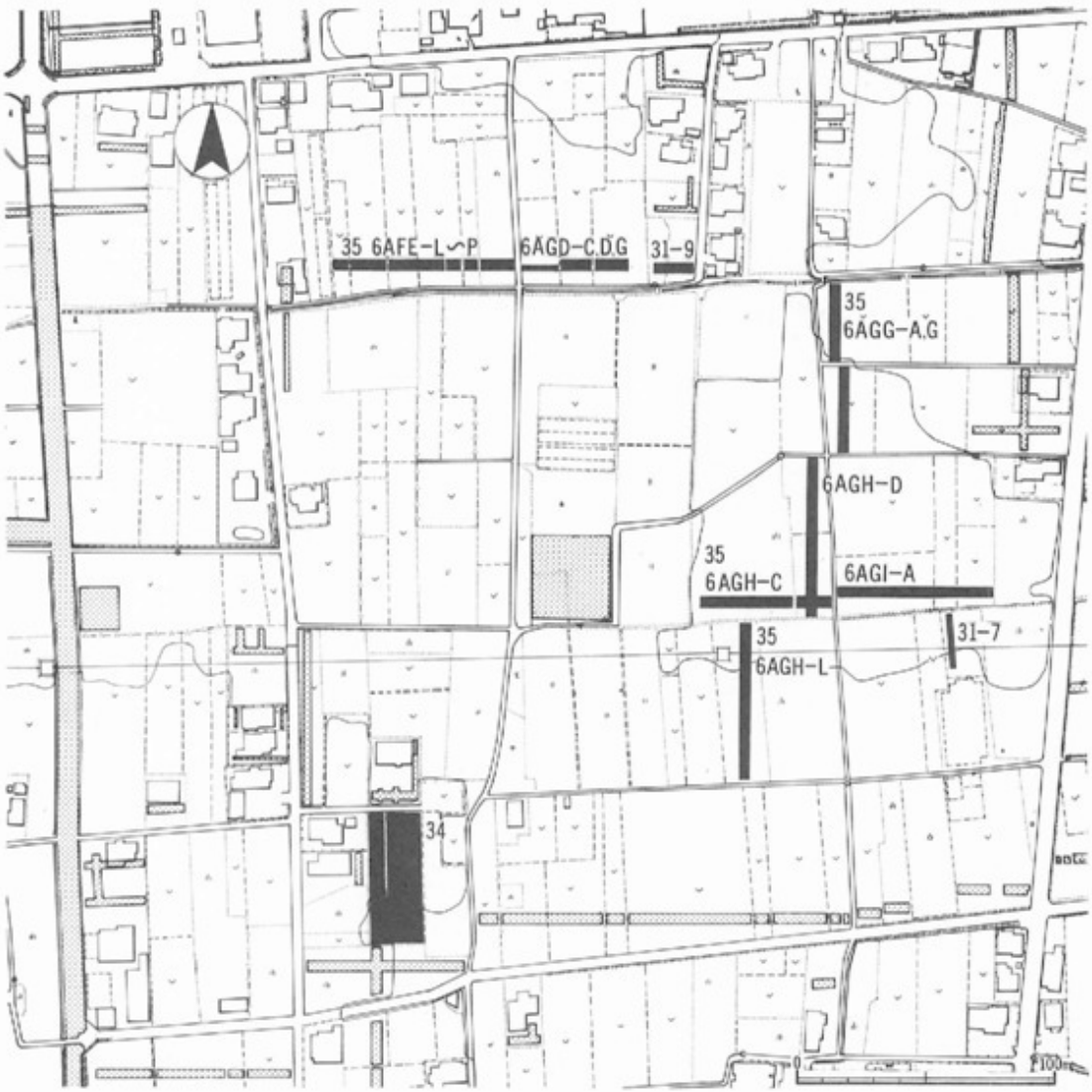
溝はＳＤ1878、ＳＤ1889、ＳＤ1900、ＳＤ1910、ＳＤ1911がある。ＳＤ1878はＳＤ1900の直前から西端部へ続き、深さも西ほど深く西端部で30㎝を測る。方向はＥ4°Ｎを示し、字界の農

道や排水溝の方向と一致する。ＳＤ1910、ＳＤ1911もこれらと同方向の長い東西溝であり、いずれも区画溝であるものと考えられる。ＳＤ1900は前記の東西溝と直交するもので幅 1.2m、深さ50cmを測り底部に凹凸が多い。なお、ＳＤ1900、ＳＤ1910、ＳＤ1911からは土師器の小皿類に混じり、山茶椀や常滑甕片もかなり出土しており、平安時代末葉から鎌倉時代に至る溝であろう。

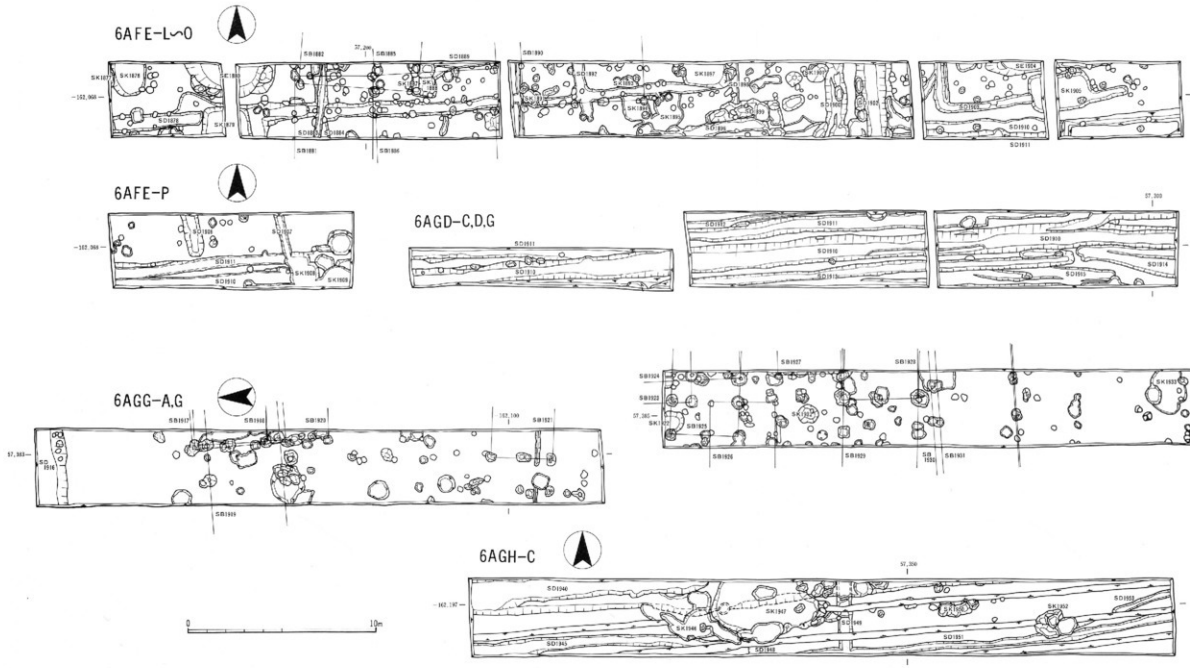
鎌倉時代から室町時代の遺構は、掘立柱建物１棟、溝10条、土坑10ヶ所がある。

掘立柱建物ＳＢ1881は妻柱掘方底部に径10cm大の扁平な石を置いている。柱間は 1.8m で平安時代末葉のものに比べてやや狭い。

溝はＳＤ1883、ＳＤ1884、ＳＤ1892、ＳＤ1896、ＳＤ1898、ＳＤ1902、ＳＤ1903、ＳＤ1906、



第10図　第35次　発掘調査区位置図



第11図　第35次遺構実測図　6AFE－L～P　6AGD－C・D・G　6AGG－A・G　6AGH－C　(1：200)

SD1907がある。SD1902は幅 1.6m、深さ90cmを測る大型の溝であるが、他の溝は狭くて浅いものが多い。溝の方向は平安時代のものと異なる。SD1883以外は東西、南北溝を問わずN 8°～10°W及びこれと直交する方向を示す。これらの溝の大半は調査区内で途切れており北方へ続くものと予想される。

〔出土遺物〕平安時代の遺物はSK1876、SK1879、SE1880より整理箱1箱程度の土器が出土したが、細片が多い。鎌倉時代から室町時代の遺物はかなり多い。SD1896、SK1899、SK1905より厚さ1㎜内外の薄い小皿や折り返し口縁をもつ鍋が多量に出土し、いずれも胎土の粗い山茶椀と青磁片、陶質の鉢を伴出した。なお、緑釉陶器片はかなり多く包含層を中心に18点が出土した。

（II）6AGD－C・D・G地区

前記の6AFE区よりさらに東へ41mを延長した調査区で水田部分のみ幅2mとした。

〔遺　構〕本調査区は、区画の境界部分にあたっており平安時代から鎌倉時代に比定される数条の溝を検出しただけであった。

SD1910の南側には3条の溝が重複する。SD1910→SD1913→SD1914の順に新しく短期間の間に3回程度溝を修復したものと推定される。また、SD1914の南肩は溝の埋土を切りこんでおり、調査区南壁部にもかなり幅の広い溝があるものと推定される。これらの溝の上面は深さ40cmに渡り礫や磁器を伴う現代溝で撹乱されていたが最も残りの良いSD1910は幅 1.3m以上、深さ50cm～70cmを測り東が深い傾向がみられる。

これらの溝は東西に延長し、西は昭和50年のXトレンチ調査区(第9－8次)の中央部を経て広域圏道路(第10次)で検出したSD510へ続き、東はTトレンチ調査区(第9－4次)の南端部をかすめて宮城東端部を画する大溝に続く総延長520mに達する大区画溝であるものと推定される。

なお、SD510は同規模で並走するSD509と共に宮城北端部を画する大溝に続くものであり、調査事務所北方でそれぞれ東西に直角に曲る溝である。また、SD509は調査事務所北側の字界を通り、〝斎王の森〟の前を経て宮の前で古里へ続く古道の側溝につながるものと推定されている。

〔遺　物〕SD1910より土師器の皿、杯類に混じり山茶椀、練り鉢、常滑甕片などが整理箱に2箱出土した。最も新しいものと判断したSD1911には貫入のある陶器片が混じる。

緑釉陶器はSD1910を中心に16点が出土。皿や椀の細片が多い。

（III）6AGG－A・G地区

東加座の中央部で東前沖との字界より南へ約60mに及ぶ調査区を設定した。G区の南北軸はA区より東へ 3.4m隔てて設定した。両区合せて平安時代の掘立柱建物15棟、溝2条、土坑を3ヶ所検出した。

〔遺　構〕平安時代前半の遺構は、掘立柱建物7棟（SB1919、SB1921、SB1928～SB1931、SB1934）と、A区の北端部で検出したSD1916がある。

掘立柱建物はＳＢ1934が不明であるが、他の全ては梁行２間の東西棟であるものと推定される。柱間は２ｍ内外で棟方向も1°～5°程度西へ偏る範囲に統一される。平安時代中葉の建物群と共に、南北方向で一定空間を隔てて密集する傾向がある。

ＳＤ1916は幅 1.6ｍ、深さ70cmで北側は排水溝に接しているものと推定される。前記のＳＤ1910より南側へ約８ｍを隔てて並走する。ＳＤ1910同様に、西は第９－８次調査区（Ｘトレンチ）を経て、第10次調査区（広域圏道路）で検出したＳＤ 291に続き、東は第９－４次調査区（Ｔトレンチ）を経て宮城東端部に達するものと推定される区画溝である。

平安時代中葉の遺構は、掘立柱建物６棟（ＳＢ1917、ＳＢ1918、ＳＢ1920、ＳＢ1923、ＳＢ1924、ＳＢ1925）と土坑を３ヶ所検出した。

ＳＢ1917は桁行３間の南北棟と思われ、他は東西棟と思われる。規模、棟の方向などは平安時代前半の建物に類似する。中葉でも古い時期に比定するＳＢ1924は柱間が2.2ｍでやや大きい。

土坑はＳＫ1922、ＳＫ1932、ＳＫ1933がある。深さは20cm以下。土器の出土量も少ない。

平安時代後半の遺構は掘立柱建物２棟ＳＢ1926、ＳＢ1927がある。柱掘方径が小さく、柱間も1.7ｍで前・中葉のものより狭い。

〔遺　物〕 多量の土器を捨てた土坑がなかったため、土器の出土量は少なかった。ＳＫ1933より土師器の各種土器と共に、黒色土器や製塩土器片が出土した。遺構面が表土下30cmで、包含層も５cm内外であったこともあり、緑釉陶器片はピット内より２点を見ただけであった。

（Ⅳ）６ＡＧＨ－Ｄ地区

６ＡＧＧ区の南端部より西へ約９ｍ隔てた軸線上に設けた南北トレンチで、南へ61ｍにおよぶ調査区を設定した。なお、本調査区の南端部では、これに直交する東西トレンチ、６ＡＧＨ－Ｃ及び６ＡＧＨ－Ｄ区を設定した。

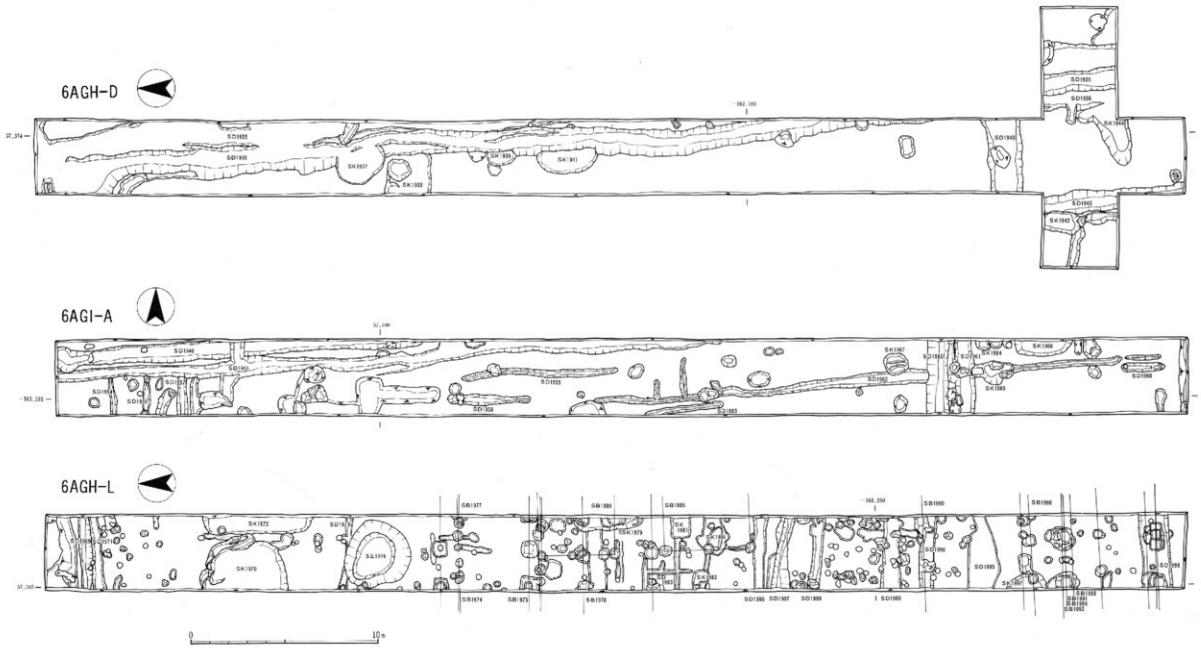
〔遺　構〕 本調査区では溝６条と土坑を６ヶ所に検出しただけで柱掘方はまったく検出されなかった。

平安時代前半の遺構は、溝２条と土坑５ヶ所がある。

溝はＳＤ1935と調査区南端部でこれに直交するＳＤ1940がある。ＳＤ1935は幅約２ｍ、深さ40cm。東半が部分的に浅い段状を呈し、北端部にはこれに直交する溝を伴う可能性がある。ＳＤ1940はＳＤ1935に直交して、西は６ＡＣＨ－Ｃ区、第24次調査区の南端部をかすめ、第10次調査で検出したＳＤ 529に続く溝と推定される。今次調査で確認した74ｍを含めて 240ｍ以上に達する区画溝であろう。

土坑はＳＫ1937、ＳＫ1938、ＳＫ1939、ＳＫ1941、ＳＫ1944がある。いずれもＳＤ1936で切断されて全容不明。ＳＫ1937は深さ54cmで、土器も多いが他は浅く土器の出土量も少ない。

平安時代後半から末葉の遺構は、溝３条と土坑１ヶ所を検出した。



第12図　第35次遺構実測図　6AGH－D　6AGI－A　6AGH－L　（1：200）

溝にはＳＤ1936、ＳＤ1943と平安時代後半に比定されるＳＤ1951がある。ＳＤ1936は幅約1.5ｍ、深さ50㎝で、前記のＳＤ1935に西肩部分を接しながら並走する。南端部には西方へＴ字状に曲る溝を伴っているものと推定される。ＳＤ1943はＳＤ1936に並走する溝で、その隔たりは心々距離で西へ約５ｍを測る。規模もＳＤ1936にほぼ匹適しており、２条が対応して道路状の区画をなしていたものと推定される。

ＳＤ1951はごく浅い溝でＳＤ1943の直前で西方へ曲る。

ＳＫ1942は溝であることも考えられる。共に平安時代後半のものであろう。

〔遺　物〕平安時代前半の土器が多く、ＳＤ1935より整理箱に４箱、ＳＫ1937より１箱、ＳＫ1938より１箱が出土した。土師器の杯、皿、甕類が多く少量の須恵器、灰釉陶器、製塩土器、黒色土器、土すい等がみられた。平安時代末葉のＳＤ1936からは、土師器の小皿類と鍋の他に山茶椀もかなり出土した。

（Ⅴ）６ＡＧＨ－Ｃ地区

前記の６ＡＧＨ－Ｄ区南端部に直交するトレンチで、西方へ37ｍに及ぶ。

〔遺　構〕平安時代前半の遺構は前記のＳＤ1940の他に土坑を３ヶ所検出した。

ＳＫ1946、ＳＫ1947は切り合い関係が不明であり同一のものであることも考えられる。ＳＫ1947がやや深く約60㎝を測るが、共に底部に凹凸が多く南壁部が内湾する。共にＳＤ1940により北側が削平される。ＳＫ1950は小型であるが、これらの土坑とよく似た形状を呈する。ＳＫ1952は唯一の平安時代中葉の土坑である。

平安時代後半から末葉の遺構には、ＳＤ1945、ＳＤ1948、ＳＤ1949、ＳＤ1951、ＳＤ1953がある。東西溝の３条は深さ約10㎝の浅いもので、出土土器も微量である。途切れたり、ゆるやかに蛇行するが概ねＳＤ1940の方向に沿っている。ＳＤ1948とＳＤ1949はＳＤ1951等の溝より新しいものであるが、その方向はＮ3°ＷでＳＤ1940等の区画溝に類似する。

〔遺　物〕調査区全体で３箱程度の土器が出土しているが、その大半がＳＤ1940、ＳＫ1947に伴うものであった。緑釉陶器は包含層を中心に４点が出土した。

（Ⅵ）６ＡＧＩ－Ａ地区

６ＡＧＨ－Ｄ区東側の農道より東へ60ｍに及ぶ調査区で、中心線は６ＡＧＨ－Ｃ区より北へ3.8ｍを隔てた。

〔遺　構〕平安時代前半の遺構は前述のＳＤ1940と土坑３ヶ所を検出した。ＳＤ1940は北側が一段浅い段状になり、６ＡＧＨ－Ｄ区の同溝の様相に近い。

土坑はＳＫ1964～ＳＫ1966がある。ＳＫ1966は径３ｍ、深さ54㎝を測るが他は浅い。共に伴出土器は少ない。

平安時代後半から末葉の遺構には、ＳＤ1940に沿って南側に隣接するＳＤ1955とこれに直交

あるいは平行する数条の小溝がある。ＳＤ1955は幅 0.6ｍ～１ｍ内外、深さ西端部で約30㎝、中央部で一番浅く約15㎝の浅い溝で、平安時代後半のものと推定される。ＳＤ1959、ＳＤ1962等の小溝は６ＡＧＨ－Ｃ区のＳＤ1945、ＳＤ1951とよく似ており、やはり一環した区画の境にかかわるものであろう。

東端部のＳＤ1960、ＳＤ1961はＳＤ1962より新しく平安時代末葉に比定される。ＳＤ1960は深さ50㎝であるがＳＤ1961は10㎝～20㎝の浅い溝である。

〔遺　物〕 ＳＤ1940とＳＫ1966よりややまとまった平安時代前半の土器が出土したが、他の遺構はほとんど土器を伴わないものであった。なお、緑釉陶器は１点が出土した。

（Ⅶ）６ＡＧＨ－Ｌ地区

６ＡＧＨ－Ｃ区の中央部より南へ約 5.6ｍ隔てた地点より南へ62ｍに及ぶ調査区を設定した。調査の結果、ＳＤ1940より南方へ約12ｍの地点で検出した２条の東西溝以南で、掘立柱建物12棟を初めとする多数の遺構が認められた。

〔遺　構〕 調査区北端部のＳＫ1970、ＳＫ1972は奈良時代後半に比定される土坑である。ＳＫ1970は径 9.5ｍ、深さ50㎝。ＳＫ1972はそれぞれ12ｍと20㎝で、底部は共に平坦である。前者は完形品の多い多量の土器を伴うが、後者は土器の出土量も少なく、竪穴住居であることも考えられるが全容が不明であるため土坑とした。

平安時代前半の遺構は掘立柱建物３棟ＳＢ1985、ＳＢ1990、ＳＢ1994と土坑２ヶ所ＳＫ1979、ＳＫ1984がある。

掘立柱建物は３棟とも梁行２間の東西棟と推定され、棟方向は概ねＥ 2°Ｎを示す。ＳＢ1990やＳＢ1994は柱掘方が径80㎝、深さ60㎝で、柱間も 2.6ｍを測る大型の建物であろう。

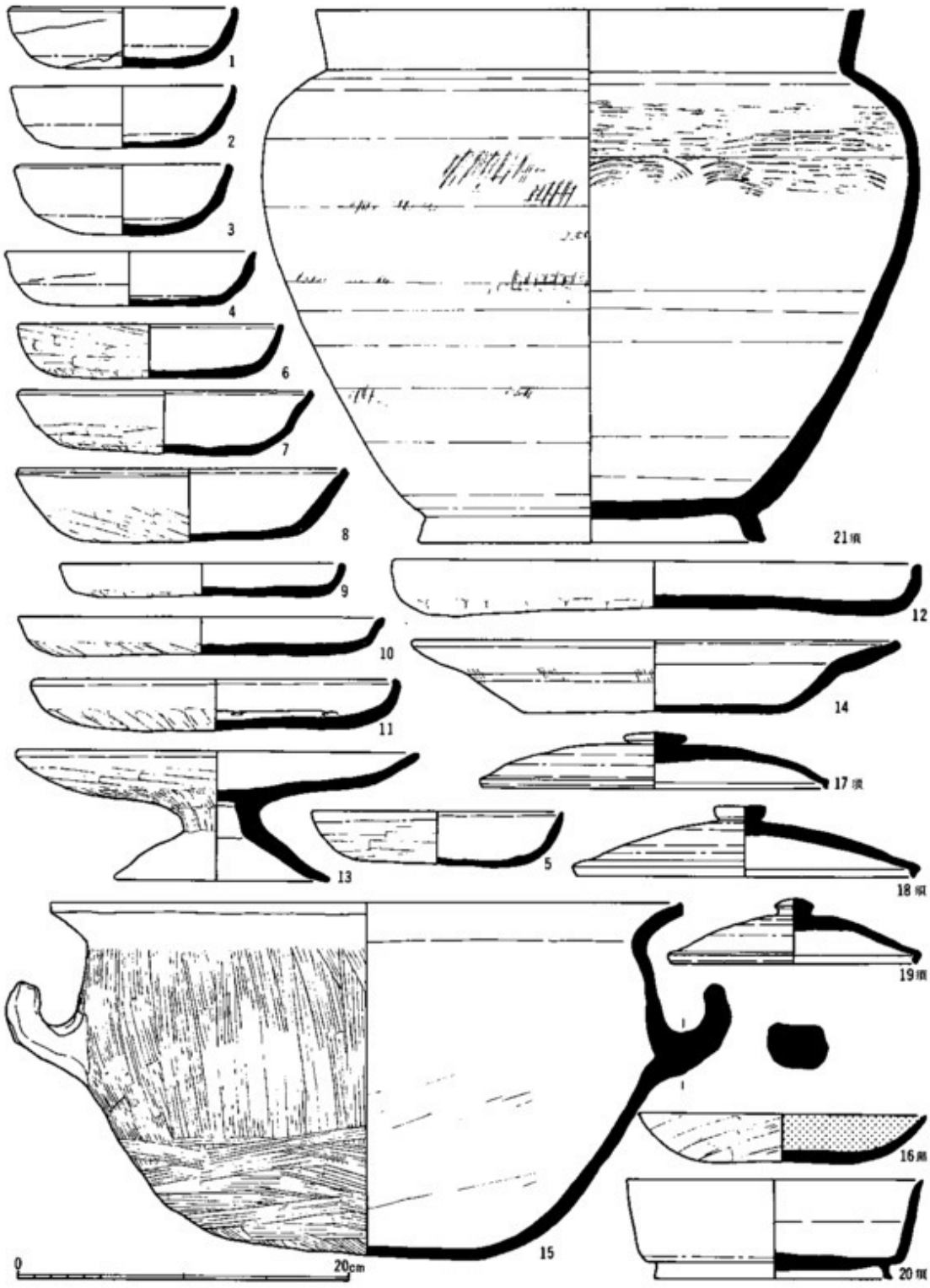
土坑は共に出土土器が少ない。深さはＳＫ1979が60㎝、ＳＫ1984が30㎝を測る。後者はＳＢ1985より古い。

平安時代中葉の遺構は、掘立柱建物９棟、溝４条と土坑３ヶ所を検出した。

掘立柱建物にはＳＢ1974、ＳＢ1975、ＳＢ1977、ＳＢ1978、ＳＢ1980、ＳＢ1991～ＳＢ1993、ＳＢ1998がある。棟方向が真東からＥ 3°Ｎまでの範囲内に統一された東西棟と推定される。規模は柱間が1.8ｍ～２ｍ、2.2ｍ、 2.5ｍ内外のものが各２～３棟ずつみられる。柱掘方径が１ｍに近いＳＢ1975やＳＢ1992等は柱間も広い。中央部に５棟、南端部に５棟が重複するが、特に南端部のＳＢ1991～ＳＢ1993の３棟は前半のＳＢ1994と共に同一場所に４棟が重複するものと考えられる。

溝はＳＤ1979、ＳＤ1989、ＳＤ1996、ＳＤ1999がある。全て深さ15㎝までの浅い溝で、出土土器も少ない。ＳＤ1999はこれに重複する建物群より新しい。

土坑はＳＫ1981、ＳＫ1982、ＳＫ1997がある。長方形のＳＫ1981は深さ77㎝であるが、他は



第13図　第35次出土遺物　ＳＫ1970

浅くＳＫ1982はくぼみ状を呈する。いずれも出土土器は少ない。

平安時代後半から末葉の遺構は少ない。後半のものにＳＤ1987とＳＫ1984に重複する浅いくぼ地があり、末葉のものはＳＥ1976だけであった。ＳＥ1976は径 3.5ｍの円形の素掘り井戸である。上面より 1.5ｍ以下の礫層は大きく内湾崩落しており掘下げを中止した。遺物は少なく、土師器の小皿・杯と共に山茶椀４個体が出土した。

その他出土遺物が乏しく時期不明である遺構に、ＳＤ1969、ＳＤ1971、ＳＤ1973、ＳＤ1983、ＳＤ1986、ＳＤ1988、ＳＤ1995の溝がある。北端部のＳＤ1969、ＳＤ1971は区画溝と推定されるもので、深さ30㎝であるが上面は土取穴で削平される。ＳＤ1973はＳＥ1976より新しい。ＳＤ1988は奈良時代の土師器片が出土している。ＳＤ1983、ＳＤ1986、ＳＤ1995は深さ10㎝内外の浅いものであった。

〔遺　物〕調査区全体で整理箱15箱の土器が出土したが、その大半はＳＫ1970に伴うものである。ＳＫ1970出土の土器は土師器の杯・高杯・皿・鉢・甕・杯蓋が多く、須恵器は杯・杯蓋・甕など少ない。また木の葉底の浅い黒色土器椀も一点出土している。杯類の内面にはら線、放射状暗文が残るものと思われるが、器表面の剝離が激しく調整法も不明のものが多い。

（Ⅷ）まとめ

今回の調査は幅４ｍのトレンチ調査であったが全調査区より建物や溝を中心とする多数の遺構を検出した。これらは幅が広く深い溝を中心に、浅い溝や土坑を伴うが柱掘方が全くない調査区と、建物群とこれに伴う土坑等が多い地区に大別される。

前者は溝を中心とする区画の境界部分に当るものと考えられる。平安時代前半では、６ＡＧＧ－Ａ地区のＳＤ1916と６ＡＧＨ－Ｄ等のＳＤ1940は同規模の溝で、その隔たりは南北間で約 130ｍに達する。ＳＤ1935はこれらの東西溝に直交する。平安時代末葉のＳＤ1910等の溝には、ＳＤ1936、ＳＤ1943が北に延びて直交すると思われ、共に方形の大画区をなすものであろう。これらの溝はいずれもＮ3°～4°Ｗ偏るものに統一され、ごく近辺に並走する。

一方、建物群は境界部分よりさらに10ｍ内外の空間を隔てて造営され、棟方向もＮ3°Ｗ内外で溝の方向に一致するものが大半をしめる。また、これら建物は一定場所に重複して密集する。

これらの様子は、建物群が溝を中心とする大区画に分けられており、しかも平安時代全般を通じて大きな変更がなかったことを示すものであろう。また、建物群の規模、棟方向、密集度などは柳原、御館地区など宮域中央部の様子に類似しており、区画溝も中央部より続くものであることが明らかにされた。

これらは、斎宮跡の造営計画を知る重要な手がかりであり、今次調査区を中心とする中町の中北部一帯が公有化対象地区となっているＡＢ地区にも増して重要な一帯であることを示している。

Ⅶ　第 31 次 調 査

（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）

第31－1次調査　6ADO－M（岩見宅地）

近鉄斎宮駅の南西約70ｍにある畑地で、幅２ｍ、長さ30ｍのトレンチを設定し、60㎡調査した。遺構を検出した赤褐色地山面は表土下約25㎝にあり、浅い。調査の結果、土拡２と柱掘方と思われるいくつかの穴を検出したが、調査区内でまとまる建物はない。出土遺物も平安時代後半の土師器片が少量検出されたにすぎない。

第31－2次調査　6ACP－I（鈴木宅地）

宮域南端部でも県道相可口停車場線の東側の畑で調査した。調査地区は幅２ｍ、長さ12ｍの東西トレンチで約24㎡である。西半部は近世の攪乱を受けており、東半部で溝３条、土坑１を検出したにとどまる。このうち幅50㎝、深さ５㎝の浅い溝ＳＤ2002が鎌倉時代に比定されるが、他は時期不明である。

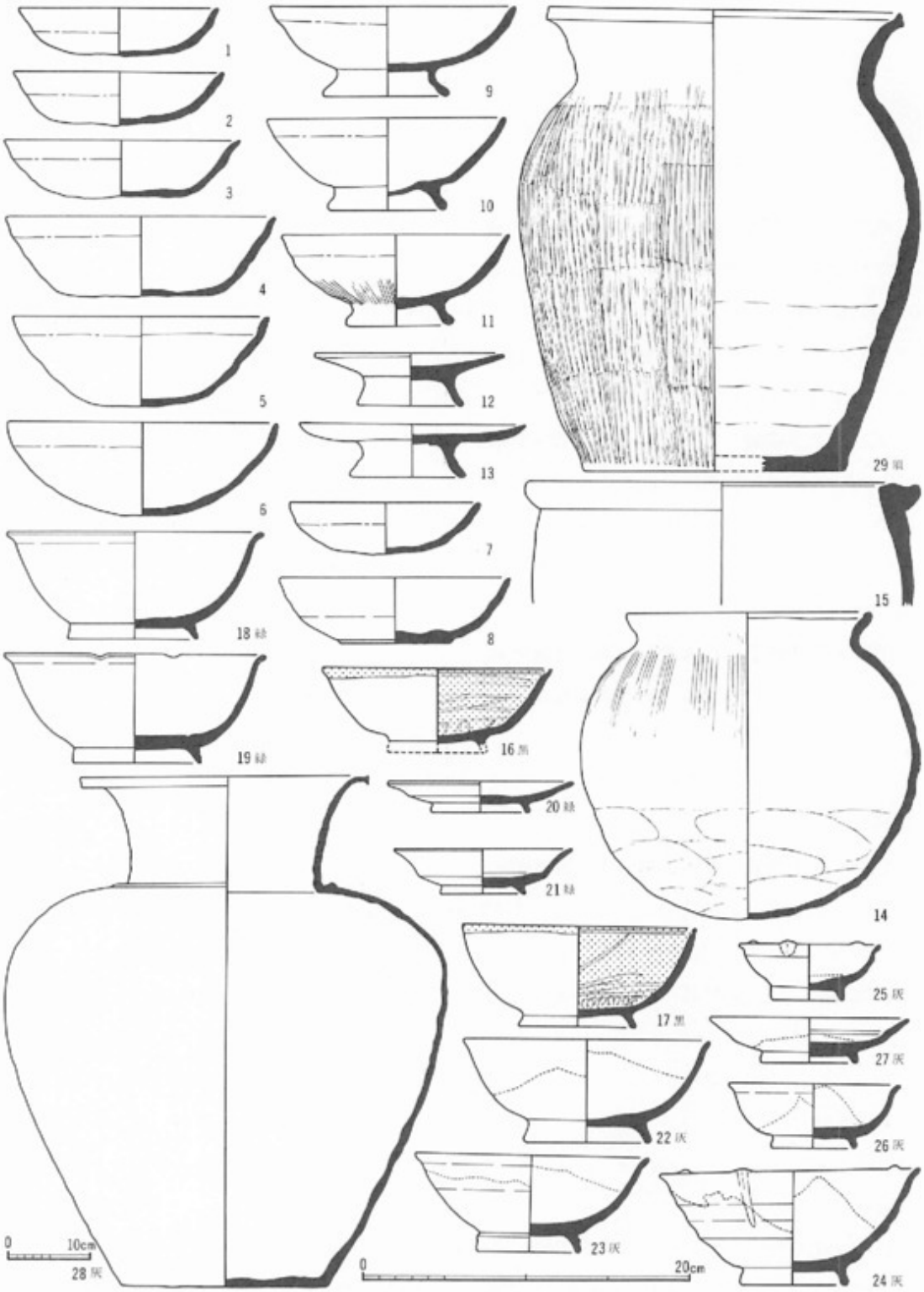
第31－3次調査　6ABD－A（北藪宅地）

調査地点は古里地区北部の台地端部の畑で宮域の北西端の境界に接する地点にあたる。調査区は、幅 3.5ｍ、長さ15ｍの東西トレンチで面積は約54㎡である。検出した遺構は、奈良時代の竪穴住居址１棟と、掘立柱建物と考えられる柱列のほか、埋土の状況から中世以降と思われる溝１条である。

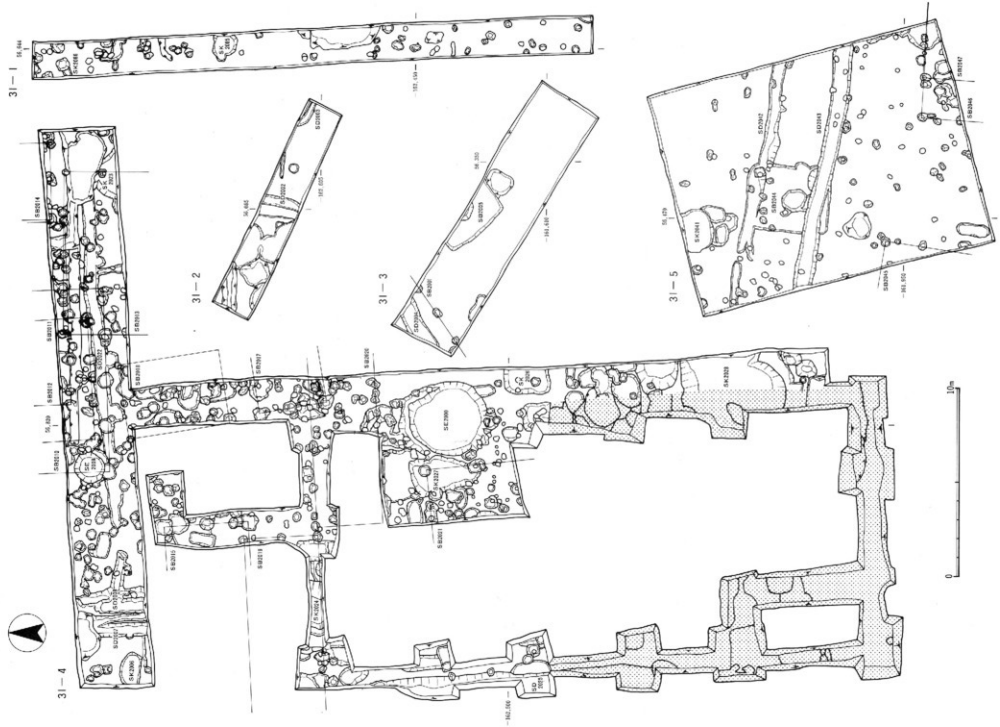
第31－4次調査　6ADQ－T（百五銀行）

近鉄斎宮駅前の旧参宮街道に面した畑地で調査した。調査は、第１次調査としてＴ字状のトレンチを設定して約 220㎡発掘した後、建物予定地の基礎部分約 200㎡を追加調査した。この第２次調査では、南半部の表土下90㎝以上に達する遺構に関しては、工事の関係でやむをえず遺構検出ができなかった。検出した主な遺構は、掘立柱建物11棟、溝７条、井戸２基、土坑等である。奈良時代の遺構としては、Ｔ字トレンチの西端部の浅い土坑ＳＤ2029以外はない。調査範囲が狭いため確認できる建物は平安時代中葉のもの６棟、後半のもの１棟、末葉のもの３棟であるが、柱掘方と思われる穴は多数にのぼっている。溝は大小いくつかあるが、いずれも室町時代のものである。

井戸は２基検出した。中央部のＳＥ2000は径４ｍをはかる大型の素掘りの井戸で、深さ２ｍまで掘りさげただけであるが、土師器、灰釉陶器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器片77点等の多くの土器類のほか、銅地金張りの銙帯金具と思われる遺物も検出した。ＳＥ2009は径 1.6ｍをは



第14図　第31－4次出土遺物　ＳＥ2000



第15図　第31－1次　第31－2次　第31－3次　第31－4次　第31－5次遺構実測図　（1：200）

かる室町時代後半の素掘りの井戸である。なお包含層から34点の緑釉陶器が出土した。

このように、この地区は、旧街道に近い攪乱された南半部をのぞくと、遺構密度は字御館、柳原両地区に匹敵するものと推定され、宮内でも建物の建替えが多い重要な一画と思われる。

第31－5次調査　6ACC－G（水谷宅地）

斎王集落の西部で字塚山の申請地において16m×12mの調査区を設定して 192m²調査した。検出した主な遺構は、掘立柱建物3棟、竪穴住居1棟、溝2条、土坑等でいずれも奈良時代に属する。溝と竪穴住居は重なるが、切り合い関係から後者が古い。並走する溝は心々距離 3.3mを測るが、南側のSD2043は幅90cm、深さ40cmで、北側のSD2042は幅60cm、深さ20cmと規模に差があり、同時に2条の溝が存在したかは疑問の余地も残る。なお、包含層から緑釉陶器稜椀片が1点出土した。

第31－6次調査　6ABO－X（池田宅地）

坂本集落南部の県道南藤原竹川線に面した西側の畑地で、十字トレンチを設定し 204m²調査した。検出した主な遺構は掘立柱建物4棟、溝8条、土坑等である。掘立柱建物はいずれも奈良時代のもので、北に対して大きな傾りを示している。溝はSD2059の奈良時代の溝をのぞくと他は、鎌倉時代後半のものである。

第31－7次調査　6AGI－L（竹内牧舎）

宮域東端部の通称役場道西側申請地において幅 2.5m、長さ20.5mの南北トレンチを設定し51m²調査した。検出した主な遺構は掘立柱建物4棟、溝2条、土坑等である。遺構の時期はSK2069が平安時代中葉である以外、すべて平安時代前半に属する。調査区は小範囲であるが、柱掘方とみられる穴は多数あって、遺構密度の高い地区である。

第31－8次調査　6ACN－G（森宅地）

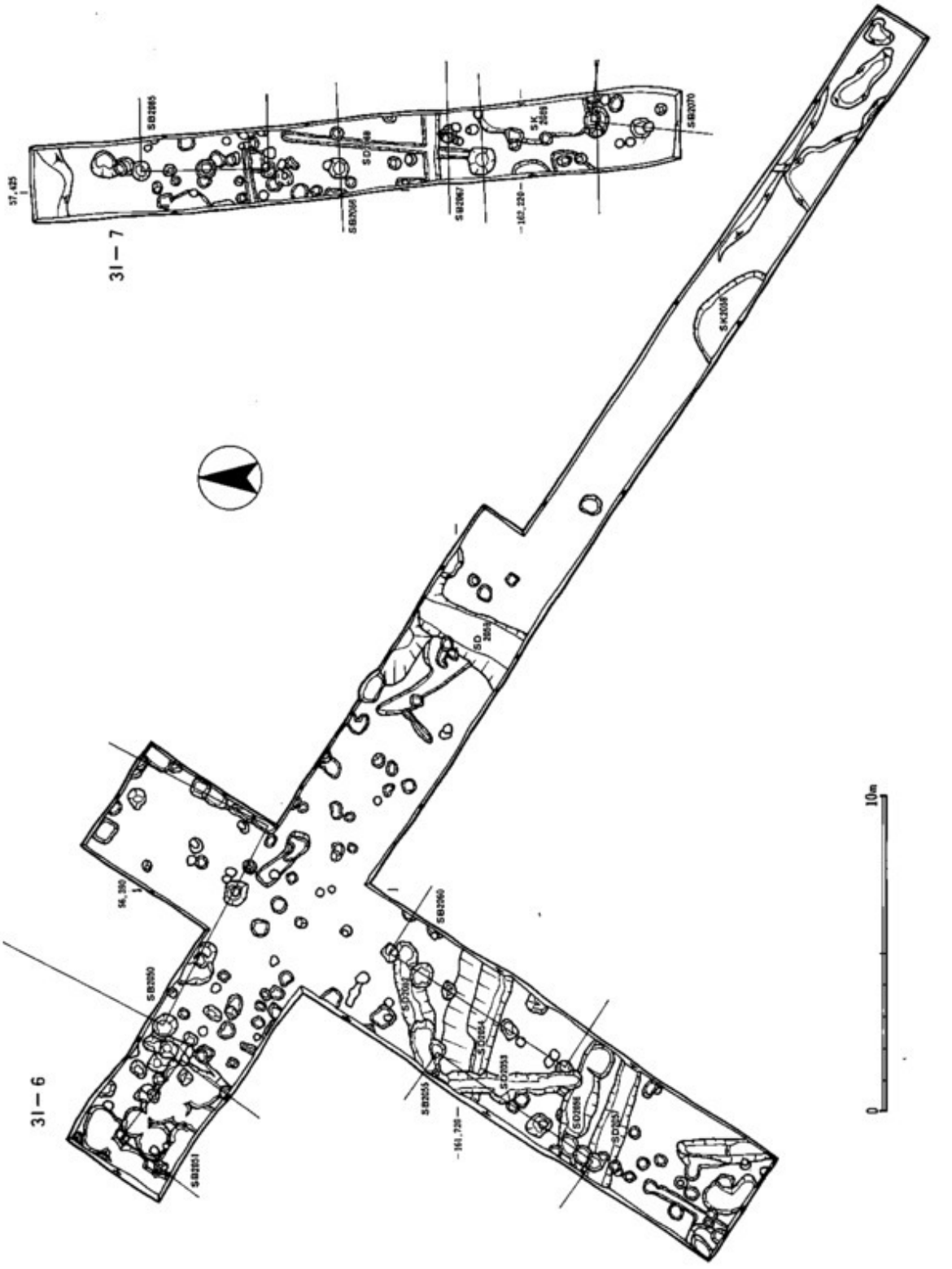
斎宮小学校東側の畑地で 150m²調査した。検出した主な遺構は掘立柱建物1棟、溝3条、土坑等である。掘立柱建物が平安時代後半に位置づけられるが、他は奈良時代の遺構である。

第31－9次調査　6AGD－L（中川宅地）

北野集落南部の申請地で東西トレンチを設定し64m²調査した。調査の結果、表土下 1.2mまで桟瓦や陶器を含む礫混入茶褐色土が埋まっており、土取りによって遺構は完全に破壊されていた。なお、埋土中から緑釉陶器椀2片が出土した。

第31－10次調査　6ADM－O（近鉄斎宮駅ホーム拡張工事）

近鉄斎宮駅プラットホーム延伸工事に先立ち緊急調査した。北地区では鎌倉時代前半の溝1条のみであるが、南地区では、いくつかの遺構がある。SK2083は焼土がたまった土坑で奈良時代後半のもの。SK2084は平安時代前半、SK2082は鎌倉時代前半の土坑である。



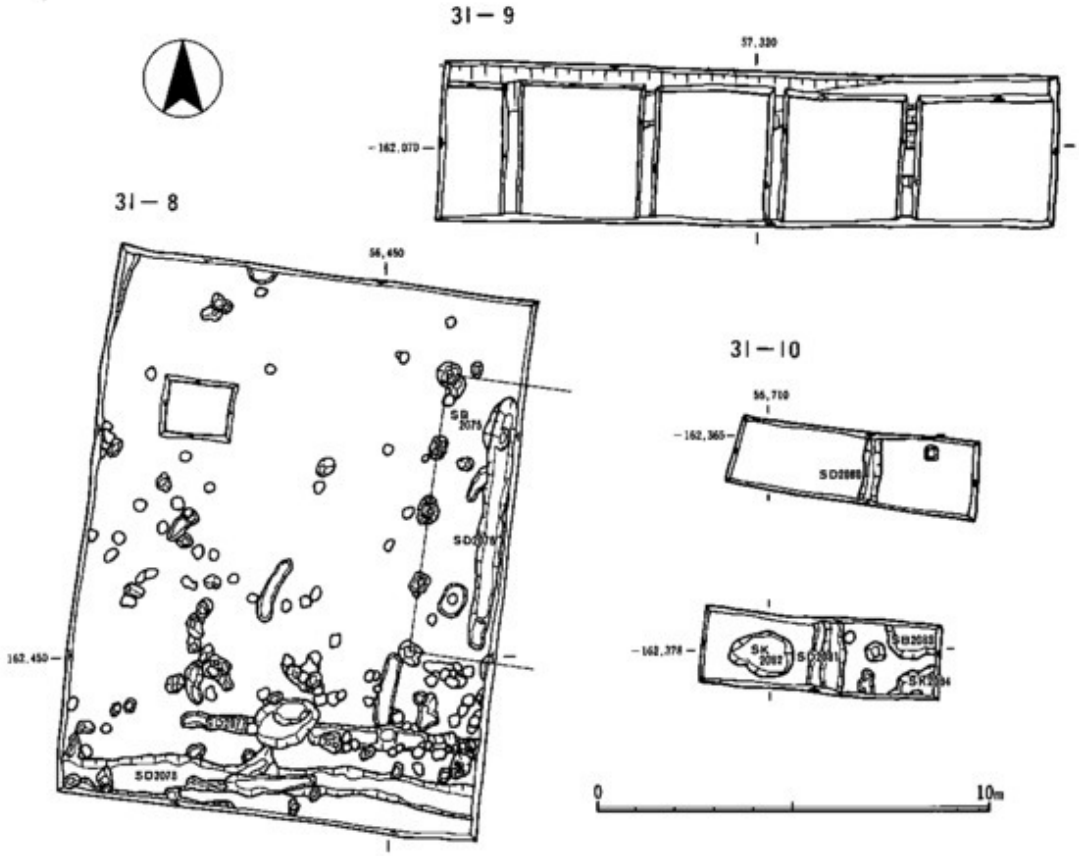
第16図　第31－6次　第31－7次遺構実測図　（1：200）

第31－11次調査　6ＡＤＴ－Ｊ（澄野宅地）

宮域南端部にあたる牛葉集落南の申請地で実施した。申請地は現状が荒地で、周囲の畑より約50cm低い凹地となっている。この場所は地主によるとかつて、赤土取りをおこなった後、他の土で埋めもどしたと言っている。このため、遺構の保存状況確認を目的として、３ｍ×２ｍのグリットを設定し、ユンボを使って調査したが表土下１ｍまで現代瓦、陶器片を含じた黒褐色土が埋まっていることが明らかになり、本調査は実施しなかった。

第31－12次調査　6ＡＤＴ－Ｋ（宇田宅地）

第31—11次調査地の東に接する同様の凹地であったため、遺構の保存状況を確認したが、土取りにより完全に破壊されていることが明らかになり、本調査は実施しなかった。



第17図　第31－８次　第31－９次　第31－10次遺構実測図　（１：200）

Ⅷ　調査事務所要覧

Ⅰ　事業概要

(1) 調査事業　17地区　　8,981㎡

ア　計画発掘調査事業　5地区　　7,700㎡

第30次調査	中垣内地区	1,470㎡
第32次調査	塚山地区	1,150㎡
第33次調査	篠林地区	2,450㎡
第34次調査	西加座地区	1,080㎡
第35次調査	中町地区	1,550㎡

イ　緊急発掘調査（個人住宅等新築）

第31－1次～12次調査　12地区　1,281㎡

(2) 普及事業

ア　現地説明会の開催

(ア) 第30次発掘調査現地説明会

日時　昭和55年6月15日　午後2時

場所　明和町大字竹川字中垣内地内

調査面積　1,470㎡

調査期間　5月16日～7月28日

参加人員　約 220名

(イ) 第32次発掘調査現地説明会

日時　昭和55年8月24日　午前10時30分

場所　明和町大字斎宮字塚山地内

調査面積　1,150㎡

調査期間　7月29日～9月18日

参加人員　約 150名

(ウ) 第33次発掘調査現地説明会

日時　昭和55年10月26日　午前10時30分

場所　明和町大字斎宮字篠林地内

調査面積　2,450㎡

調査期間　9月16日～12月7日

参加人員　約 200名

(エ) 第34次発掘調査現地説明会

日時　昭和56年1月25日　午後2時

場所　明和町大字斎宮字西加座地内

調査面積　1,080㎡

調査期間　12月10日～2月17日

参加人員　約 140名

イ　調査報告会

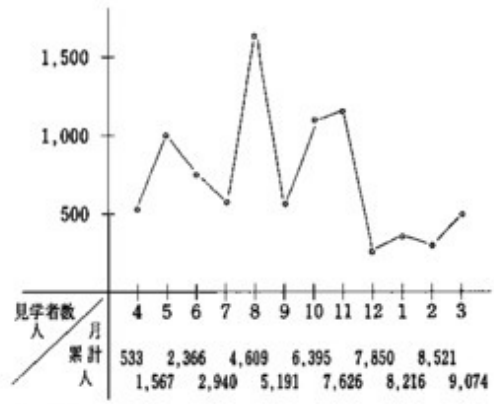
(ア) 7月18日　四日市々保々地区郷土史研究会

(イ) 10月24日　四日市郷土史研究会

(ウ) 11月16日　三重の自然と文化財を守る会（松阪支部）

(エ) 12月4日　歴史研究会古代史部会

ウ　資料展示室見学者数



Ⅱ　予　算

斎宮跡保存対策費　　66,766千円

（単位千円）

事業名＼区分	歳出	財源内訳		備考
		県費	国費	
発掘調査費	31,333	15,833	15,500	発掘面積 約 8,000㎡
史跡公有化補助金	31,500	31,500	—	公有面積 約 1.6 ha
管理施設設置補助	100	100	—	案内板等の設置
維持管理	3,833	3,833	—	資料展示室整備文献調査等
計	66,766	51,266	15,500	

Ⅲ　組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

（昭和43年4月1日 教育委員会規則　第6号）

最終改正　昭和54年3月31日

教育委員会規則第6号

第三章　出先機関の組織

（教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等）

第12条　事務局の事務（県立学校関係事務を除く。）を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3．斎宮跡調査事務所の名称及び位置は、

次のとおりとする。

名　　称	位　置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

（分掌事務）

第14条　3．斎宮跡調査事務所においては、次に掲げる事務をつかさどる。

一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。

二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。

三、その他斎宮跡に関すること。

附則（昭和54年3月21日、教育委員会規則第6号抄）

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

Ⅳ 職　員

職	氏　名	備考
所　長	佐々木宣明	文化課主幹兼務
主　査	山沢義貴	
事務職員	大西素行	
〃	倉田直純	
技術職員	吉水康夫	
事務補助員	野呂美絵子	
〃	田丸恵美子	

Ⅴ その他

(1) 斎宮跡調査指導委員

○設置要綱

1　設　置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員（以下「委員」という。）を置く。

2　所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

(1)　当史跡の遺構の調査、検討に関すること。

(2)　当史跡の遺物の調査、検討に関すること。

(3)　当史跡の文献の調査、検討に関すること。

(4)　当史跡の環境整備の計画、検討に関すること。

(5)　その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に関すること。

3　定数等

(1)　委員の定数は、10人以内とする。

(2)　委員は、考古学、歴史学、建築史学などに関し専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱する。

4　任　期

任務が完了するまでの間とする。

5　会　議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が招集する。

6　庶　務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務局文化課において処理する。

7　その他

この要綱に定めるもののほか、委員に関し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

附則

この要綱は、昭和54年10月19日から施行する。

○調査指導委員

氏　名	専　攻	現　職
福山　敏男	建築史	(国)文化財保護審議会専門委員
坪井　清足	考古学	奈良国立文化財研究所長
門脇　禎二	古代史	京都府立大学教授
楢崎　彰一	考古学 陶磁史	名古屋大学教授
服部　貞蔵	考古学	(株)文化財保護審議会委員
久徳　高文	国文学	椙山女学園大学教授
渡辺　寛	古代史	皇学館大学助教授

○委員会の開催

1　第1回調査指導委員会

日時　昭和55年10月14日

場所　三重県斎宮跡調査事務所

指導内容

昭和54年度発掘調査について

昭和55年度発掘調査について

公有化と当面の維持管理について

C地区の取り扱いについて

第33次調査現場視察

出席者　福山、坪井、門脇、楢崎、服部の各委員

2　第2回調査指導委員会

日時　昭和56年2月16日

場所　あさあけ会館（津市）

指導内容

昭和55年度発掘調査について

昭和55年度事業について

昭和56年度事業計画について

史跡斎宮跡の将来構想について

出席者　福山、坪井、門脇、楢崎、服部、久徳、渡辺の各委員

(2) 第9回大規模遺跡調査五県会議

日時　昭和55年10月23日、24日

場所　三重県斎宮跡調査事務所

協議内容

発掘調査事業の概要について

特別史跡・史跡の保護管理について

国への要望事項について

出席者　文化庁、宮城・福井・広島・福岡・三重の各県、多賀城跡調査研究所、朝倉氏遺跡調査研究所、草戸千軒町遺跡調査研究所、九州歴史資料館、三重県斎宮跡調査事務所25名

第30次現地説明会

昭和55年度所内日誌

自　昭和55年４月１日
至　昭和56年３月31日

月　日	内　　容
４月１日	県人事異動により新所長就任
５月６日	第30次発掘調査開始（中垣内地区）
10日	第30－１次発掘調査開始（個人住宅）
17日	資料展示室見学者総数10,000人となる
20日	第31－１次発掘調査完了
20日	牛葉地区斎宮跡対策委員会……牛葉公民館
21日	地方連絡会議……県松阪庁舎
21日	第31－２次発掘調査開始（個人住宅）
23日	第31－２次発掘調査完了
24日	第31－３次発掘調査開始（個人住宅）
26日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館
26日	55年度文献調査打合せ会議
６月１日	「斎宮跡について」山沢主査報告　松阪郷土会
４日	第31－３次発掘調査完了
９日	ＮＨＫ教育テレビ〝伊勢物語〟放映（展示資料紹介）
９日	第31－４次発掘調査開始（銀行店舗）
10日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館
15日	第30次発掘調査　現地説明会
７月１日	資料展示室資料展示替え
10日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟役員会……県議会
11日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟総会……県議会
16日	第31－４次発掘調査完了
16日	牛葉地区斎宮跡対策委員会……牛葉公民館
17日	ＣＢＣテレビ三重県民だより〝王朝のロマンをたずねて（史跡斎宮跡）〟放映
18日	「斎宮の歴史と調査」山沢主査報告　四日市々保々地区郷土史研究会
26日	名古屋テレビ　三重県民だより〝王朝のロマンをたずねて（史跡斎宮跡）〟放映
27日	中京テレビ　三重県民だより〝王朝のロマンをたずねて（史跡斎宮跡）〟放映
28日	第30次発掘調査完了
28日	第31－５次発掘調査開始（個人住宅）
29日	第32次発掘調査開始（塚山地区）
８月５日	文化庁へ「斎宮跡の保存推進について」陳情（明和町・明和町議会）
11日	第31－５次発掘調査完了
13日	三重県教育長へ「斎宮跡の保存推進について」陳情（明和町・明和町議会）

月　日	内　　容
8月24日	第32次発掘調査　現地説明会
9月12日	地元県議会議員と斎宮跡地権者を守る会との懇談会……町中央公民館
16日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟総会……県議会
16日	第33次発掘調査開始（篠林地区）
17日	第31－6次発掘調査開始（個人住宅）
18日	第32次発掘調査完了
24日	斎宮跡保存連絡会議（県文化課・県斎宮跡調査事務所・明和町）
27日	斎宮研究会……調査事務所
27日	55年度文献調査打合せ会議……調査事務所
30日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟視察……平城宮外
10月1日	地方財政審議会委員……現地視察
9日	牛葉地区斎宮跡対策委員会……牛葉公民館
10日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館
14日	斎宮跡調査指導委員会……調査事務所
17日	第31－6次発掘調査完了
18日	県議会文教常任委員会視察……調査事務所
23日	資料展示室見学者総数15,000人となる
23日	大規模遺跡調査五県会議……調査事務所
24日	「国史跡斎宮跡の歴史と調査」山沢主査報告　四日市郷土史研究会
26日	第33次発掘調査　現地説明会
28日	第31－7次発掘調査開始（牧舎）
11月4日	ＮＨＫテレビ　今日のリポート
11日	牛葉地区第1、2組斎宮跡対策住民集会……牛葉公民館
12日	牛葉地区第3、4、5組斎宮跡対策住民集会……牛葉公民館
13日	牛葉地区第6、7、8組斎宮跡対策住民集会……牛葉公民館
16日	「斎宮跡の発掘調査」倉田主事報告　三重の文化財と自然を守る会（松阪支部）
17日	第31－7次発掘調査完了
22日	牛葉地区斎宮跡対策住民総会……牛葉公民館
24日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館
12月4日	中町地区発掘調査打合せ会……町中央公民館
7日	第33次発掘調査完了
10日	第34次発掘調査開始（西加座地区）
10日	第35次発掘調査開始（中町トレンチ）
11日	第31－8次発掘調査開始（個人住宅）
13日	「斎宮跡発掘調査の現況について」山沢主査報告　歴史学研究会古代史部会
17日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館

月　日	内　　容
12月22日	第31－8次発掘調査完了
28日	三重テレビ〝県政の窓（史跡斎宮跡）〟放映
1月7日	第31－9次発掘調査開始（個人住宅）
7日	55年度文献調査打合せ会議……調査事務所
8日	第31－4次関連調査打合せ会……調査事務所
16日	第31－9次発掘調査完了
16日	第31－10次発掘調査開始（個人住宅）
20日	「史跡斎宮跡について」佐々木所長報告　ガモンの会
20日	第31－10次発掘調査完了
22日	斎宮跡環境整備検討会……津市水産会館
25日	第34・35次発掘調査現地説明会
2月2日	斎宮跡環境整備検討会……津市水産会館
4日	昭和56年度文化庁文化財関係予算聴取……都道府県会館
9日	第31－11次、12次発掘調査
10日	中南勢地域振興協議会……現地視察
12日	文化庁調査官……現地視察
13日	斎宮跡調査指導委員会……津市あさあけ会館
17日	第34次・35次発掘調査完了
23日	文化庁へ「史跡の保存管理について」陳情（明和町・明和町議会）
24日	ＣＢＣラジオ　ばつぐんジョッキー放送
3月2日	牛葉地区斎宮跡対策委員会……牛葉公民館
3日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館
9日	文化財研修生講義……調査事務所
12日	県文化課・企画課・地方課へ「斎宮跡保存管理について」協議（明和町長）
13日	環境整備担当者会議……滋賀県安土町
14日	三重県文化財保護審議会……勤労者福祉会館
18日	文化庁へ「斎宮跡保存管理について」協議（調査事務所・明和町）
24日	三重県文化審議会……洞津会館

掘立柱建物一覧表

SB	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
第30次調査（6ABJ－M・W・X）								
1616	4×2	E37°S	8.6	4.8	1.8 2.5	2.4	奈良	桁行柱間不揃い
1617	5×2	E 3°N	10.0	4.8	—	2.4	〃	桁行柱間不揃い SB1616より新しい
1620	(3)×2	N37°E	—	4.8	2.1	2.4	〃	
1621	(2)×2	N18°E	—	4.2	2.6	2.1	〃	SB1620より新しい
1647	3×2	N41°E	6.3	4.2	2.1	2.1	〃	
第32次調査（6ACE－D・E・F）								
1700	3×3	N3°W	5.5	5.6	1.8	1.8	奈良	SX1699より新しい
408	3×2	E1°S	7.5	4.6	2.5	2.2	平安中	2Aトレンチで確認
1680	5×4	E5°S	10.8	7.8	2.1	2.1	〃	4面廂
1690	3×2	E5°S	6.2	4.2	2.1	2.1	〃	
1695	4×2	E4°S	8.3	4.0	2.1	2.0	〃	SA1694より古い
1713	(3)×2	E7°S	—	4.0	1.9	2.0	〃	
1715	(3)×2	E5°S	—	4.2	2.0	2.1	〃	
1720	5×(2)	N8°E	10.0	—	2.0	2.0	〃	緑釉皿片出土
1721	(2)×2	E3°S	—	4.2	—	2.1	〃	
409	6×3	E12°S	13.3	6.8	2.22	2.15	平安後	2面廂 廂柱間 東 2.7m 南 2.6m
1705	3×(2)	N12°E	5.8	3.8	1.93	1.9	平安末	
1723	3×(2)	N15°E	6.5	—	2.17	—	〃	
1724	4×(2)	N14°E	8.4	—	2.1	—	〃	SB1723より新しい
第33次調査（6ADE－D）								
1751	3×2	N1°W	5.6	3.9	1.87	1.95	奈良	SK1787より新しい
1752	4×2	N9°E	7.5	4.4	1.875	2.2	〃	竪穴住居SB1754より古い
1771	(4)×(2)	E9°S	—	—	2.4	2.2	〃	総柱の可能性もある
1780	3×2	N3°E	5.4	3.4	1.8	1.7	〃	
1753	3×2	N2°W	6.4	4.2	2.13	2.1	平安前	
1755	3×2	E4°N	5.8	4.3	1.93	2.15	平安中	
1784	2×2	E6°S	4.6	4.1	2.3	2.05	平安後	総柱
1792	(3)×2	E2°S	—	4.4	2.2	2.2	〃	
1793	3×2	E1°S	5.9	3.7	1.97	1.85	〃	
1794	3×2	E11°S	7.0	4.3	2.33	2.15	〃	
1807	3×2	N2°E	6.4	4.6	2.13	2.3	〃	
1815	3×2	E1°N	7.7	4.2	2.57	2.1	〃	
1818	3×(2)	N2°E	5.3	—	1.77	2.1	平安末	
1822	3×(2)	E5°N	6.9	—	2.3	2.0	〃	総柱
第33次調査（6ADE－L）								
1827	(2)×3	E8°S	—	5.4	1.97	1.8	平安末	総柱
1828	2×2	N6°E	4.1	4.1	2.05	2.05	〃	

SB	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
1829	(3)×2	E5°S	—	4.3	2.3	2.15	平安末	
1830	(2)×(2)	(N10°E)	—	—	2.3	2.2	〃	

第34次調査（6AFK−F・G）

1436	(3)×2	E3°N	—	5.0	2.4	2.5	平安前	
1437	(4)×2	E3°N	(8.0)	4.8	2.0	2.4	〃	SB1438より新しい
1438	4×2	E4°N	11.5	4.2	3.0 2.5	2.1	〃	桁行柱間不揃い 東西廂　廂柱間 3.5m
1439	3×2	E2°N	8.1	5.0	2.7	2.5	〃	SB1853、SB1860より新しい
1440	(2)×2	E3°N	—	5.0	2.3	2.5	〃	SB1442より新しい
1442	(2)×2	E3°N	—	4.2	2.1	2.1	〃	
1843	(2)×(2)	(E2°S)	—	—	2.2	1.9	〃	
1848	(2)×2	E2°S	—	3.6	2.3	1.8	〃	
1853	(3)×2	E3°N	—	4.8	2.3	2.4	〃	
1854	(2)×2	E2°N	—	4.2	2.1	2.1	〃	
1860	(4)×3	E4°N	—	7.3	2.4	2.4	〃	南面廂　廂柱間 2.5m SB1853より新しい
1861	3×2	N3°W	5.4	3.6	1.8	1.8	〃	SD1857より新しい
1864	−×2	E3°N	—	3.8	—	1.9	〃	
1865	−×2	E3°N	—	4.6	—	2.3	〃	
1869	3×2	E2°N	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	SB1864より新しい
1435	(3)×3	E3°N	—	9.3	2.5	2.9	平安中	
1441	(2)×2	E3°N	—	5.0	2.4	2.5	〃	
1446	(2)×2	E2°N	—	3.8	1.8	1.9	〃	
1840	3×2	E3°N	7.5	5.0	2.5	2.5	〃	
1841	−×(2)	(E2°N)	—	—	—	2.4	〃	
1846	3×2	N2°W	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	
1866	3×2	E5°N	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	SB1867より新しい
1867	1×2	E3°N	5.2	5.4	5.2	2.7	〃	四脚門
1870	(3)×2	E5°N	—	5.0	2.3	2.5	〃	SB1864より新しい
1871	3×2	N2°W	5.4	3.8	1.8	1.9	〃	SB1870より新しい
1845	3×2	N2°E	5.1	3.8	1.7	1.9	平安後	SB1846より新しい
1872	−×2	E3°N	—	3.2	—	1.6	時期不明	

第35次調査（6AFE−L〜P）

1882	3×−	E4°S	6.4	−	2.13	−	平安末	
1885	3×−	E3°N	6.5	−	2.17	−	〃	SD1889より古い
1886	3×−	E2°N	6.4	−	2.13	−	〃	SD1878より古い
1890	3×(2)	E3°N	6.4	−	2.13	−	〃	総柱(?) SD1878より新しい
1881	(2)×2	N0°E	−	4.2	1.8	2.1	室町	

第35次調査（6AGG−A）

1919	(2)×2	E5°N	−	3.9	1.9	1.95	平安前	
1921	−×2	E2°S	−	3.8	−	1.9	〃	
1917	3×−	N5°W	5.0	−	1.67	−	平安中	SB1918より新しい

SB	規　模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時　期	備　　考
1918	−×2	E5°N	−	3.9	−	1.95	平安中	
1920	−×2	E2°N	−	3.8	−	1.9	〃	
第35次調査（6AGG−G）								
1928	−×2	E1°N	−	4.1	−	2.05	平安前	
1929	(2)×2	E1°S	−	4.0	2.0	2.0	〃	SB1928より新しい
1930	(2)×2	E4°N	−	4.4	2.0	2.2	〃	SB1931より新しい
1931	(2)×2	E4°N	−	4.1	2.0	2.05	〃	
1934	(2)×−	(E3°N)	−	−	2.0	−	〃	
1923	(2)×−	(E1°S)	−	−	1.5	−	平安中	SB1924より新しい
1924	−×(2)	(E3°N)	−	−	−	2.2	〃	
1925	(3)×2	E2°S	−	3.6	1.8	1.8	〃	SB1924より新しい
1926	(2)×2	E0°	−	3.5	1.7	1.75	平安後	
1927	−×2	E1°N	−	3.5	−	1.75	〃	
第35次調査（6AGH−L）								
1985	−×2	E2°N	−	4.6	−	2.3	平安前	
1990	(2)×2	E2°N	−	5.2	2.1	2.6	〃	
1994	−×2	E2°N	−	4.9	−	2.45	〃	
1974	(2)×2	E2°N	−	4.3	2.0	2.15	平安中	SB1977より新しい
1975	(3)×2	E0°	−	4.7	2.1	2.35	〃	
1977	(2)×2	E0°	−	4.4	2.0	2.2	〃	
1978	(2)×2	E1°N	−	3.5	1.8	1.75	〃	SB1980より新しい
1980	(2)×2	E1°N	−	3.9	1.7	1.95	〃	
1991	(2)×2	E2°N	−	4.9	2.4	2.45	〃	
1992	(2)×2	E1°N	−	5.0	2.4	2.5	〃	SB1991より新しい
1993	(2)×2	E2°N	−	4.0	2.3	2.0	〃	SB1992より新しい
1998	(2)×2	E3°N	−	3.6	2.0	1.8	〃	
第31−3次調査（6ABD−A）								
2001	(2)×−	E35°N	−	−	1.80	−	奈　良	
第31−4次調査（6ADQ−T）								
2011	3×−	E4°N	6.40	−	2.13	−	平安中	
2012	4×−	E2°N	9.80	−	2.45	−	〃	
2014	−×2	N1°W	−	4.10	−	2.05	〃	
2015	−×2	E4°N	−	4.50	−	2.25	〃	
2017	−×2	E9°N	−	3.60	−	1.80	〃	
2019	−×2	E3°N	−	4.00	−	2.00	〃	
2020	(4)×2	E3°N	−	3.60	2.17	1.80	平安後	
2010	4×(2)	E2°N	9.70	−	2.43	2.10	平安末	
2013	4×(2)	E1°S	8.60	−	2.15	2.10	〃	
2018	(3)×2	N9°W	(5.4)	4.00	(1.80)	2.00	〃	
2021	(2)×(2)	E5°N	−	−	2.50	2.60	時期不明	

SB	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
第31－5次調査（6ACC－G）								
2046	(3)×(2)	E2°S	－	－	1.90	2.10	奈良	
2045	－×(2)	E10°S	－	－	－	2.10	時期不明	
2047	(2)×－	E0°N	－	－	2.20	－	〃	
第31－6次調査（6ABO－X）								
2050	3×2	E27°S	7.30	4.50	2.43	2.25	奈良	
2051	(2)×2	N40°E	－	3.20	1.60	1.60	〃	
2055	3×－	N35°E	6.20	－	2.07	－	〃	
2060	3×－	N33°E	6.70	－	2.23	－	〃	
第31－7次調査（6AGI－L）								
2065	－×2	E1°N	－	4.00	－	2.00	平安前	
2066	－×(2)	E2°N	－	4.60	－	2.30	〃	
2067	－×(2)	E2°N	－	4.80		2.40	〃	
2070	－×(2)	E6°S	－	－	－	1.60	〃	
第31－8次調査（6ACN－G）								
2075	4×(2)	N8°E	7.20	－	1.80	2.10	平安後	

竪穴住居一覧表

S B	規模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱穴	かまど	時期	備考
第30次調査（6ABJ－M・W・X）							
1615	(8.0)×4.9	E44°N	15	○	東南壁	飛鳥	一部に周溝
1619	－ × －	N35°E	20			奈良	
1640	4.3 ×－	N40°E	40			〃	
1643	－×3.8	E33°S	35			〃	SB1645、SB1644より新しい
1644	4.0 ×－	N36°W	25			〃	SB1645より新しい
1645	3.6×2.9	E21°S	50			〃	
1650	4.2 ×－	E21°S	30			〃	SD1649より古い
1652	3.8×3.5	E18°S	15			〃	
1653	5.8(直径)	－	10	○		弥生中期	円形
1654	4.4×3.6	N31°E	15			奈良	一部に周溝
1655	4.3×3.5	N19°E	25			〃	SB1654より新しい
1665	3.5×2.8	E20°S	30	○	北壁	〃	
1666	4.0×3.5	E30°S	35			〃	SD1663より古い
1670	4.7×3.7	E40°S	15		北壁	〃	SD1668より古い
1672	4.0×3.7	E30°S	30			〃	

S B	規模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱穴	かまど	時期	備考
第32次調査（6ACE−D・E・F）							
1725	4.2×3.7	N20°E	28		北壁	奈良	東壁頂蔵穴
第33次調査（6ADE−D）							
1750	—	—	10		東壁	奈良	
1754	2.8×2.5	N1°W	20			〃	SB1752より新しい
1757	5.1×3.4	E4°N	15		北壁	〃	SB1758、SB1760より古い
1758	−×5.9	(N)4°W	20		東壁	〃	SB1759の拡張か？
1759	−×4.2	(N)4°W	25		〃	〃	土製支脚
1760	6.8×6.0	N17°W	27	○	北壁	〃	一部周溝
1761	—	(N)3°W	13		〃	〃	SB1760より新しい
1762	4.2×3.8	E12°N	8	○	東壁	〃	貼り床
1763	—	—	10			〃	南壁のみ確認
1765	5.1×4.5	N7°W	9		東壁	〃	
1781	3.9×3.5	N4°W	30			〃	
1782	—	—	38		北壁	〃	SB1781より新しい
1785	5.7×4.8	N2°W	37	○	東壁	〃	SB1782より新しい 北壁を拡張、支柱石
1790	3.3×3.2	N0°	29			〃	
1796	4.5×3.2	E5°S	35		北壁	〃	支柱石
1801	3.8×3.1	N1°E	20		東壁	〃	
1809	4.6×3.8	E2°S	25			平安後	
1816	5.9 ×−	(E)11°N	12			奈良	SD1813より古い
1817	4.4 ×−	(E)12°N	27			〃	
第31−3次調査（6ABD−A）							
2005	3.5 ×−	N40°E	28			奈良	
第31−5次調査（6ACC−G）							
2044	4.4×3.5	N5°E	10				

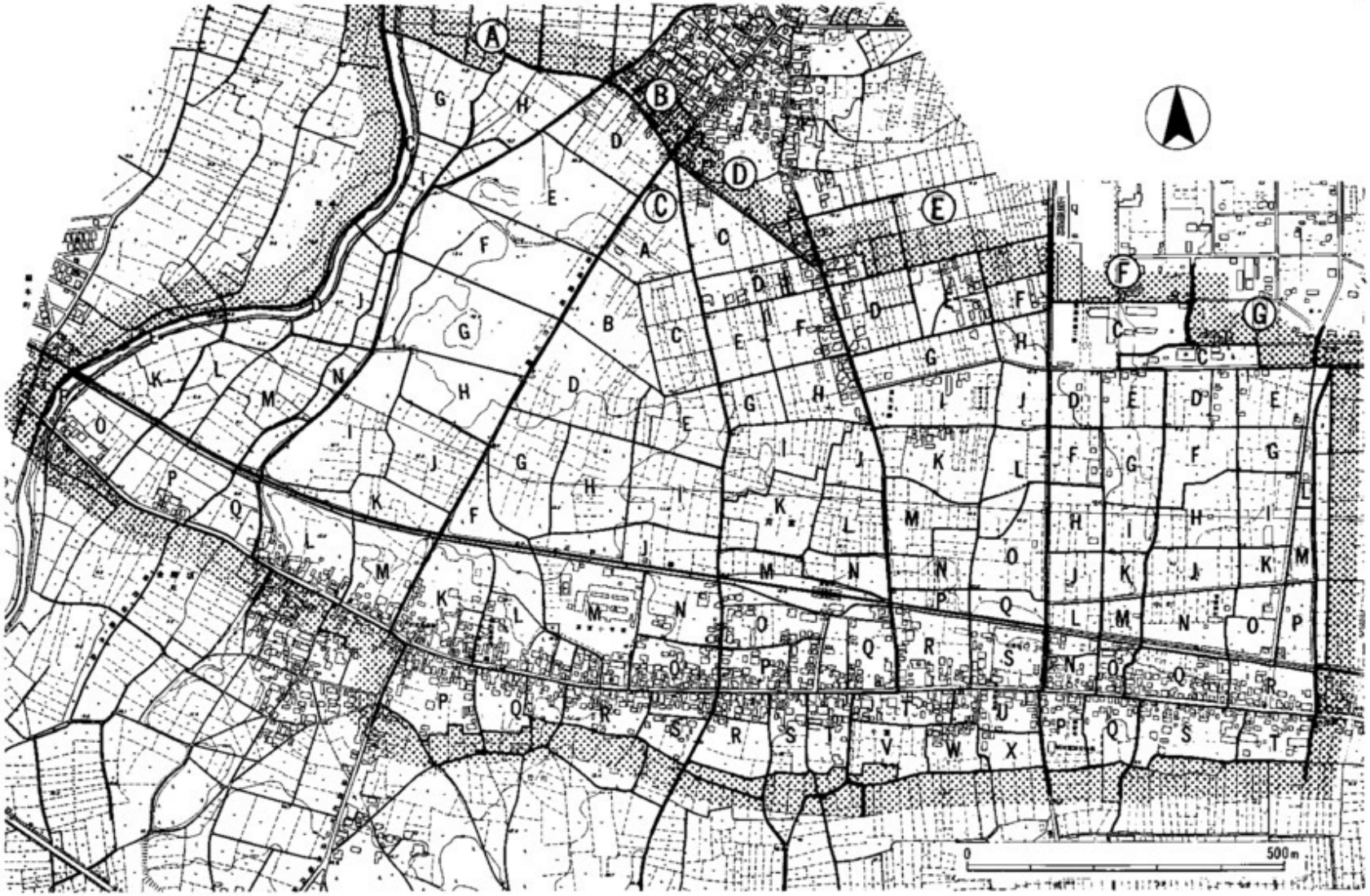
三重県遺跡標示一覧

時代		種別と地区							
0		A 国郡衙		K 北勢		T 伊勢	城
1	先縄文	B 伊勢	寺	L 中勢	墳	U 志摩熊野	砦
2	縄文	C 志摩熊野		M 南勢		V 伊賀	館
3	弥生	D 伊賀	院	N 志摩		W 記念物	
4	古墳	E 北勢	集	O 熊野	墓	X 交通	
5	飛鳥	F 中勢		P 伊賀		Y	
6	奈良	G 南勢	落	Q 伊勢	製	Z その他	
7	平安	H 志摩		R 志摩熊野	造		
8	鎌倉	I 熊野	址	S 伊賀	所		
9	室町以降	J 伊賀					

斎宮跡発掘次数一覧表

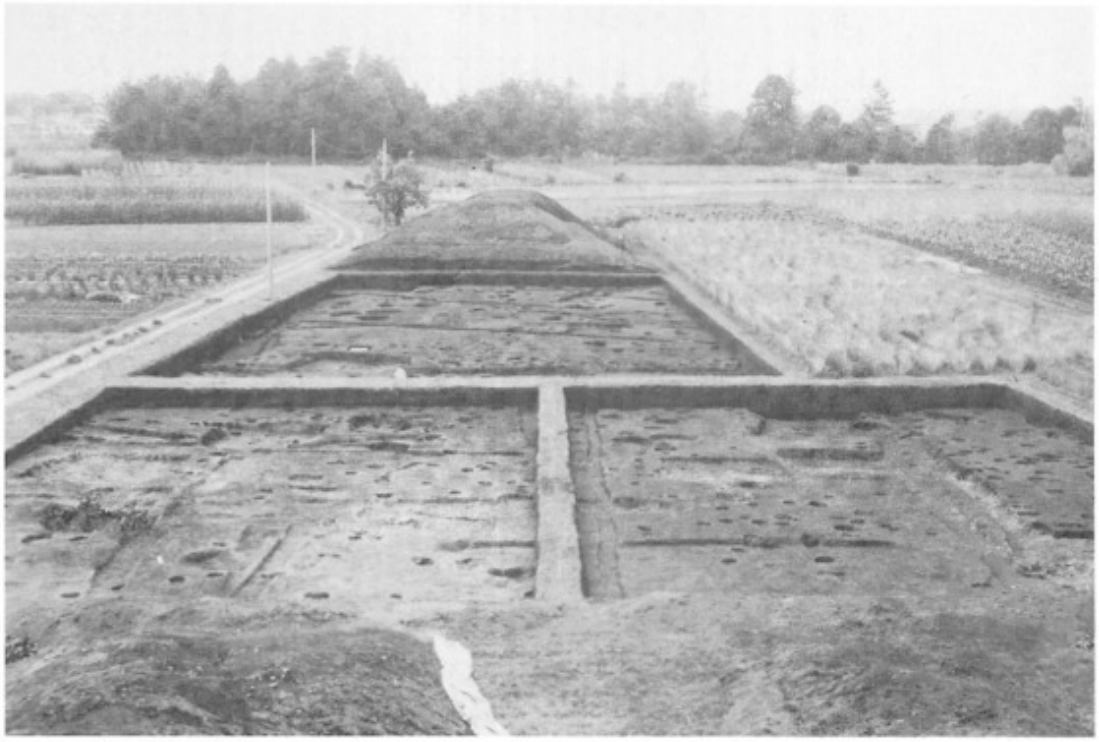
次	年度	調査地区
1	45	試掘
2	46	古里A地区
3	〃	〃 B地区
4	47	〃 C地区
5	48	〃 D地区
6－1	〃	Aトレンチ
6－2	〃	Bトレンチ
6－3	〃	Cトレンチ
6－4	〃	Dトレンチ
6－5	〃	Eトレンチ
7	49	古里E地区
8－1	〃	Fトレンチ
8－2	〃	Gトレンチ
8－3	〃	Hトレンチ
8－4	〃	Iトレンチ
8－5	〃	Jトレンチ
8－6	〃	Kトレンチ
8－7	〃	Lトレンチ
8－8	〃	Mトレンチ
8－9	〃	Nトレンチ
8－10	〃	Oトレンチ
8－11	〃	Pトレンチ
9－1	50	Qトレンチ
9－2	〃	Rトレンチ
9－3	〃	Sトレンチ
9－4	〃	Tトレンチ
9－5	〃	Uトレンチ
9－6	〃	Vトレンチ
9－7	〃	Wトレンチ
9－8	〃	Xトレンチ
9－9	〃	Yトレンチ
9－10	〃	Zトレンチ
10	〃	広域圏道路
11－1	〃	西加座2661－1（山中宅）
11－2	〃	〃 2681－1（山名宅）
11－3	〃	東前沖2483－2（前田宅）
11－4	〃	下 園2926－9（吉木宅）
12－1	51	2Aトレンチ
12－2	〃	2Bトレンチ
12－3	〃	2Cトレンチ
12－4	〃	2Dトレンチ
13－1	〃	東加座2436－7（浜口宅）
13－2	〃	〃 2436－4（中村宅）
13－3	〃	古 里3283 （村上宅）
13－4	51	楽 殿2916～2917（松井宅）
13－5	〃	御 館2974－1（川本宅）
13－6	〃	中垣内 375－1（南宅）
13－7	〃	東裏 328（小川宅）
13－8	〃	西加座2771－1（細井繁久宅）
13－9	〃	〃 2773（細井国太郎宅）
13－10	〃	東裏363－1、362－1（児島宅）
13－11	〃	西加座2681－1（浮田宅）
13－12	〃	〃2721－3、2724－2（森川宅）
13－13	〃	東前沖2506－2（宮下宅）
14－1	52	2Eトレンチ
14－2	〃	2Fトレンチ
14－3	〃	2Gトレンチ
14－4	〃	2Hトレンチ
14－5	〃	2Iトレンチ
15	〃	斎宮小学校
16－1	〃	竹川町道A
16－2	〃	〃 B
16－3	〃	〃 C
16－4	〃	〃 D
16－5	〃	〃 E
16－6	〃	〃 F
17－1	〃	竹神社社務所
17－2	〃	竹神社防火用水
17－3	〃	西加座2721－6（西沢宅）
17－4	〃	楽 殿2894－1（中川宅）
17－5	〃	〃 2895－1（西口宅）
17－6	〃	出在家3237－3（吉川宅）
17－7	〃	〃 3237－1（里中宅）
17－8	〃	楽 殿2894－1（西村宅）
17－9	〃	東海造機
18	53	6AEL－E・I（下園）
19	〃	6AEN－M・N・O（御館）
20	〃	6AEO－I・J（柳原）
21－1	〃	6AGN－B（鍛治山、中山宅）
21－2	〃	6AFI－D（西加座2711－2 2717－4他山路宅）
21－3	〃	6AFD－D（西前沖2649－1大西宅）
21－4	〃	6AFH－F（西加座2678、2679－3森下宅）
21－5	〃	6AGD－K（東前沖、渡部宅）
21－6	〃	6ACA－T（古里3269－2、中西宅）
21－7	〃	6AFE－F（東前沖2631－1鈴木宅）
21－8	〃	6AEG－A（楽殿2909－3大西宅）
21－9	〃	6AED－R（羅林3218－3宇田宅）
22－1	〃	6AGU

次	年度	調　査　地　区
22－2	53	6AGU
22－3	〃	6AGW
23	54	6AEL－B（下園）
24	〃	6AGF－D（西加座）
25－1	〃	6ADP－K(牛葉3029－1、三重土地ホーム)
25－2	〃	6ACA－Y（古里3270、脇田宅）
25－3	〃	6ADD－F(篠林3139－3、池田宅)
25－4	〃	6AER－H(牛葉3014、牛葉公民館)
25－5	〃	6AGN－H(鍛治山2392、丸山宅)
25－6	〃	6AFH－A(西加座2675－5、谷口宅)
25－7	〃	6AEK－V(下園2926－10、奥田宅)
25－8	〃	6AFC－D(西前沖2064－5、山本宅)
25－9	〃	6ACN－C(広頭3387－1、北出宅)
25－10	〃	6AEV－A(鈴池339－1、永鳥宅)
25－11	〃	6ACF－B(東裏364－1、沢宅)
25－12	〃	6AEE－Y(乗殿2892－3、山本宅)
25－13	〃	6AFJ－E(西加座2766－1、山内宅)
26－1	〃	6AFR（中西）
26－2	〃	6AEX～6ACQ(鈴池、木葉山、南裏)
26－3	〃	6AEV・W・X（鈴池）
26－4	〃	6ACR（木葉山・南裏）
27	54	6ACG－S・T（東裏）
28	〃	6AEO－D（柳原）
29	〃	6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ
30	55	6ABJ－M・X・W(中垣内)
31－1	〃	6ADO－M(内山3038－13、岩見宅)
31－2	〃	6ACP－I(南裏227－2、鈴木宅)
31－3	〃	6ABD－A(古里588－4、北藪宅)
31－4	〃	6ADQ－T(牛葉3018－2、百五銀行)
31－5	〃	6ACC－G(塚山3338－3、水谷宅)
31－6	〃	6ABO－X(古里576－1、池田宅)
31－7	〃	6AGI－L(東加座2427－1、竹内牧舎)
31－8	〃	6ACN－G(広頭3388－1、5、8、9森宅)
31－9	〃	6AGD－L(北野2487－1、中川宅)
31－10	〃	6ADM－O(内山3043－3、斎宮跡)
31－11	〃	6ADT－I(木葉山304－2、澄野宅)
31－12	〃	6ADT－J(木葉山304－7、宇田宅)
32	〃	6ACE－D・E・F（塚山）
33	〃	6ADE－C・D他（篠林）
34	〃	6AFK－F・G・H(西加座)
35	〃	6APE他（西前沖）

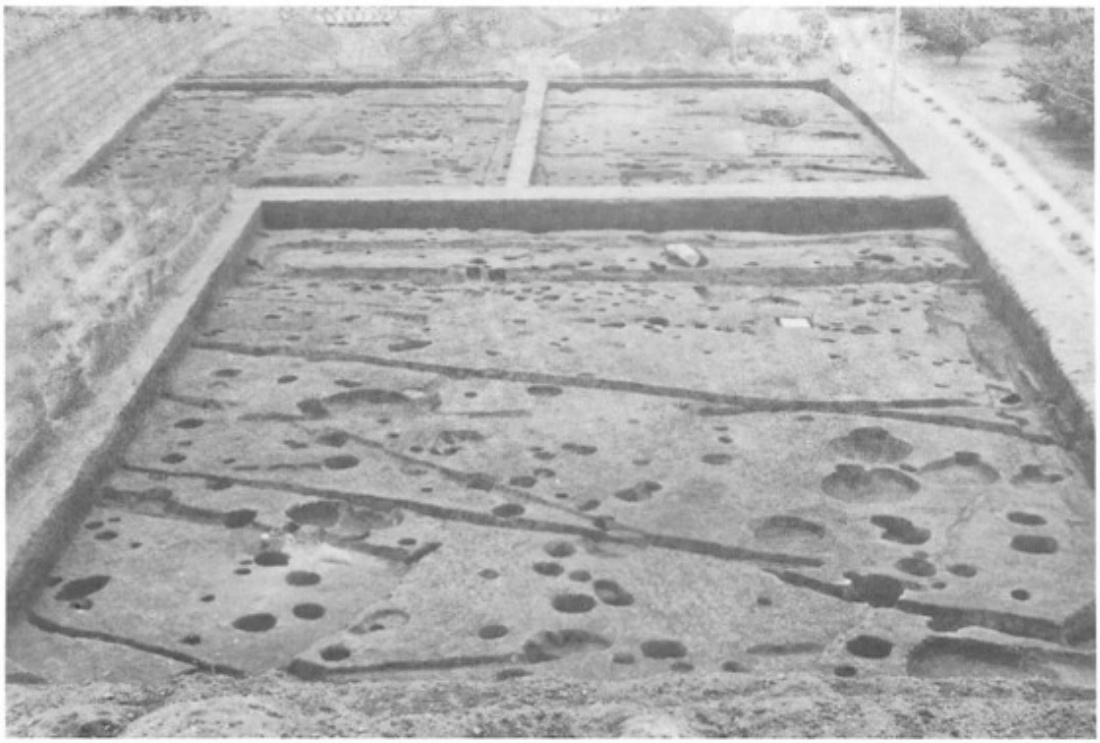


斎宮跡地区表示

図　　版



全　景　　（東から）



全　景　　（西から）

SB1615　（南西から）

SB1665　（南から）

SB1666　（南から）

SB1616　（東南から）

全　景　　（北から）

SB1690　（東から）

SX1699　（北西から）

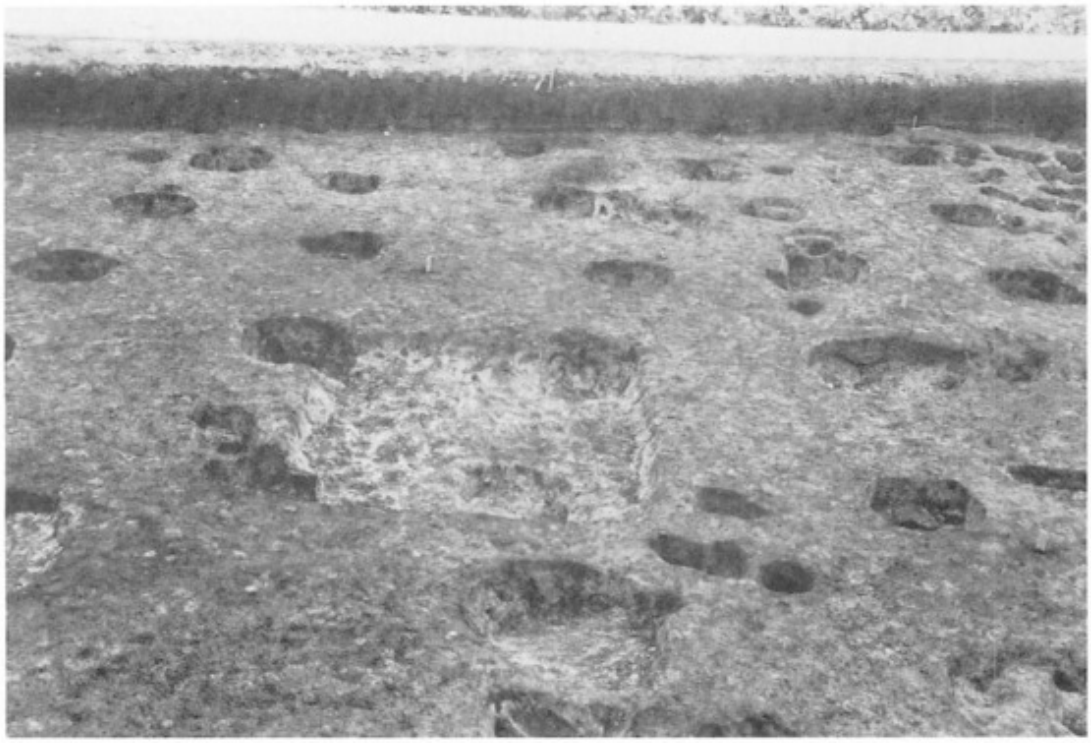
SB1725　（南から）

SK1730　（北から）

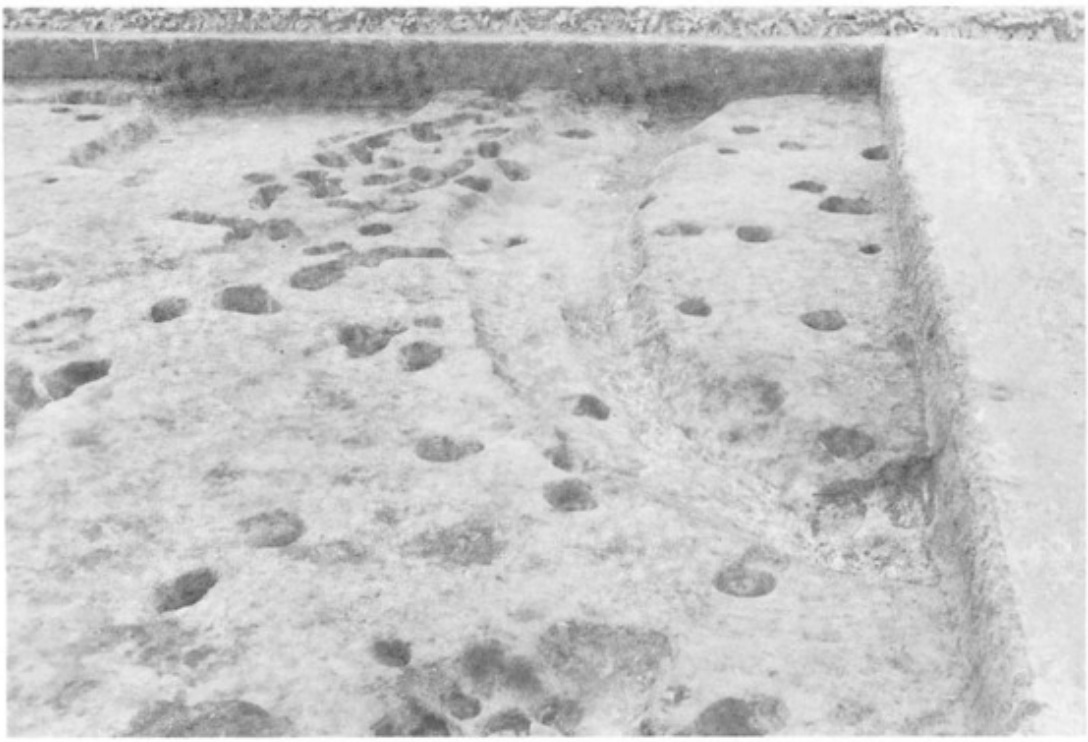
SD1736～1738　SK1732　（東から）

6ADE－D区全　景　　（西から）

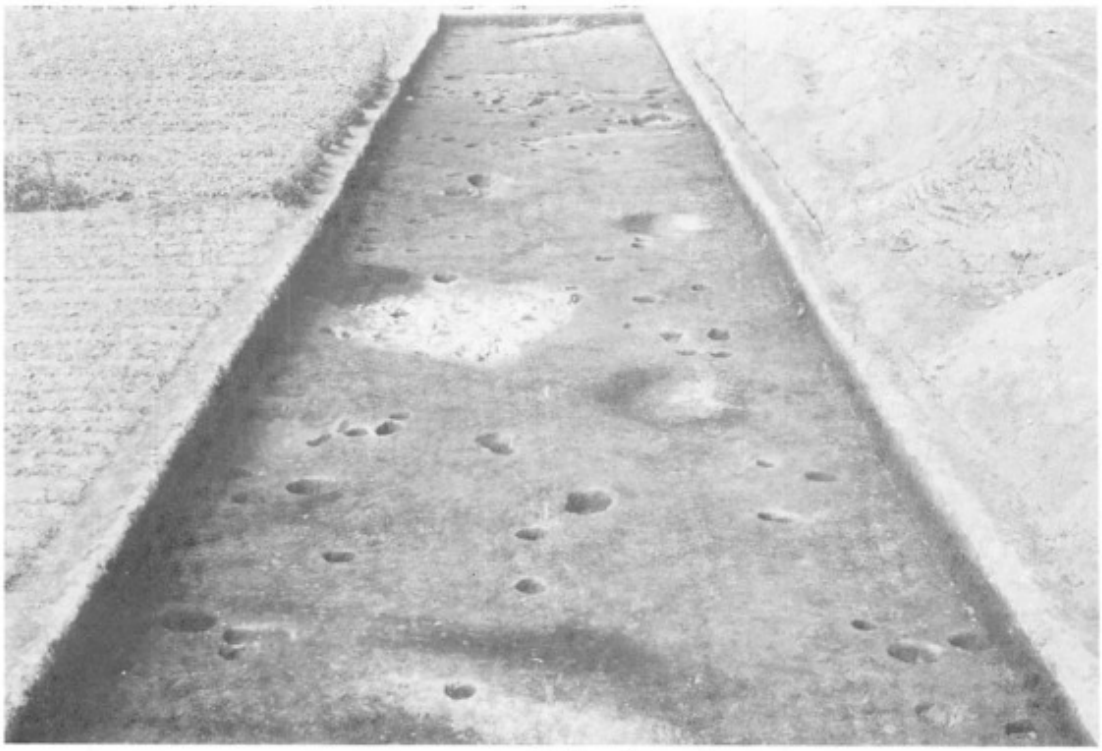
6ADE－D区北東部　（西から）



6 A D E－D区　S B1753　S B1752　S B1754（南から）



6 A D E－D区　S X1819　（北から）



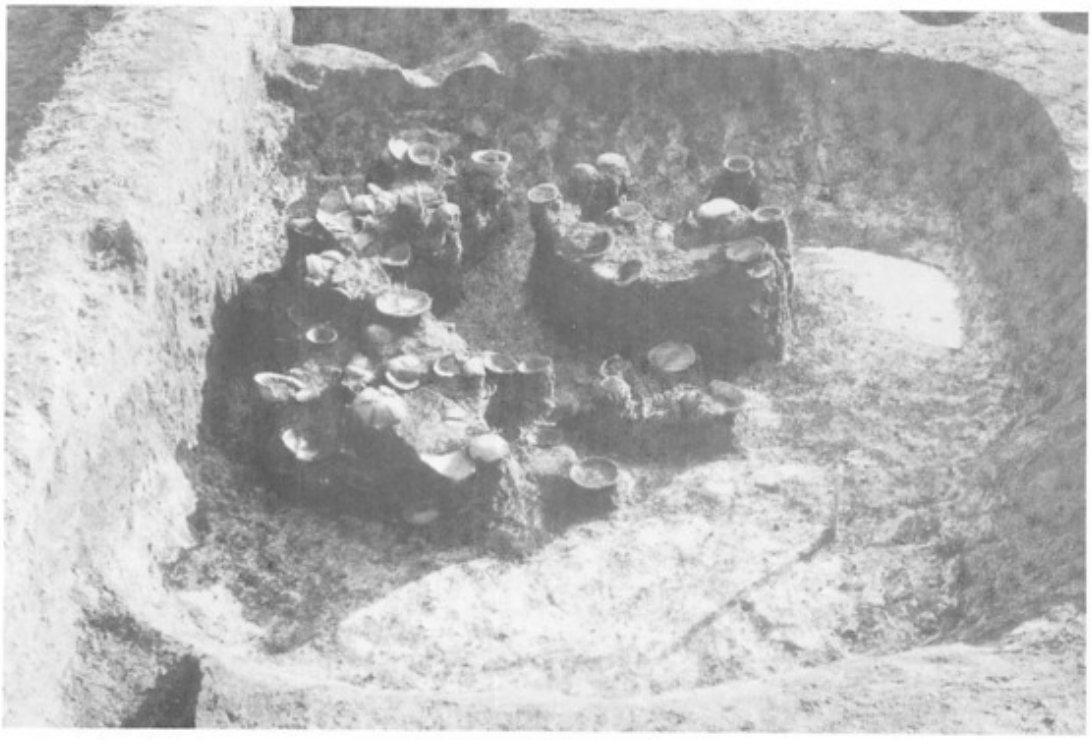
6ADE－L区全景　（南から）

6ADF－L区全景　（南から）

全　景　　（東から）

SB1439　（東から）

SB1860 （西から）



SK1445遺物出土状況（北から）

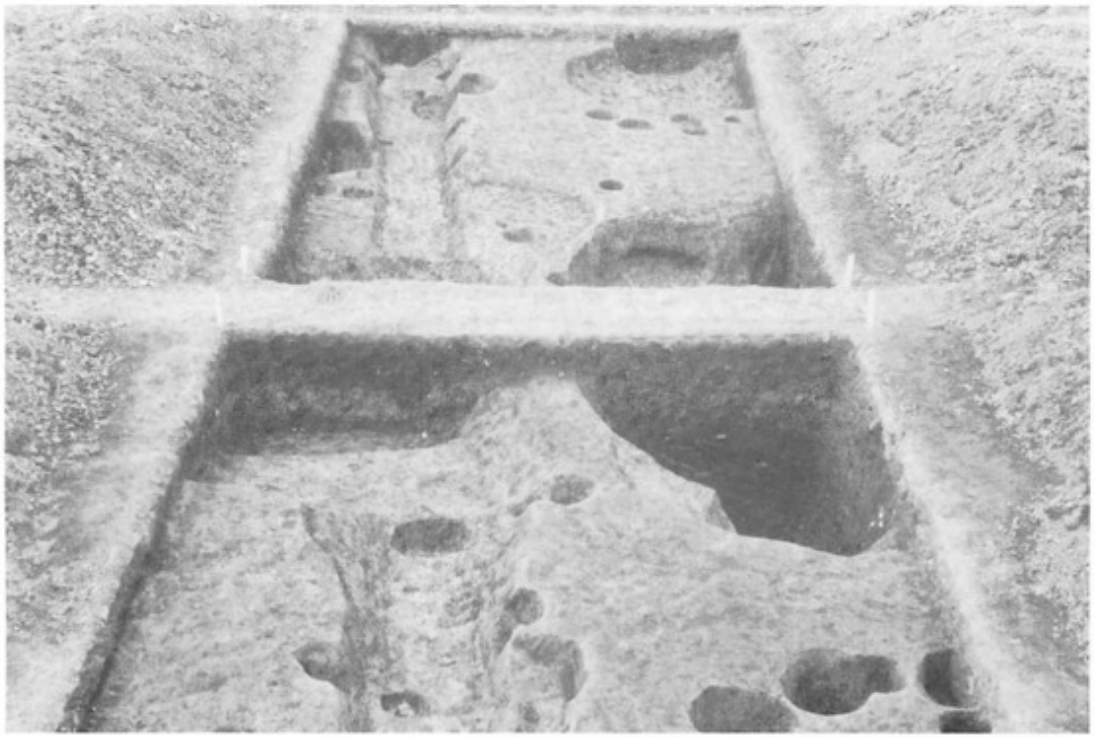
SB1840　（東から）

SB1866　SB1867　（南から）

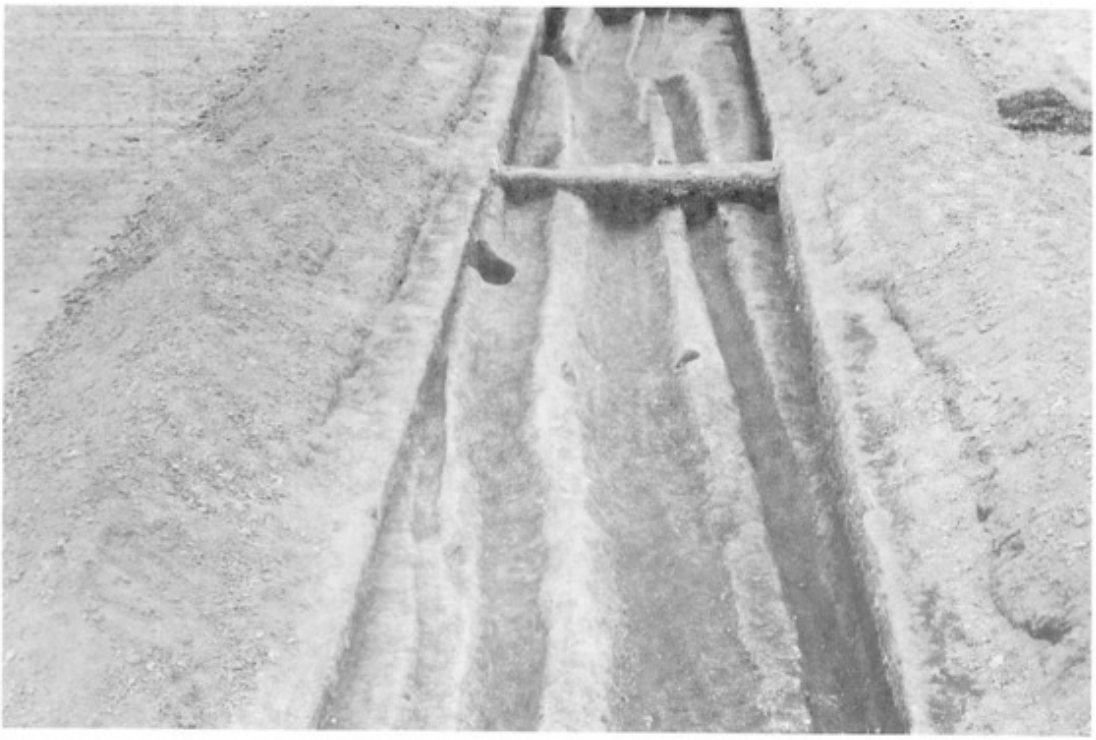
SB1869　SB1870　SB1871（北から）

SB1845　（南から）

6ＡＦＥ地区　（東から）



6ＡＦＥ地区　ＳＫ1876　ＳＥ1880　ＳＫ1879（東から）



6AGD－D・G地区　SD1910　SD1911（西から）

6AGG－A・G地区　（北から）

6AGG－G地区　（北から）

6AGH－D地区　SD1935　SD1936　（北から）

6AGH－C地区　SD1940　SK1947（西から）

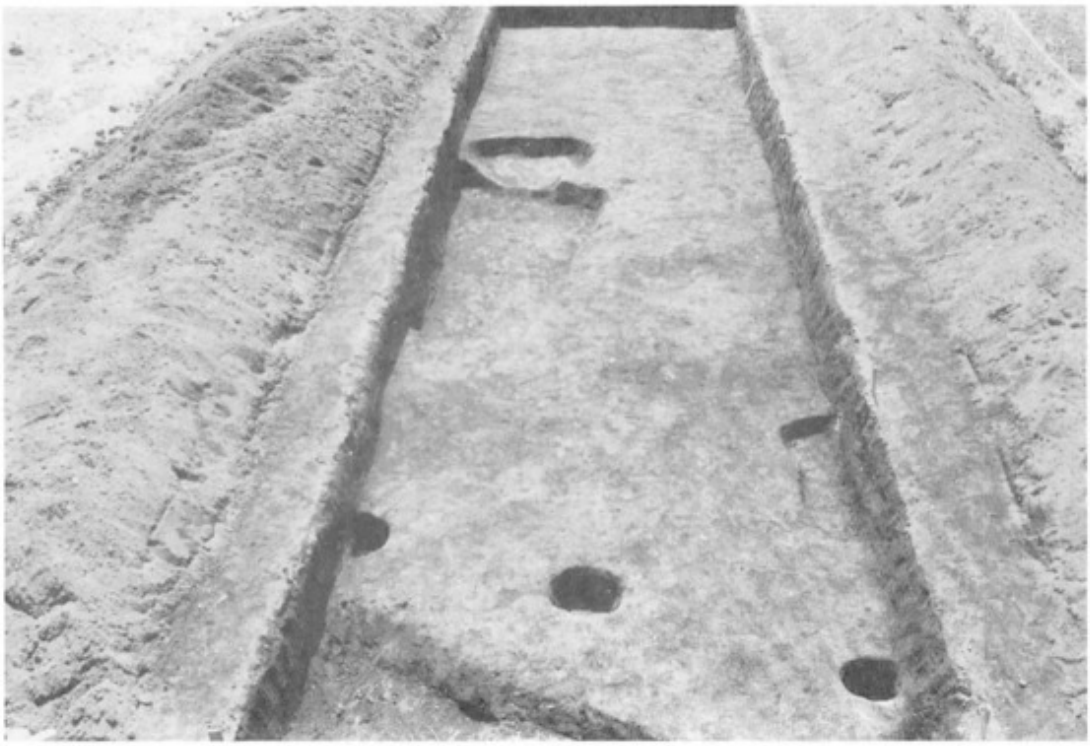
6AGI－A地区　SD1940　（西から）

6AGH－L地区　SK1970　SK1972　SK1976（北から）

6AGH－L地区　SB1991　（北から）

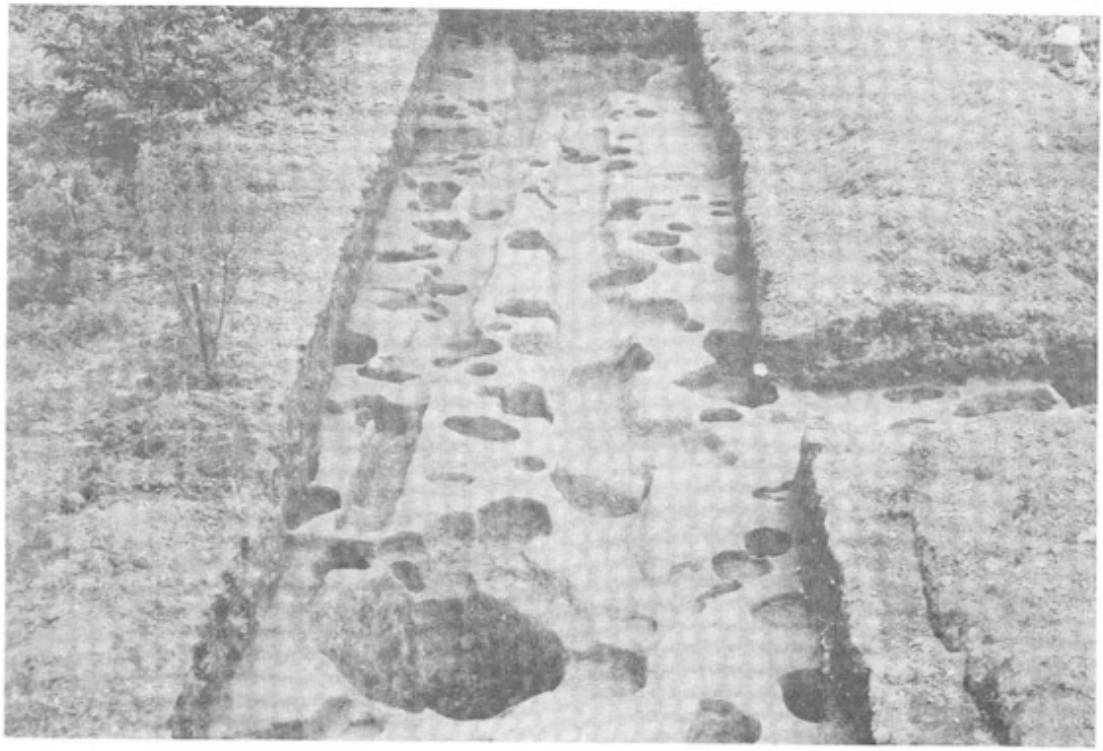
第31－1次調査　（北から）

第31－2次調査　（東から）

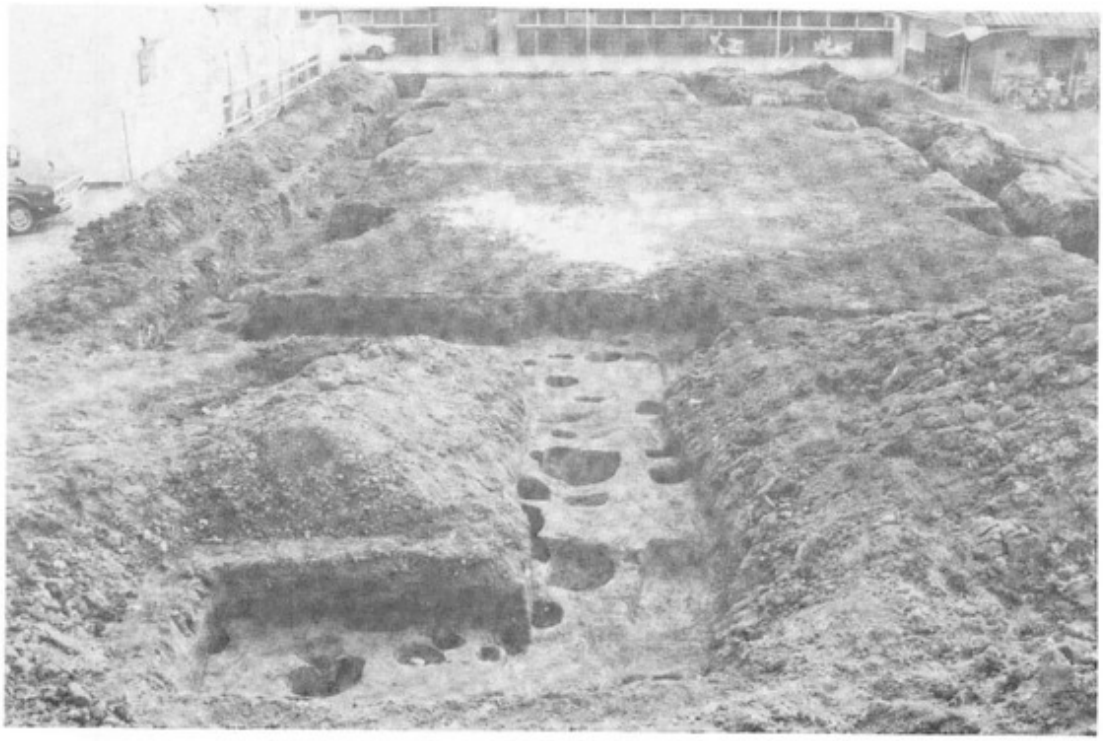


第31－３次調査　（西から）

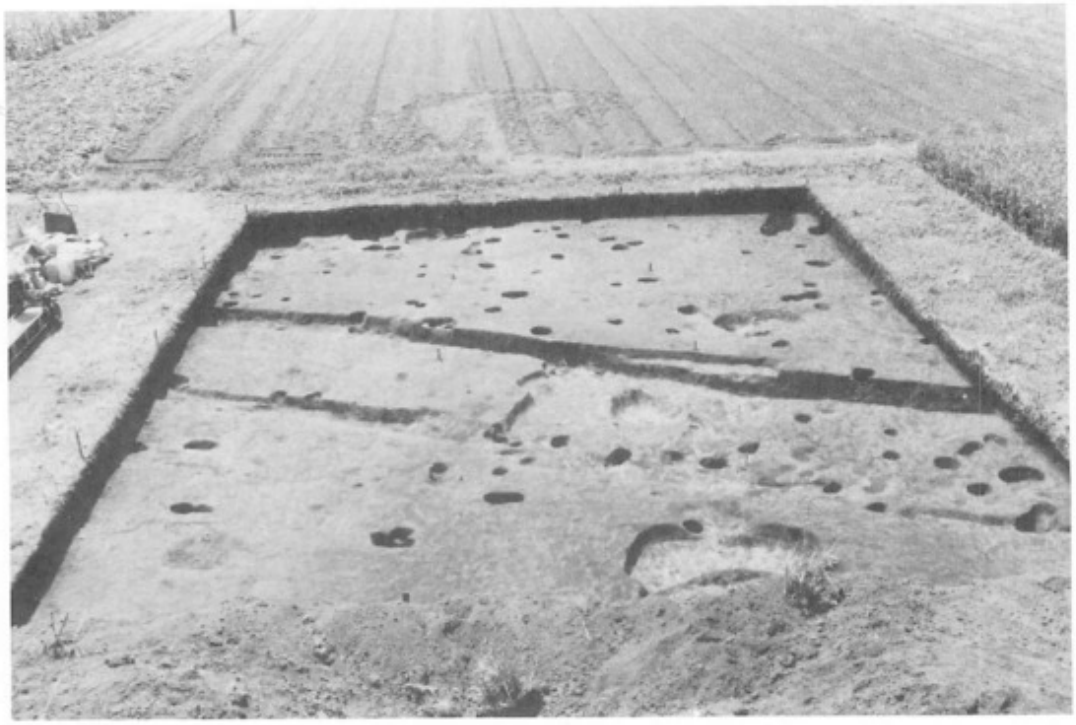
第31－４次調査　（北から）



第31－4次調査　（西から）

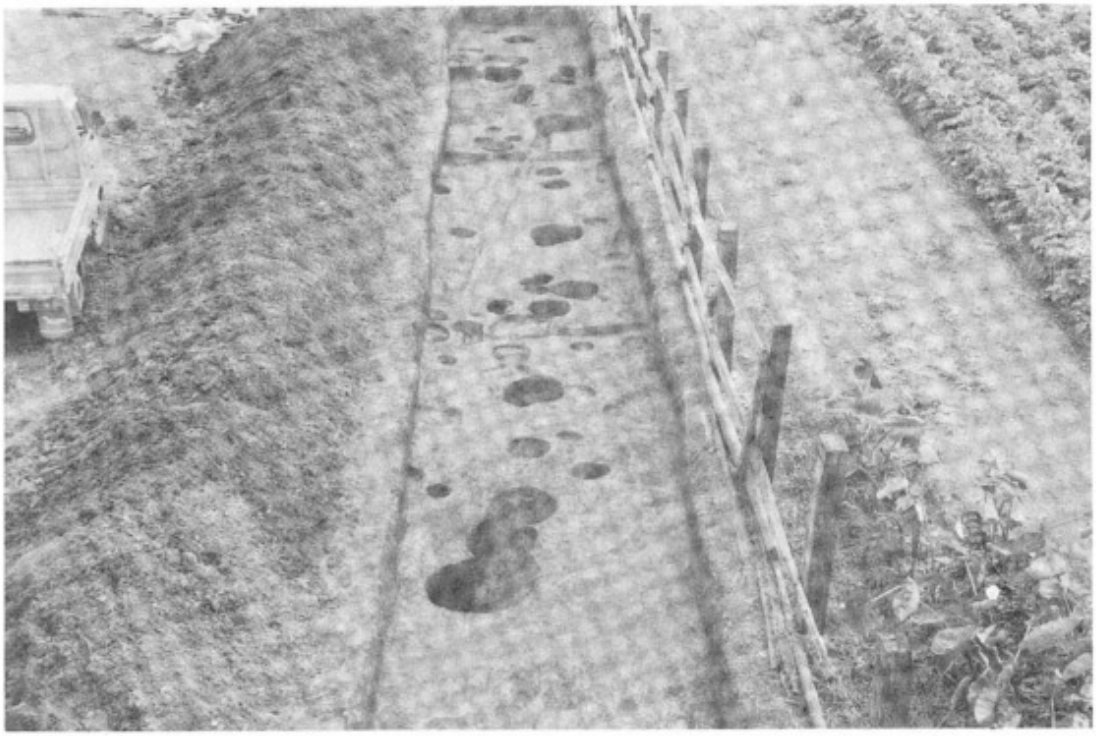


第31－4次調査　（北から）

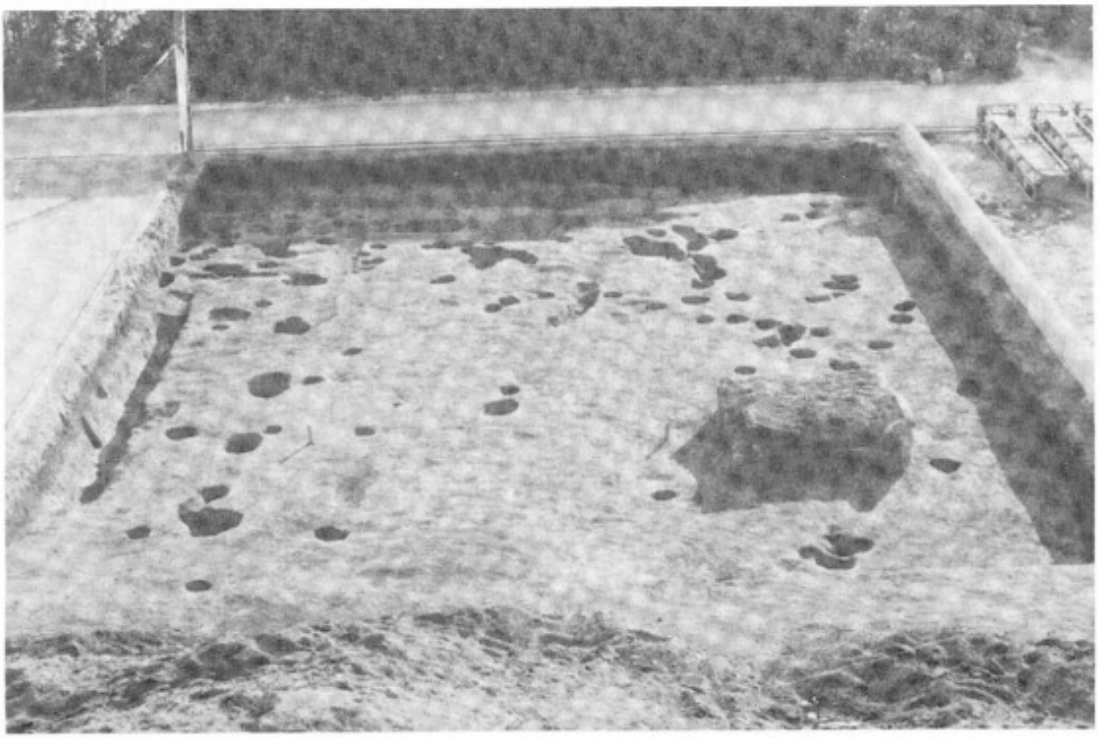


第31－5次調査　（北から）

第31－6次調査　（北から）

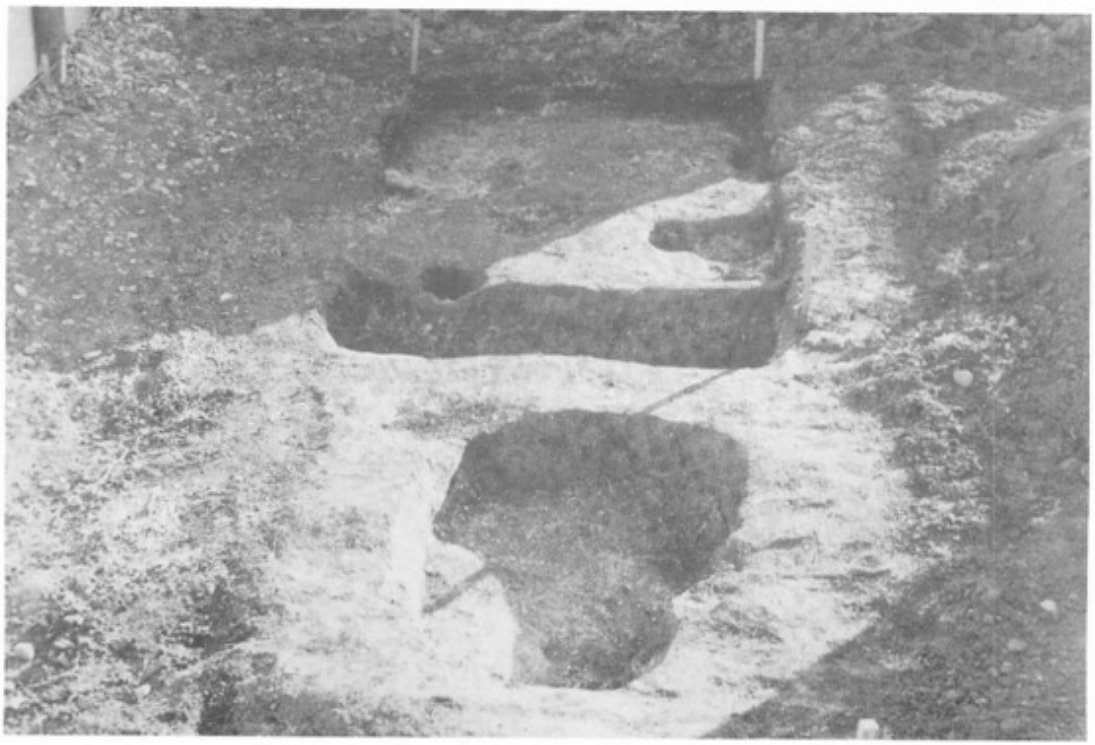


第31－7次調査　（北から）



第31－8次調査　（北から）

第31－9次調査　（東から）



第31－10次調査　（西から）

三重県斎宮跡調査事務所年報1980

史跡斎宮跡

——発掘調査概報——

昭和56年3月31日

編集発行　三重県斎宮跡調査事務所
印　刷　光　出　版　印　刷